

【芥川越水】

爲し、三好政康を芥川に、篠原長房を越水に攻む。二城みな潰ゆ。乃、義昭を越水に奉じて、自芥川に入る。

【池田】

十月、自、池田勝政を池田に攻む。勝政、善く拒ぐ。我が兵、火を繼ちて奮戦し、關を奪ひて入る。勝政、終に降り、質子五人を獻ず。乃、之を宥す。二千貫の邑を加へ賜ふ。高槻、茨木の諸城、之を聞きて、みな降る。三好康長等、河内を奔

池田勝政降る

【高槻茨木攝津】

三好康長阿波に歸る

で、走りて阿波に歸る。信長、事の成りしを義昭に告ぐ。是に於て、信長をして

松永久秀

自邑を擇ばしむ。信長辭して取らず。請ひて之を幕府の功臣に分つ。

筒井順慶

美濃に送る。故を以て、河内を高政、義繼に分ち、攝津を親興、勝政、及び和田惟政に分つ。久秀をして志貴城に居らしめ、以て大和を定む。筒井順慶を攻む。順慶降る。信長、自、使を界浦、大津に置きて、乃、京師に歸り、清水寺に陣す。

是の時に當りて、京畿の將士、調を信長に執りて、軍門市の如し。朝廷、信長の功を論じて、從四位下に叙し、左兵衛督に任ず。信長、辭して曰く、「臣、天の道を以て、強賊に克を得たり。敢て攘みて功と爲し、以て顯爵を辱くせんや」と。乃、從五位下に叙し、彈正忠に任ず。義昭、私に信長を以て管領となし、號を副將軍と

信長顯爵を辭す

賜ふ。皆辭して受けず。義昭、成事を賀して、散樂十三曲を其第に張らんと欲す。信長諫めて曰く、「方今、凶賊纒に服するも、四方未だ平ならず。此れ優游の秋に非ざるなり。且、諸軍士、歸るを思ふ者多し。宜しく式の如くにして止むべきなり」と。乃、省きて五曲となす。即日、兵を釋き、畿内の關寨を撤して、以て行旅に便す。遠近悦服す。義昭、信長の功ありて賞なきを病ひ、書を爲りて之を褒め、信長を呼びて父と曰ふ。信長、乃、岐阜に歸る。

十二年

十二年正月、三黨、齋藤龍興等と、義昭を本國寺に圍む。信長、警を聞き、單騎赴き援く。至れば則已に平々。諸國の兵、後れ至る者五萬と云ふ。信長、初め畿内の豪戸に令して金を足利氏に納れしむ。獨界浦、命を奉せず。又三黨を資く。信長、界浦を屠らんと宣言す。浦人、號哭して哀を乞ふ。乃贖金二百貫を上らしむ。二條の武衛陣の故址に就きて、幕府を拓修す。四月、成る。義昭をして之に居らしめ、以て寇賊に備ふ。

幕府を拓修す

是に於て、信長、村井貞勝、島田秀滿、僧日乘等を召して、之を諭して曰く、「應仁以來、天下大に亂れ、王室衰微し、宮闕廢す。凡王土に居り、王臣たる者、誰か嗟悼せざらん。信長夙に修舉の志あり。兵亂倥傯、延きて此に至る。今や畿

宮闕を修理せんとす

邦文日本外史卷之十三

信長近畿を略す

北畠具教を攻む  
【大河内】伊勢

信雄

信孝

信包

皇宮の工事を戒む  
赤黒の母衣

元龜元年

内相定まる。當に禁内を修めて、以て帝座を安くすべし。然りと雖、亂後役を興すこと、急迫にす可からず。恐らくは民情を擾さん。宜しく漸を以て之を成すべし」と。乃木下秀吉を留めて、京師を守らしめて歸る。遂に近畿の諸國を略す。七月、兵を遣し、伊丹親興、池田勝政を以て、先鋒と成し、但馬を略し、山名氏を攻む。八月、自兵五萬を將ゐて伊勢を略し、北畠具教を大河内に攻む。旬餘にして、具教の將柘植某、歎を信長に送り、具教を殺して、以て我が兵を啓く。信長、柘植を縛し、之を數めて曰く、「汝、人臣と爲りて、其君を弑して以て敵に降る。容る可からざるなり」と。乃斬りて以て徇ふ。次子信雄を以て、北畠氏の後となし、大河内に居らしめ、十萬石を食ましむ。三子信孝を神戸氏の後となし、神戸城に居らしめ、弟信包を上野城に居らしめ、各五萬石を食ましむ。信雄、幼字は茶筌といひ、信孝、幼字を三七といふ。皆庶出なり。十一月、信長、徑に京師に入り、皇宮の工事を戒む。是の歳、赤黒の母衣各十騎を置き、將士の子弟にして材武なる者を以て之に充つ。元龜元年二月、京師に入る。四月、散樂を將軍の新第に張りて、大に徳川氏以下の諸將領を會す。義昭、爲に奏し請ひて、信長の官爵を進めんとす。信長、固く辭

朝倉義景

淺井長政

【小谷】近江

【朽木谷】近江  
朽木元綱

佐久間信盛

備前賢秀  
【千種路】伊勢

す。朝倉義景、命を拒ぐを以て、自往きて之を討ち、敦賀に至り、手筒城を攻め、一晝夜にして、拔きて之を屠り、進みて金崎を攻む。守將朝倉景恒を降し、以て先導と爲し、遂に國內を定めんと欲す。會淺井長政、六角氏の餘黨を招き、義景と約し、挟みて信長を撃つ。長政は小谷の城主にして、信長の妹婿なり。信長、報を得て信せず。警聞益至る。信長、乃、若狹より京師に入らんと欲して、義景の追躡を恐る。木下秀吉、自留りて備へんと請ふ。信長、壯なりとして之を許す。諸將をして、人毎に三四十騎を出し、以て秀吉を助けしめて、兵を引きて西す。徳川公、殿たり。朽木谷に至る。朽木元綱、甲を被り兵を率ゐて迎ふ。信長、其異心あるを疑ふ。松永久秀曰く、「臣請ふ、往きて之を質さん。即他あらば之を刃して死せん」と。乃、馳せ往きて元綱を諭す。元綱、甲を脱ぎ兵を撤して、以て信長を饗し、送りて京師に至る。秀吉も亦至る。信長、乃、義昭の爲に京畿將士の質を徵す。近江の地を割きて、森可成をして、志賀、宇佐山を守らしめ、柴田勝家をして、長光寺を守らしめ、佐久間信盛をして、長原を守らしめ、木下秀吉をして長濱を守らしめ、美濃に歸る。敵兵、鯉江、市原に要すと聞きて、乃、備前賢秀等を以て嚮導と爲し、千種路に

杉谷善住

由りて歸る。六角義賢、銃を善くするもの、杉谷善住をして山木の中に伏せしめ、信長の過ぐるを狙ひて連に二丸を發し、其衣の袖に中つ。從兵愕き之を索めんと欲す。信長許さず。金森長近、密に信長と衣を易へ。其輿に乗りて歸り、終に岐阜に達る。

六月、六角義賢、土寇を糾合して野洲川に出づ。勝家、信盛、邀へ撃ちて之を破る。各三萬貫を加賜せらる。淺井長政、朝倉義景、比長、刈安に壘して、近江の驍將堀某、樋口某をして、釜川の城を守らしむ。信長、誘ひて之を降さんと欲す。美濃の人竹中重治、信長の爲に二將に説きて曰く、「子、城を守る者は、何をか爲さんと欲す」と。曰く、「功を立てんと欲す」と。曰く、「功を立て、以て何人の爲にするや」と。曰く、「淺井、朝倉氏の爲にす」と。曰く、「織田君は、天子、將軍の爲に義兵を起す。然るに二氏之を助けずして、其危に乗じて之を圖らんと欲す。是れ天下の切齒する所なり。而るに子之が爲に功を立てんとす。士たる者は固より此の如きか」と。二將、乃、重治に因りて降り、各質子を獻す。信長、以て先導と爲し、自、將として之に繼ぐ。諸壘みな解きて走る。乃、長政を小谷城に攻む。城甚險なり。森可成、阪井政尙等、城兵と雲雀山に戦ひて之を破る。信

堀、樋口降る  
小谷城を攻む

佐佐成政  
梁田出羽  
中條將監

〔大寄山〕

淺井半助

長、諸軍を引きて虎姫山に上り、城を攻むるの策を議す。佐久間信盛進みて曰く、「之を抜くこと難からず。恐らくは我が兵を損せん。主君、身を以て天下に任す。何ぞ此に必せんや」と。信長、乃城の四面を焚きて返る。佐佐成政、梁田出羽、中條將監をして殿を爲さしむ。梁田勝家曰く、「此輩、兵千に盈たず。盡ぞ臣若くは信盛に命せざる」と。信長曰く、「否、大兵險地に敗れば、復收む可からず。故に此三人に命ず。且吾れ自留りて之を號令せん。卿等先去れ」と。乃、自近臣二百騎を引きて、返りて三人を助く。三人之を辭す。迭に殿して退く。城兵尾擊す。三人且戦ひ且卻き、遂に軍を全くして歸る。遂に横山城を攻む。城將、急を長政に告ぐ。長政、援を義景に乞ふ。義景、族景健をして先往かしめ、兵二萬餘騎を合して大寄山に軍す。我が兵之を望みて、城を攻むる益急なり。長政、景健、議して曰く、「吾れ朝倉公を待ちて戦はむ、恐らくは城守られざるなり。宜しく急に之を救ふべし。今、信長、龍鼻に陣す。此を距ること五十町。直に馳せて之に赴かば、人馬みな疲れん。吾れ且日移りて三田に陣し、曉に乗じて其中軍を襲はむ、彼必驚擾して、敗れざる莫けん」と。淺井半助進みて曰く、「臣、嘗て美濃に遊びて稻葉氏の客と爲り、信長の將略を視たるに驚擾する者に非ざる

遠藤

なり。公の計中らざるを恐るゝのみ」と。遠藤某奮ひて曰く、「彼れ何ぞ畏るゝに足らん。公、第進み戦へ。吾れ敵兵に雜り信長と決せんのみ」と。議乃決す。信長、夜、大寄山を望み、顧て宿直の諸將を呼びて曰く、「柴田、木下、佐久間、在るか」と。皆答へて曰く、「在り」と。信長、乃召して之を前ましめ、指示して曰く、「北軍、炬火、徹宵す。是れ將に曉に乗じて、我を襲はんとするなり」と。乃令を下し軍を勅し、十三隊と爲す。阪井政尚、池田信輝等、先鋒となりて、以て長政に當り、徳川公、獨其兵を將りて朝倉氏に當り、稻葉通朝之を助く。丹羽長秀を留めて城兵に備へしめ、而して兵を引き西向す。天明、北軍に姉川に遇ふ。北軍大に驚く。政尚、信輝、進み戦ひて利あらず。信長、氏家經國、伊賀經俊をして、其横を撃たしむ。通朝、顧て之を助け、大に長政を破る。而して景健も亦大に敗れ走る。其驍將遠藤、真柄等の十餘人を獲たり。首を斬ること三十餘級。横山以下の諸城みな解きて走る。秀吉、勝に乗じて、小谷を取らんと欲す。信長許さず。母衣騎をして、令を傳へ、軍を收めしむ。親、戦功の將士を論賞す。遂に磯野員正を澤山に攻む。成を置きて捷を京師に獻じ、遂に岐阜に歸る。

三好の三黨

姉川役

磯井、朝倉敗走す

一向の僧徒

前田利家

【三城】野田、福島、大阪

森可成戦死す

將として之を討つ。九月、天満林に陣す。義昭、中島に陣す。壕を埋め、陣に薄る。而るに一向の僧賊、大阪を以て賊に應ず。信長曰く、「彼の長袖なる者、何ぞ能く爲さん」と。佐々成政を遣して、赴き拒がしめて、自之に繼ぐ。成政等、矢石を冒して進む。將領多く死す。我が兵潰え走る。賊軍之に乗ず。前田利家、鎗を揮ひて、大に呼びて、手づから數十人を殪す。賊、辟易して去る。利家、幼より信長の近士と爲り、旨に忤ひて逐はる。私に軍に従ひて先登して、首級を獲ること數なり。信長乃之を復し、擢で、尾張荒子の城主と爲す。是に至りて、力戦して、以て信長の軍を全くす。信長の軍、方に三城の間に困しむ。淺井長政、朝倉義景、之を時とするや、兵三萬を合せて、比叡嶺に軍し、將に阪本を焚かんとす。宇佐山の城將森可成、出で拒ぎて、之に死す。信長の弟信治、及び尾藤某、道家某、みな死す。北軍遂に宇佐山を攻む。留後、武藤等、能く拒ぐ。北軍乃大津を過ぎ、火を醍醐、山科に縱つ。信長、警を聞きて曰く、「吾れ藉三城を拔くを得るも、奴輩をして、京師を蹂躪せしめば、則我が耻なり」と。乃、攝津、河内の諸將をして、三城に備へしめて、還りて之を救ふ。三城の兵、大に起りて之に尾し、舟を江口渡に奪ふ。諸軍之を思ふ。信長、自岸より視て曰く、「水淺し。渡る可し」と。

北軍叡山に陣す

乃流を亂して皆濟り、軍を整へ、徐に退く。敵敢て逼らず。遂に京師に達す。且日、北軍に向ふ。北軍驚きて、叡山に上りて陣す。信長、志賀、宇佐山に陣し、兵を分ちて叡山を攻め、毎夜襲ひ撃つ。而して人をして、其僧徒に説かしめて曰く、「汝等能く彼を捨て、我を助けば、則、他日汝の寺封をして、故の如くならしめん。否らずば、則中立して倚らず、助くるある莫れ。二者聽かずば、他日必火を縦ちて山を赭し、僧徒を塵殺して一人をも釋さじ」と。僧徒聽かず。

十月、信長、菅谷長頼、佐佐成政を遣して、北軍に言はしめて曰く、「吾れ公等と相持して日を曠しくす。士卒の勞倦を若何せん。請ふ、一戦以て勝敗を決せん」と。長政等答へず。六角義賢、近江の土兵を糾し、將に夾みて信長を攻めんとす。木下秀吉は横山より、丹羽長秀は澤山より來り援ひて、行、土兵を破りて、志賀に至る。信長、樓に登りて之を望みて、驚きて義賢至ると爲す。至れば則秀吉、長秀なり。二人首級を以て、謁して曰く、「北人深く入りて此に至る。自死を送るのみ。請ふ、之を擲撃し、一騎をも還らしむる莫れ」と。信長大に喜ぶ。長政等と和を請へども許さず。六角義賢來り降る。

十一月、堅田の人猪飼甚介等、信長に屬し、一將を得んと諸ふ。阪井政尙、自請

六角義賢降る

北軍和を請ふ

二年

一向宗徒  
長島小木江  
伊勢

ひて往く。北軍來り争ふ。政尙、力戦して之に死す。會大雪ふる。北軍、歸路の梗るを慮り、數和を請ふ。許さず。乃之を義昭に請ふ。義昭、親、信長の營に來りて之を言ふ。信長、乃之を聽す。各兵を解きて國に歸る。

二年二月、磯野秀昌、澤山を以て長秀に降る。五月、淺井長政、二萬騎を以て、箕浦を攻む。秀吉赴き援け、撃ちて之を卻く。

是より先、一向の賊、長島に起りて、信長の弟信興を小木江に攻めて之を殺す。五月、信長、長島に入り、火を縦ちて退く。賊、風雨に乗じ嶮に迫りて要撃す。氏家經國、之に死す。

八月、柴田勝家を以て先鋒と爲し、近江に入る。小谷、山本の間に出で、火を縦ちて退く。兩城の兵八千、出で、之を躡す。勝家、返り戦ふこと三次。敵復出せず。信長、再發して、攻めて新村を抜き、小川、常樂寺を下す。

九月、勢田に陣す。諸將に命じ、火を縦ちて叡山を焚かしむ。諸將みな色を失ふ。佐久間信盛等諫めて曰く、「桓武帝、此寺を創建してより、此に幾千年、王城の鎮たり。敢て或は犯す者なし。今にして之を滅す、其れ之を如何」と。信長曰く、「吾れ國賊を除くのみ。汝が輩、何ぞ我を沮むや。吾れ四海を定め、王道の衰へ

兩城野田、  
頭島

叡山を燬く  
明智光秀

たるを興さんと欲し、筋骨を勞し軀命を輕んじ、未だ嘗て一日も安居せず。去歲攝津を略し、兩城將に陥らんとす。長政、義景、兵を擧げて我が後を窺ふ。吾れ兩城を捨て、返る。之を山上に棲ましめて、將に之を殲さんとするなり。人を遣して、僧徒に諭すに禍福を陳説す。而れども彼れ竟に服せず。務めて凶徒を右けて以て王師を梗ぐ。此れ國賊に非ずや。今にして其除を行はずば、乃患を天下に貽さん。且聞く、彼れ其律を犯し、輩を茹ひ妾を蓄へ、誦咒を東關す。安ん其王城を鎮むるに在らんや。圍みて之を燔き、遺類あらしむる勿れ」と。諸將乃服す。明日、叡山を圍み、中堂及び二十一社を燔き、僧徒、婦女、老少となく皆之を斬る。志賀郡を以て明智光秀に賜ひ、阪下に城きて之に居らしめて、岐阜に歸る。丹羽長秀をして、高宮某を澤山に誅せしむ。其大阪に通じたるを以てなり。

太閤記(信長燬比叡山)

去程に、信長脚は岐阜の城に在りて、暫く兵士の勞を休められけるが、元龜二年八月十八日、淺井長政を討つべしとて五萬餘騎を引率し、江州志村の城、小河の城、金崎の城を責落し、瀬田に暫く滯留ありて、九月十三日俄に惣勢を以て比叡山を取圍み、只一息に責崩さんと四方より攻登る、是はさいつころ比叡山の衆徒、淺井、朝倉に同心し、信長脚に敵對せし恨を報い給ふ也。山門の衆徒等思ひまうけぬ事なれば、大に驚き、谷々嶺々の切所に支へ防ぎ戰ふと雖、

纒に三千人の衆徒なれば、信長が大軍に攻立てられ防ぐ事能はず、道を求めて遁れ去る、織田勢勇み進んで金鼓を鳴らし、鬨を作りて責登り、山中の寺々に火を放てば、折節風烈しく吹發り、火炎天を焦し黒煙一山に充ち、さし建連ねたる山王二十一社を始めとし、大殿、佛閣、經藏、鐘樓、寺々院々に火移り、年久しき靈像、作佛、唯一片の煙となり、山門破滅の有様こそ言詁に難えし次第也。信長の大軍煙の中より駈登り、逃げ殘る僧徒等を爰の岩根彼所の谷蔭に突殺し、追詰めく討ちける程に、死人の山を築きにけり、大將信長勇み、勇みて東阪本大鳥井より責登り、阪中に至り給ふ、爰に山門第一の惡僧金剛坊といへる強弓の精兵あり、怨敵信長を討取らんと、谷を隔て、樹蔭に忍び、一尺二寸の鐵すげたる大矢の十五束なるを、五人張の弓に打番ひ、忘る、計引紋り切て放つに、矢頃遙に遠かりければねらひ下りて、信長の馬の太腹射通したり、信長早業の大將なれば馬よりひらりと飛下り傍なる岩に尻かけて、猶も士卒を下知し給ふ、金剛坊は大事の矢を射損じ、心苛ちて二の矢を射んとする所に、後の方より大音にて、金剛坊暫く待たれ候へと聲を懸けて切て放つ鳥銃、陰と響きて聞えけり、金剛坊驚いて是を見れば、杉谷の善住坊、去年信長を打損じ重る恨を露さんと、これも木蔭に忍び居て狙ひ打ちにぞしたりける、好運に乗じたる信長脚、さしも名を得し金剛坊、善住坊が矢玉なれども悉く狙下り左の股を打ちかすつて御身は更に恙なし、織田の從兵是をみて、此谷のそなたにこそ曲者の籠りたるぞ、打殺せよと云程こそあれ、三百餘人鳥銃の筒を揃へ茂りたる木の中、霞の如く打入るれば、兩人の惡僧天なる哉と歎息し、谷間傳ひに遁れ去りぬ、されば山門三千の衆徒は討れ、又は落行き、堂塔燬らざ灰

皇宮成る

是の歳、皇宮成る。信長金を京畿の豪戸に貸し、毎月息を縣官に納れしめ、以て供御に充て、且爲に廷臣の家計を計畫し、廢れたるを興し、絶えたるを繼ぐ。

三年  
信長即

三年三月、火を小谷、山本の城下に縱ち、徙りて志賀に軍す。木戸、田中の二城を攻めて、成を置き、遂に京師に入り、妙覺寺に陣す。義昭、信長をして第を武者小路に置かしむ。固く辭すれども許さず。乃村井貞勝をして役を董らしむ。日ならずして成る。細川昭元、岩城左通、來り降る。大阪の僧徒も、亦物を贈り款を納る。三好義繼、松永久秀、私に畠山氏と闘ひ、城を交野に築く。信長、素より二人を疾む。事に因りて之を誅せんと欲す。是に於て、兵を遣して交野を攻む。城兵夜遁る。久秀、竟に降る。

信忠

七月、信長の長子信忠、幼字を奇妙と曰ふ。始めて鎧を被り、信長に従ひて淺井長政を小谷に攻む。木下秀吉をして、別に山本を攻めしむ。朝倉義景の來り援くるを聞きて、虎畑山に壘して之を待つ。義景、二萬騎を以て至る。信長曰く、「其未だ陣せざるに及びて之を襲ひ、營を安せしむる莫れ」と、將士、夜に乗じて更に之を襲ふ。北人之を患へて來り降る者多し。會義昭の使來り諭し、兵を弭めしむ。

虎畑山

長尾謙信  
武田信玄

乃、秀吉をして虎畑山を守らしめ、宮部某をして宮部の壘を守らしむ。山を鑿り道を開き、以て往來に便す。

平手汎秀死す

義昭、信長を  
圍る  
信長の上書

是の時に當りて、長政、義景、越後の國主長尾謙信と好を通じて、以て信長に抗す。而して武田信玄も亦、甲斐、信濃の兵を以て、西に出づ。信長、佐久間信盛、平手汎秀を遣し、徳川氏を援け、信玄を東海に拒ぐ。利あらずして、汎秀死す。

【光源】義輝

義昭、時に信長と惡し。是の時に乘じて之を圖らんと欲す。是より先、信長、義昭の失行多きを病へ、上書して諫めて曰く、「幕下の京師に入るや、信長首め朝參敢て怠ること勿きを請ふ。幕下之を諾して、後乃之に違ふ。夫れ光源公、王事に怠り、天譴立所に至る。信長、竊に幕下の爲に之を懼る。忠臣賞なく、而して佞夫官を得、以て下民を虐す。下民何の罪かある。罪人、金を納るれば、即便之を宥し、偽りて叡山の賦税と稱して、以て民財を掠め、或は陽に征課を責めて、陰に之を錮き、以て私恩を賈る。此れ皆幕下の爲すべき所に非ず。朝議、元龜の號を改めんと欲す。而るに幕下、特に費用を愛しみ、果して従はず。遠近、惡御所の目あり。信長、竊に幕下の爲に之を羞づ。信長、二條城を築きて以て、寇賊に備ふ。而るに舍て、他所に徙らんと欲し、城内の粟を糶して

惡御所

以て金銀を蓄ふ。諸國の將士、多く金を貴び、粟を賤しめ、其武備を遺れて、遯隱の計を爲す。皆幕下の爲に倣ふなり。信長、納る、所の紀綱の僕、罪無くして俸を奪はれ、來りて哀を乞ふ者數なり。請へども復するを得ず。信長、面目以て此輩に對ふる無し。且聞く、教を諸國に下して、馬及び金を徵す。曩に白す、凡百の需索は、宜しく信長に屬すべしと。信長將に立所に之を辨せんとすと。今陰に此教あり。信長之に感ふ。信長、志、幕下と心を協せ力を戮せ、亂略を擡して、以て王政を興さんと欲す。豈他あらんや。幕下讒言を信するなく、以て終吉を保ち、佞を斥け忠を進め、先業を恢弘せられんことを願ふ。儒人の如きに至りては最宜しく之を親近し、以て古今の興衰を鑒るべし。信長、兵亂の間に生長して、文學に嚮く、自度るに、事を處する多く典故に違はん。常に愧恥を懷く所以なり。妄に所見を疏す。唯幕下、意を留めよ」と。義昭納れず。遂に相嫌隙す。

天正元年、義昭、潜に使を發して、信玄及び謙信に諭し、夾みて信長を攻めんとを約す。又安藝の國主毛利輝元を諭して、以て後據と爲す。信長、村井貞勝をして、和を義昭に請はしむ。義昭聽かず。二月、義昭、白石山、堅田に城き、山岡、磯貝、渡邊等を以て之を守らしめ、兵食を徵發す。信長之を聞きて曰く、「吾

天正元年  
義昭信長を攻  
めんとす  
毛利輝元  
白石山  
堅田

細川藤孝

信長二條城を  
圍む  
義昭信長と和  
す

丹羽長秀

室町氏義昭

梶川

義昭兵を擧ぐ  
横島

れ終に兵を用ゐざるを得ず」と。柴田勝家、丹羽長秀、明智光秀、蜂屋頼高を遣し、勢多を渡り、石山の兵を招きて、之を降す。勝家、乃留りて京師に備ふ。而して長秀等、堅田を攻めて之を抜く。三月、信長自將として大津に至る。細川藤孝、荒木村重、迎へ降る。乃進みて京師に入り、兵を觀して和を請ふ。義昭聽かず。乃二條城を圍む。義昭、窮蹙して、人をして出でて言はしめて曰く、「今より後盡く卿の言ふ所を聽かん」と。信長、拜謝して、成を行ひて返る。守山に至りて諸將を遣し、六角義賢を餘江に攻めしむ。丹羽長秀を召し、耳語して曰く、「室町氏必再舉せん。再舉せば必勢多、矢橋を阻てん。汝、澤山の木を伐りて、兵艦十餘艘を造れ」と。乃岐阜に歸る。尾張の人梶川某と云ふ者あり。博奕を喜みて衆に擯けらる。信長、其勇を愛し、與ふるに善馬を以てす。曰く、「緩急あらば此を以て功を樹てよ」と。梶川、感喜して退く。

七月、義昭、再、兵を擧ぐ。伊勢某、三淵某、廷臣二名とを留めて、二條を守らしめ、自横島に據り、宇治河を阻て、固と爲す。報、岐阜に至る。信長即起ちて、直に馳せて澤山に至り、其兵艦に乗りて、夜、朝妻渡を濟り、旦日、阪下に達りて、直に京師に入り、火を縱ちて呼蹙す。煙焰天に漲る。義昭の兵、勢多、矢橋



二條城陥る

を拒ぐ者、返願て潰ゆ。京師の人、大に驚きて曰く、「織田公、豈飛來せるか」と。信長、疾く二條を攻めて之を陥れ、三淵を斬る。城兵みな降る。以て先鋒と爲し、榎島に向ひ、自柳山に陣し、稻葉通朝、伊賀範俊等を遣し、二萬人に將として平等院を渡り、佐久間信盛、木下秀吉等、五萬人に將として五箇莊を渡る。是に於て、梶川某、信長の賜ひし所の馬に騎り、曉に河岸に出で、大に呼びて自名のり、流を亂して渡る。通朝、兵を麾きて之に従ふ。信盛、秀吉と合撃して、柵を奪ひ、火を繼ちて入る。信長、柳山に在り。左右煙の起るを望みて、相謂て曰く、「我が軍方に



足利義昭頼島  
籠城の圖

梶川先登

義昭降を乞ふ

織田氏足利氏  
に代る  
所司代

左通を斬る  
荒木村重

渡れり。誰か先登する者ぞ」と。信長曰く、「必梶川ならん」と。榎島既に破る。義昭、降を請ふ。信長、信盛、秀吉をして之を處置せしむ。二人乃義昭を奉じて若江に徙り、細川昭元をして榎島を守らしむ。通朝來りて白して曰く、「臣、梶川に先せられ、意甚之を憾む。然れども其軍進、死を致さんことを恐る。故に之に繼げり」と。信長三人を并せ賞す。是に於て、織田氏、遂に足利氏に代りて、令を京師に出す。戸租を調き、徭役を免し、窮民を賑し、節孝を旌す。村井貞勝を以て所司代と爲し、兵を收めて返る。遂に兵艦を以て、攻めて木戸、田中の二城を抜き、之を明智光秀に賜ふ。秀吉、藤孝をして淀城を攻めしめ、岩成左通を斬る。荒木村重をして和田惟政を芥川城に攻めしむ。村重素より雄豪を以て聞ゆ。部兵皆驍なり。義昭の變に、首として信長に應じ、迎へて大津に謁す。面貌甚偉なり。會饅頭を獻する者あり。信長佩刀を抜き、饅頭を鋒に貫きて、以て村重に膺はしむ。村重進みて、口を開きて之を受く。信長笑ひて曰く、「好男子、攝津の十三郡は汝が之を剪取するに任す」と。是に於て、命じて惟政を攻めしむ。賞格を榜して曰く、「主將を獲る者は萬金。編裨を獲る者は千金。士卒を獲る者は百金を予へん」と。村重の將中川清秀之を

清秀和田惟政を斬る

熟視し、墨を以て其首條に勾す。観る者其意を測るなし。既にして惟政、曉に城を出で、士卒に雜りて守備を修む。清秀、濠の側に伏し、跳り出で、其首を斬る。信長乃清秀を賞するに萬金を以てす。池田勝政、觀望して至らざるを以て之を高野に逐ふ。和田、池田氏の邑を以て、盡く村重に賜ふ。

僧長復兵を出す

八月、岐阜に歸り、居ること三日。淺井氏の將阿閉某來り降る。信長、復發して月瀬城を下し、山田に軍す。淺井氏の兵、燒尾を守り、朝倉氏の兵、大嶽を守り、山田と相持す。信長、勝家信盛を遣し、高月に陣し、越前の援路を絶たしむ。朝倉義景之を聞き、二萬騎を以て、來りて田邊に軍す。信長、又稻葉通朝を遣し、勝家を助けしむ。燒尾の守將阿閉に困りて欺を納れ、以て我が兵を導く。我が兵遂に大嶽を圍み、夜、雨を冒して疾く攻む。守將乃降る。信長、信忠をして虎姫山を守らしめ、不破光治をして、大嶽を守らしむ。而して進みて丁野を下す。使を高月に遣し、諸將を戒めて曰く、「今夜、北軍必走らん。宜しく尾撃して之を塵にすべし」と。諸將皆信する無し。且應へて曰く、「謹みて諾す」と。夜半、義景果して營を焚きて遁る。信長、大に呼び、起ちて曰く、「敵走る」と。左右五十騎と馳せ出づ。先馳する者あり。信長之を誰何す。答へて曰く、「利家、成政」

義景遁る

【刀根山】越前

十四城を下す

【一乗谷】越前の治所

と。其他十餘人皆迭に對ふ。信長駭れて曰く、「吾れ先登せんと欲して、諸君に先せられたり」と。乃轡を聯ねて疾く馳す。敵に刀根山にて及び、其編禰二十三人雜兵二千を斬る。金松某、甲首を執りて闕す。既にして血を蹀む。信長之を勞ひ、手づから芒鞋一兩を取りて、之を賜ひて曰く、「吾れ戰に臨む毎に、之を刀欄に懸けて、以て闕亡に備ふ。今にして用ゐることあり」と。信長、兩日に十四城を下し、敦賀に留ること三日。降將の質子を徵し、進みて龍門寺に軍す。義景、一乗谷を弃て、大野に匿る。勝家、通朝等、兵を分ちて搜索す。平泉の僧徒懼れて嚮導せんと請ふ。通朝、土人に貸して、義景の在る所を得、誘ひて其族景鏡を降す。景鏡、義景に迫りて自殺せしむ。信長、黨類を誅し、降附を撫し、政を國中に爲す。人をして義景の首を齎し之を京師に梟せしむ。降將前波長俊を以て、越前の假守と爲し、明智光秀等、之を監す。引きて虎姫山に返る。淺井長政、父の久政と兩城を保守す。信長、秀吉を遣し、粒羅岡に登りて、兩城の間を絶ち、久政、長政を自殺せしめ、其地を秀吉に賜ふ。九月、勝家を遣し、鮎江を攻め、六角義嗣を降し、杉谷善住を獲て、生ながら之を地に埋め、竹鋸を以て其首を鋸す。十一月、入朝す。佐久間信盛を遣し、攻めて三好義繼を殺さしむ。是に於て、淺

義景自殺す

前波長俊

久政、長政自殺す  
義嗣降る  
鋸を以て首を鋸す

井、朝倉、六角、三好氏、みな滅ぶ。

邦文日本外史卷之十三終

邦文日本外史卷之十四

徳川氏前記

織田氏下

天正二年

天正二年正月元日、近畿の將士、盡く正を岐阜に賀す。信長之に酒を賜ふ。酒三  
 行して、衆に謂て曰く、「我れ佳肴あり。請ふ、こゝに飲を侑めん」と。左右をし  
 て一函を取り來らしめ、之を座上に置く。衆、これに目を屬す。信長、柴田勝家  
 に觸して、手づから其蓋を開けば、則義景、長政の首なり。塗るに金粉を以てす  
 諸將皆笑ひて曰く、「此の好下物あり、何ぞ満酌を辭せんや」と。信長曰く、「吾れ  
 京畿を經略するに、二患の爲に礙へらるゝこと數年。卿等、吾が爲に勞を積み、  
 苦を累ね、以て誅斃を致すを得たり」と。因りて各刀劍を賜ひ、驪を極めて罷む  
 佐佐成政、留りて白して曰く、「臣、無似にして諸將の後に從ひ、叨に洪恩を被り  
 て報する所を知らず。唯願くは君自足れりとせず、遂に四方を定められんことを」  
 と。信長、大に悦び、成政の手を握りて室内に入り、與に政治を談す。侍史武井

信長佐々成政  
と政治を談す

夕菴、傍より之を贊して曰く、「圖らざりき、成政能く此言を爲す。君、これを忽にする勿れ」と。信長、厚く二人に賜ふ。

二月、甲斐の兵、東美濃を侵し、明地城を圍む。信長、信忠と、出で、之を距ぐ城内に叛く者ありて城陥る。乃高野、遠利の二城を修め、川尻鎮吉、池田信輝をして之を守らしむ。時に武田信玄既に死し、長尾謙信猶存す。信長、武田氏と絶ち、好を長尾氏に通じて、厚く之に贈る。

三月、信長入朝し、相國寺に寓す。詔して從三位に敘し、參議に任せらる。足利義政の故事を以て奏して、東大寺に藏むる所の名香を乞ひ、自多門城に至り、使を遣して香一寸八分を截らしめて、之を三分し、自其一を取り、分ちて其二を諸將に賜ふ。

四月、京師に還る。大阪の賊、出で、之を要す。擊破して過ぐ。五月、岐阜に歸る。六月、武田勝頼、兵を遠江に出して高天神の城を圍む。徳川氏、使をして援を請はしむ。信長、信忠、兵二萬騎を將ゐて荒井に至る。城陥るに會ひ、還りて吉田に至る。徳川公、來り謝して曰く、「公の餘威を藉りて、國を保ち、此に至るを得たり」と。信長、之を勞ひて曰く、「卿は我が爲に東面を守り、以て武田氏を

武田氏と断つ

信長參議に任

せらる

【名香】西条侍

徳川氏を輔く

拒ぎ吾をして東顧の患なからしむ。吾れ以て速に京畿を定むるを得たるは、卿の功なり」と。乃左右の四人をして二の革囊を擔はしめ、盛るに黄金を以てして、之を賜ひて曰く、「薄以て將士の勞に酬ゆ」と。乃還る。

七月、長島を征す。信長、淺井、朝倉氏を滅し、遂に長島を攻め、二城を屠り、成を置きて還る。雨に遇ふ。賊、險に據りて夾み射る。林新三郎、殿戦して之に死す。信長怒りて曰く、草賊の故を以て、多く吾が良を亡ふ。吾れ必其巢窟を覆し、其醜類を殲し、以て死者を用はん」と。已にして長島、武田氏に應ず。信長、之を覺りて益怒る。是に於て、信忠と兵數萬を將ゐて、三道より赴き討つ。信雄、瀧川一益、九鬼嘉隆と、舟師を以て之に會し、行賊兵を破りて進む。賊入りて五條を保つ。

長島城

大鳥井城

長島城

八月、大鳥井城の賊、夜、風雨に乗じて遁る。柴田勝家等、追撃して男女二千人を殲し、其耳鼻を截りて之を一船に盛り、長島に送致す。篠橋城降る。九月、長島の賊、城を出で、船に乗りて去る。我が弓銃手、豫堤の側に伏し、撃ちて之を塵にす。餘衆八百可り、突きて我が中軍に入る。信長の叔父信次、庶兄信廣、弟秀成、從弟信成、迎へ戦ひて之に死す。賊、大阪に奔る。遂に三城の男女二萬

人を燻ぎ殺す。臭、數里に聞ゆ。乃長島を以て瀧川一益に賜ひ、北伊勢の五郡を食ましむ。

三年  
民政を布く

長森の戦

案巢山

三年正月、吏四人に命じて、近畿の諸國を巡り、橋道を修めしめ、關征を獨く。三月、信長入朝し、廷臣の采田を檢し、其人に賣る者は、爲に償ひて之を還す。四月、信長、聞く、「大阪にて長島の逋逃を納れ、又三好氏の遺黨を糾合し、以て遙に武田氏に應ず」と。乃兵を引きて南伐し、新墮、高尾の二城を下して返る。五月、武田勝頼、大舉して參河に出で、長篠城を圍む。德川氏、復、使をして援を請はしむ。信長、信忠、騎卒六萬を以て之に赴く。其軍を戒めて曰く、「人ごとく杙と組とを持て」と。乃熱田祠に詣でて戰勝を祈り、岡崎に至りて、城將奥平信昌の使者に遇ふ。曰く、「城兵、日夜、大旗の來るを望む」と。信長、慰勞して遣歸す。而して反間を縱ちて曰く、「信長方に京畿北國を思ふ。來り援くる能はず」と。勝頼、大に喜び、兵を分ちて城に備へ、壘を案巢山に築き、一將を留めて之を守らしめて、自進むこと二十餘町、瀧澤川を濟りて陣す。信長、設樂郷に至り將士をして戰を議せしむ。德川氏の部將酒井忠次進みて曰く、「臣請ふ、今夜、間道より敵背に送り出で、案巢の壘を襲ひ、火を敵營に縱ちて其氣を視はん。而し

信長戦を挑む

て大軍之に乗せば勝たざる莫けん」と。信長、佯り罵りて曰く、「咄、田舎兒、何を知らん」と。諸將皆退く。信長人をして陰に忠次を招かして曰く、「汝が計用あるべし。吾れ其漏泄を恐れ、故に佯りて之を叱せしのみ。汝宜しく速に發すべし。願ふに郷導なきを如何」と。忠次曰く、「臣、即郷導を爲さん。請ふ、監吏を賜へ」と。信長、乃金森長近の四人を遣して、之に従はしむ。是の時に當りて、信長、極樂寺に陣し、信忠、新御堂に陣し、兵を勅して十五隊と爲す。德川公、右先鋒と爲りて前に居り、佐久間信盛、木下秀吉、瀧川一益、左先鋒と爲りて、少しく卻く。信長、令を下して、柵を軍前に爲らしむ。杙と組とを用ゐて立所に成る。乃諸隊の銃手を抽きて、三千を得たり。佐々成政、前田利家等を以て之を司らしむ。曰く、「勝頼、勇を恃みて謀なからん。而して其兵、騎戰を喜ぶ。吾れ之を沮むに柵を以てし、銃もて之を斃さん。彼れ即馳せ至るも、速に銃を發する勿れ。其已に逼るに及びて、千毎に迭に發せよ」と。二十一日、味爽、案巢に火起る。敵軍顧て擾動す。信長、自、司銃五人を率ゐて、柵を出づること十町、巨銃を敵中に發し、戰を挑みて退く。敵の四將更進みて、我が右先鋒に逼り、轉じて左先鋒を犯すとき、銃丸亂發す。敵兵沮靡す。敵の三將、敢死して繼ぎ進み、直に左先

武田の軍潰走

鋒を犯して、柵を破ること一層。我が銃乃齊しく發す。右先鋒、鎗を以て横さまに之を撃つ。成政馳せて信長に白して曰く、「敵の中軍の旗幟搖動す」と。信長、先鋒をして兵を縦ちて之に乗せしむ。敵軍敗走す。乃諸軍に令し、鼓噪して齊しく進ましむ。敵軍、大に潰ゆ。走るを追ひ、北ぐるを追ふ。斬首一萬三千級。餘兵を川に擠し、其宗族の將領二十餘人を獲たり。勝頼、僅に身を以て免る。參河の諸城の武田氏に屬する者、皆解きて走る。信長、軍を收めて敢て窮追せず。徳川公來り、軍門に謝して曰く、「今日の役、謝する所を知らず」と。信長曰く、「卿の兵、最力戦して、此捷を得たるのみ」と。徳川公、因りて勢に乗じ、遂に甲斐に入らんと請ふ。前田利家、木下秀吉も亦、以て言を爲す。信長可かずして曰く、「我が兵疲れたり。吾れ且力を養ひて再舉せん」と。乃振旅して還り、熱田に養ひ、其祠宇を修めて美濃に歸る。

信長北伐

是に於て、信忠をして岩村城を攻めしむ。越前の假守前波長俊、政を失ふ。朝倉景健等、一向賊と亂を作し、龍門、虎杖、木理、火燧、水津、河野の諸城に據りて遂に大阪に應ず。八月、信長、信忠、乃公族、諸將の兵凡八萬を統べ、北伐して敦賀に至る。會雨

北莊に至る

勝家に命じて越前を鎮せしむ

大にふる。信長、潜に木下秀吉を召して曰く、「敵必備を設けし。汝、潜に舟師を以て河野浦を取り、其不意を撃ちて遂に龍門を破らば、則木理の諸城、攻めずして自破れん」と。乃明智光秀等を以て之を助けしめ、夜敦賀を發す。已にして河野、龍門、火起る。木理の諸城、顧て之を視、皆守を棄て、潰走す。諸將、邀へ撃ちて大に之を敗る。柴田勝家等、鳥羽城を抜き、加賀に入る。金森長近等、徳山口より入りて三城を屠る。而して丹波、若狹の將士、兵艦數千艘を以て來り會し、火を沿海に縱つ。信長乃進みて木理嶺を踰え、龍門に至る。景健、賊師下間和泉等を斬りて、降らんことを乞ふ。許さずして之を誅す。景健の從士三人、刃に伏して之に殉す。信長、三人の妻孥を恤み、兵を分ちて賊黨を索む。斬獲五萬人。進みて加賀を略す。加賀、越前、十餘日にして定る。九月、信長返りて北莊に至り、大に戦功を論じ、梁田出羽をして檜屋、大聖寺の二城を守りて、加賀を鎮せしむ。越前の三郡を分ちて前田利家、佐々成政、及び金森、原、不破、武藤等に賜ひ、其餘の八郡を以て、盡く柴田勝家に賜ひ、北莊、足羽に城きてこれに居らしめ、身自之を經畫せしむ。因りて勝家を敕めて曰く、「越前は北陸の要扼にして、長尾氏の衝に當る。吾れ諸將より選びて汝に命ず。

賦斂租稅  
游田獵など  
して遊ぶ事  
【皇人】公家

汝其れ之を勉めよ。夫れ國を守るの道は徒勇武をのみ恃むべからず。當に恩威並  
び施し、以て人心を服すべし」と。乃條制を申べて曰く、「賦斂を厚くする母れ。  
關市を征する母れ。士民を侮る母れ。訟獄を偏する母れ。武備を遺る、母れ。游  
田を喜ぶ母れ。皇人の邑にして、亂賊の爲に掠めらるる者は、當に印券に據りて還  
付すべし。國內の間地、我が倉廩に歸する者は、以て功勞の士を待し、當に徒に  
費すべからず。凡我が令する所にして、便ならざる者は、輒來りて之を争へ。我  
れ將にこれを取めん」と。因りて不破、佐々、前田等に命じて、勝家と相檢察し、  
以て國政を爲さしむ。然して後師を岐阜に班す。

信長右近衛大  
將に任ず

大阪の僧徒降  
る  
岩村城

十月、入朝す。廷臣二名來りて澤山に迎へ、詔して昇殿を聽し、超えて右大臣に  
拜せらる。信長固辭す。即權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねしむ。信長、弓部  
百人を従へ、入りて拜謝す。因りて宴を御前に賜ふ。東西の諸國交使をして之を賀  
せしむ。大阪の僧徒、降を乞ひて、珍玩を獻す。之を許す。會美濃の使者至り、  
武田勝頼來りて、岩村を援ふと告ぐ。信長、馳せ還りて之に赴く。是より先、岩  
村の城將出で、戰ふ。信忠撃ちて之を卻く。城將、遂に出で、降る。而して信長  
至り、城將を磔して徇へ、川尻鎮吉を以て、岩村の城主と爲す。勝頼、之を聞

信長將校の爲  
に爵を乞ふ

信長功臣に名  
家の姓を冒さ  
しむ

四年  
安土城  
天主閣

きて引き去る。朝廷、信忠の功を嘉し、擬するに高爵を以てす。信長固く辭す。  
乃秋田城介に叙せらる。信長、因りて奏請して曰く、「臣の將校、臣の爲に力を効  
し臣をして功を奏せしむ。今臣の父子獨顯爵を辱くす。而して此輩に及ばず。臣  
の意竊に之を愧づ」と。木下秀吉を以て筑前守に叙し、明智光秀を日向守に叙し、  
塙直正を備中守に叙し。川尻鎮吉を肥前守に叙す。是より先、西海の豪姓、多く  
絶えて嗣なし。信長の諸功臣をして、之を繼がしめんと欲す。乃命じて各其姓を  
冒さしむ。明智光秀は惟任氏を冒し、塙直正は原田氏を冒し、梁田出羽は別喜氏  
を冒し、丹羽長秀は惟住氏を冒す。秀吉は丹羽、柴田氏の威名を羨み、請ひて羽  
柴氏と稱す。信長、信忠、及び諸將に謂て曰く、「我れ他日海内を混一するを得ば、  
則汝が輩をして實に其名を稱せしめん」と。是の時に當りて、織田氏の國、天下  
の衢路に横塞し、東國の鷹馬を以て、西國に贈遺し、西國の虎豹の皮を以て、東  
國に贈遺す。贈遺を得る者、各以爲へらく、信長已に其地を略有すと。  
四年正月、信長、治を近江の安土山に徙し、以て長尾氏に備へんと欲す。惟住長  
秀、役を董す。畿内及び尾張、美濃、若狹、越前の十一州の卒に課して、天主閣  
を起す。閣凡て七層、高さ七丈、邸第を山下に布き、信忠をして、岐阜に居り、

二條城修築

以て武田氏に備へしむ。是の歳信忠、從四位下に叙せられ、尋いで上に進めらる。四月、信長、入朝す。詔して、二條の城趾を修めて館と爲さしむ。數年にして成る。敢て自館せず。請ひて之を皇太子に獻じてこれに居らしむ。

大阪攻撃

時に大阪復叛きて、武田、長尾、毛利氏と相結ぶ。信長、細川藤孝、荒木村重、惟任光秀、原田直正、筒井順慶を遣し、兵三萬を將ゐて赴き討たしめ、佐久間信盛等をして天王寺の壘を守らしむ。賊、木津、難波に壘して、舟船を往來す。信長諸將を戒めて曰く、「必木津を取れ」と。直正、降將三好康長、及び根來寺の兵を率ゐて之を攻む。難波の賊、銃手を以て之を田中に要す。先鋒敗れ走る。直正戰ひて之に死す。五月、賊、遂に萬餘人を以て天王寺を圍む。信盛、光秀、順慶と、堅く守りて之を拒ぐ。梶川彌三郎、從ひて城内に在り。數出で、力戰す。溝壁未だ成らず。乃牛馬を刺し殺して、其皮を張りて壁に代へ、以て矢石を扞ぐ。信長急を聞く。方に浴す。浴衣のまま馬に上り、百餘騎と赴き援ふ。若江に至り、兵聚る者三千。分ちて三隊と爲し、先鋒を村重に命ず。村重辭す。信長曰く、「然らば則乃公之を爲すのみ」と。乃自輕卒に雜り、指麾して進む。敵の矢雨の如し。信長、足を傷づけ、怒りて益進む。城兵、其旗を望見して、大に喜び、門を開き

城内天王寺

て出で戰ふ。夾み撃ちて賊兵を破る。賊兵、稍陣を布きて退かず。信長、再戰はんと欲す。諸將諫めて曰く、「衆寡敵す可からず。我が兵盡く來るを俟ちて然る後戰はん」と。信長叱して曰く、「機失ふ可けんや」と。兵を合せて二隊と爲し、復撃ちて大に之を破り、北ぐるを追ひて大阪の城門に至る。斬首二千餘級。乃軍を整へ、以て敵の返襲に備へ、壘を十所に築きて、大阪を環し、若江に凱旋す。六月、安土に歸り、兵を休むること二十日にして、役に就かしむ。七月、天主閣成る。十一月、入朝す。詔して、正三位に進め、内大臣に拜せらる。固く辭すれども許されず。十二月、尾張、三河に獵す。

五年 南伐 買塚、中野 和泉 能登越中

五年正月、入朝す。二月、紀伊の賊雜賀孫一、亂を作し、大阪に應ず。信長、賊將雜賀三藏、根來杉房を招き降して、郷導と爲し、諸軍を率ゐて南伐し、二道より入りて、買塚及び中野を拔く。三月、孫一降り、大阪を攻めて自効さんと請ふ。之を許し、成を佐野に置きて還る。

四月、能登、越中の賊起る。長尾氏、制する能はず。信長之を聞き、能登の人長重連等を招き降し、機に乗じて地を略す。七月、長尾謙信、來りて重連を攻む。重連の弟連龍、來りて急を告ぐ。乃羽柴秀吉等を遣し、柴田勝家を助けて赴き救は



松永久秀

(織田信長故)



しむ。秀吉、告げずして返る。信長、誦めて見ゆるを許さず。八月、松永久秀、叛きて大阪に應ず。初め久秀の降るや、信長許さずして曰く、「彼れ智勇餘あり。而れども奸佞比なし。飢うれば則伏し、飽けば則ち起る。彼れ已に足利氏を亂す。亦我が家を亂さんと欲するか」と。佐久間信盛曰く、「彼れ暗主に事ふ。乃能く此の如きのみ。主公、之を駕馭するを得ば、何をか能く爲さん。宜しく且之を撫納し、以て天下に廣きを示して可なるべし」と。信長之に従ふ。徳川公、嘗て信長に謁し、「一人人の側に侍するを見て、其は誰なるかと問ふ。信長笑ひて曰く、「此れ松永彈正なり。此夫

【茶鑑】茶釜

【片岡】河内

志貴城陥る  
信忠三位中將  
に任せらる

人の能し難き所を爲すもの三あり。公方を弑する一なり。三好氏に叛く二なり。大佛殿を燬く三なり」と。久秀、俯伏して汗を流し、意自安からず。久秀茶鑑あり。平蛛と名づく。信長、之を得んと欲す。久秀漸しみて獻せず。是に於て、諸將と俱に大阪を守り、遂に叛き去りて志貴城に據る。信長、侍史楠友閑を遣し、往きて其意を問はしむ。久秀答へず。九月、乃信忠をして、數萬騎を將りて、之を討たしむ。細川藤孝、惟任光秀、筒井順慶等、別に其屬城片岡を攻む。藤孝の二子忠興、興正、猶幼なり。先登して首級を獲たり。諸軍之に従ひ、遂に之を抜き、信忠と合して志貴を圍む。久秀、潛に使を遣して、雜賀、大阪と期を約して來み攻めんとす。使者、誤りて佐久間信盛の營に入る。信盛捕へて之を獻す。信忠喜びて曰く、「是れ天授なり」と。乃死士二百をして雜賀の援兵と偽りて、夜、城門に至らしむ。門開きて入る。二城に及ぶ比、信忠、衆を鼓して齊しく登る。二百人呼喚して之に應ず。信忠遂に入り、久秀を天主閣に盛む。久秀、火を繼ちて愛する所の茶鑑を抱き、自ら燒殺す。其子久通以下、皆捕誅せらる。信忠、入朝す。廷臣、詔を傳へて從三位に叙し、左近衛中將に任じ、昇殿を聽さる。信忠、稽首して曰く、「天恩の隆渥、物の比す可きなし。然りと雖、臣敢て頓く受けず。請ふ、

之を信長に告げて、然る後奉受せん」と。之を強ふれども肯はず。使者還り報ず。天子、容を動して嘉賞し、其言ふ所を聽す。信長、答書して曰く、「久秀は老滑なり。汝、一舉にして之を斃す。汝の功多し。宜しく詔を奉すべし」と。信忠、乃入朝して拜謝す。安土に親して、岐阜に歸る。是の役に、筒井順慶、最功あり。信長、之に大和を賜ふ。

信長右大臣と  
なる

十一月、信長入朝す。從二位に進み、右大臣に轉す。信長、畿内を略定すれども、獨、大阪未だ服せず。毛利氏、前に足利義昭を納れて、終に我と絶つ。又大阪を援け、爲に糧食を餽る。備前の浮田氏、毛利氏に屬し、東播磨を窺ふ。播磨の人赤松義祐、別所長治、小寺政職、黒田宗圓、皆援を我に求む。宗圓の子孝高、使者と爲りて、羽柴秀吉に因りて信長に通ず。信長、秀吉の北陸に敗るゝを譏めたり。是に於て、西征大將を命じ、山陽、山陰を略して、以て其罪を償はしむ。秀吉、感奮して播磨に戦ひて功あり。

秀吉  
六年

十二月、信長、參河に遷す。菅谷長頼をして安土を留守せしむ。名刀、寶器を以て之に授け、戒めて曰く、「秀吉來らば則之を與へよ」と。既に歸りて秀吉至る。六年正月、信忠及び秀吉等の十二人を茗室に饗し、親之に饋る。終に率て以て天

兩衛門右大臣  
右近衛大將

越中丹波丹後

毛利氏

主閥に登りて曰く、「此城を就す所以は、卿等の力なり」と。又秀吉を遣して西征せしむ。四月、兩職を辭す。時に長尾謙信已に死す。信長乃北陸の降將齋藤氏、神保氏をして、飛驒の國主姉小路氏と、力を并せて越中を定めしむ。惟任光秀を遣して丹波を略し、細川藤孝に丹後を略せしむ。

五月、毛利輝元、大兵を發して熊川に至る。秀吉急を告ぐ。信長、自赴き援はん  
と欲す。諸將之を止めて曰く、「臣等先往きて其地形の險易を詳にして、然る後獨  
を迎へん」と。乃荒木村重をして赴き援けしむ。又信忠、信雄、信孝、信包を遣  
し、諸將を率ゐて之に繼がしむ。六月、京師大水あり。信長入朝す。秀吉來り歸  
じて具に軍狀を白す。信長之に命じて曰く、「敵兵多くして食足る。我が軍之と日  
を曠しくして久しきを持するは、特に力を疲すのみ。兵を引きて播磨を按定し、時  
を待ちて進み取るに若かず」と。秀吉乃去りて、令を諸將に傳ふ。信忠兵を還し、  
攻めて神吉、志方の諸城を下し、秀吉をして之を守らしめ、以て三木城を攻む。  
三木と大阪とは海路相通す。信長乃九鬼嘉隆に命じて、大艦數十艘を以て伊勢よ  
り紀伊を廻り、撃ちて雜賀の賊船を破らしむ。三十餘艘を奪ひて界浦に傳く。  
九月、信長、入朝す。南大阪を巡り、阿部野に獵す。十月、嘉隆を召し、水戦を

三木城

荒木村重

習はして之を觀る。是より三木、大阪の援路遂に絶つ。荒木氏の士人、大阪に糶する者あり。監吏以て告げて曰く、「村重、大阪と私あり」と。信長信せずして曰く、「村重は微者なり。吾れ攝津で、攝津の守護と爲す。何を苦しみて反くや。乃、訛傳なる母らんや」と。明智光秀、村重の新進を以て聲績已が右に出づるを嫉み力めて之を嫌撃す。信長、人をして村重を詰らしむ。村重、驚愕して面のあたり之を陳謝せんと欲す。家臣皆諫む。聽かずして往く。光秀、書を馳せて之を途に止めしめて曰く、「主公怒れり。犯す可らず。足下何ぞ自虎口に投ずることを爲すや」と。村重乃還り、伊丹城に據りて叛き、毛利氏に應じて、三木城と夾みて秀吉を攻めんと欲す。

十一月、信長、自將として村重を討つ。信忠以下皆従ふ。郡山に至る。高槻の城主高山友祥、茨木の城主中川清秀、皆村重に屬す。信長、友祥の天主教を崇ぶと聞くや、教主伴天連なる者を召して、友祥を諭さしむ。友祥乃降る。信長、自衣を脱して之を衣せ芥川郡を賜ふ。清秀、之を聞きて亦降る。進みて昆陽に至り、兵庫を屠る。秀吉來りて村重に説きて圖を改めしむ。村重聽かず。十二月、伊丹を圍みて克たず。信長、其兵の損せんことを恐れて、長圍を築きて、

【昆陽】攝津

七年

池田信輝、瀧川一益、蒲生氏郷等をして、之を守らしめて還る。

七年二月、入朝す。三月、信忠と俱に伊丹に如き諸將を慰勞して、箕尾に遊ぶ。八月、大に三木、伊丹、天王寺の屯成の將士に賚ふ。九月、信長、復伊丹に如く。村重、族人を留め、城を守らしめて夜逃れ、華隈、尼崎に如き、援を毛利氏に求む。毛利氏、辭するに海路梗塞を以てす。十月、一益、密に城兵の中西某を招き、之に諭して曰く、「而が主怯懦なり。若輩を棄てて去る。若怯主の爲に死を致すは、曷ぞ織田公に降りて、功名を樹つるに若かんや」と。中西乃卒長五人と、我兵を啓かんと謀る。我が兵乃入る。留守せる者請ふ、「其孥を釋さば則往きて村重に説き、尼崎、華隈の二城を致さしめん」と。乃其孥を質として之を遣る。二城、拒みて納れず。乃散じ走る。信長、命じて其を、尼崎の西北に磔して、以て二城の兵に示す。

伊丹城

池田信輝

丹波を定む

十二月、荒木氏の族三十餘人を京師に徇へて之を誅す。攝津を以て池田信輝に賜ひ、其二子之助、輝政と俱に華隈を攻めて、終に之を抜く。是の歳、羽柴秀吉をして兵を分ちて、惟任光秀を助けて丹波を攻めしめ、國主素秀治を招き降す。秀治、肯て降らず。光秀、母を送りて質と爲す。秀治乃降る。

八年 別所長治 山名宗仙

大阪本願寺降る

光秀勝ひて之を執へ、安土に押送して之を磔殺す。丹波の人之を聞きて光秀の母を磔す。信長、丹波を以て光秀に賜ひ、龜山城に居らしむ。

八年正月、三木の城將別所長治、城を致して自殺す。信長、三木を以て中川清秀に加賜し、女を以て其子に妻す。秀吉をして但馬を攻めしめ、其國主山名宗仙を降さしむ。浮田氏既に降りて、毛利氏と兒島に相距ぐ。

大阪、連に強援を失ひ、勢力日に衰ふ。天子、廷臣三輩を遣して、就き論して之を降らしむ。信長も亦、楠友閑をして往かしむ。是に於て、僧光佐、徒屬を聚めて之を議す。其老下間刑部等、皆其降を贊して曰く、我れ宜しく降るべき者四あり。我れ織田氏と兵を交ふること十一歳、諸國の門徒並ひ起りて我に應じて、皆誅殺せらる。其幾千萬を知らず。憫まざる可けんや。一の宜しく降るべきなり。本城の諸將久しく圍中に在りて、粉骨齑身せり。藉之を貫する能はざるも、猶其肩を息はしめん。二の宜しく降るべきなり。織田氏の武を用ゐるや、當る所の者破れ、撃つ所の者服す。別所、荒木、秦氏の若きも、其根を絶ち其類を殲する莫し。我れ地の利に因り、人の和に憑り、以て今日に至ると雖、而も竟に亦此の如くならん。是れ自我が教を絶滅するに非ずや。三の宜しく降るべきなり。天子の

詔は奉せざる可らず。四の宜しく降るべきなり。且夫れ天下の英雄豪傑、織田氏に抗衡する者、孰か我の久しきに耐ふるに若かんや。我が武多し。誰か我を嗤ふを得ん」と。光佐、之に従ひ、盟を請ふ。信長、青山虎を以て、蒞ましめて光佐以下に金を賜ふ。差あり。

四月、光佐、其衆を散遣して、自紀伊の鷲林に遷れ、子光壽を留め、七月を以て城を致す。信長、矢部善七をして之を受けしむ。門徒、陰に光壽に説きて曰く、「信長、人と爲り詐にして忍なり。我れ一旦、據る所を失はば、恐らくは其計に陥らん」と。光壽乃再守備を修む。光佐、懼れて人をして之を止めしむ。肯せず信長、之を聞きて、怒りて曰く、「我れ終に之を剪滅せざるを得ず」と。兵を遣して、勝曼、尼崎の二壘を陥る。光壽、惶恐して罪を謝す。信長曰く、「我れ徐に之を圖らんのみ」と。乃之を宥す。七月、光壽、大阪を致して去る。

八月、信長、入朝す。宇治より舟行して、大阪に至り、城郭を巡視す。書を以て佐久間信盛、其子正勝を數めて曰く、「汝父子、天王寺を成ること五年。寇を斷び利を殖し、進取を事とせず。夫れ羽柴秀吉は、二歳を以て三國を定む。惟任光秀は、丹波を定め、池田信輝の二兒は、幼齡を以て華隈を抜く。柴田勝家は、此數

光壽大阪を去る  
佐久間信盛を責む  
【二兒】之助輝

人の功を樹つるを聞きて、自如かざるを愧づるや、力戦して加賀を定む。獨汝父子、尺寸の功なし。士卒を養はずして金錢を蓄へ、賞罰を論せずして茗飲を品す。是れ胡爲ぞや。前に朝倉の敗るゝや、汝懈りて肯て追はず。吾れ麾下を以て獨進む。汝乃曰く、「爾く懈ると雖、信盛の若き者、焉ぞ復得べけんや」と。審に言ひし所の如くば、則五歳の成に、何ぞ一戦せざる。吾れ弓矢を執りしより、未だ嘗て敗れず。前に汝をして家康を援けて、信玄を拒かしむ。家康、指教する所あるも、汝肯て従はず。乃平手を敵に驕して、吾が羞辱を貽したり。何の顔ありて返りて吾を見るか。吾れ四方未だ平かざるを以て、含忍して今に至る。汝終に悔めずして、日に罪戾を累ぬ。吾れ復汝を用ゐる能はず。汝猶過を悔い谷を引き、功を立て自贖はんと欲するか。不らずば則宜しく髪を削りて去るべし。吾れ汝を法に置くに忍びず」と。人をして書を齎し、往きて之を視しめて曰く、「吾が言ふ所非ならば、則直に之を争へ」と。信盛、正勝、答ふる能はず。髪を削りて高野に通る。部將皆散じ、獨、山口重政之に従ふ。初め水野信元、信盛に讒殺せらる。是に至りて自すを得たり。信長乃信元の弟忠重を召して、其邑を復せしむ。信長大阪より京師に至り、乃林通勝、伊賀範俊を流す。通勝は嘗て逆を謀り、範俊は

平手平手汎秀

佐久間父子高野に入る

九年

柴田勝家を賞し名益を賜ふ

馬を賜ふ

長尾景勝

嘗て叛を謀りしを以てなり。後二歳、信盛、高野に死す。信長之を憐み、正勝を召し之に祿して信忠に仕へしむ。

九年二月、信長、諸子を率ゐて入朝す。

二月、柴田勝家、謙信既に死して、北陸稍定りしを以て、乃來り謁し、金銀及び土物を獻す。信長、其功を褒め、親之を饗す。初め織田氏に傳家の茶室あり、焼口と名づく。勝家嘗て之を請ふ。信長曰く、「先君、終に臨みて、之を我に授けて曰く、『愛護して失ふ勿れ。必大勳勞ある者を得てこれを予へよ』と。汝之を勉めよ」と。是に至りて、勝家請ひて曰く、「臣、君の威靈を藉りて、越前、加賀を定む。勤勞と稱するに足らず。然りと雖、四方漸く平々。臣等、復以て功を樹つべき莫し。願くは是の時を以て、前に請ふ所の者を得ん」と。信長、欣然として出して之を賜ふ。

是の月、信長、大に馬を京師に閱す。均を皇宮の東に爲り、天子に請ひてこれを蒞み視しむ。四方の將士皆會す。會長尾景勝、虚を窺ひて越中を侵し、小出に至る。而して加賀の賊起りて之に應ず。是の時、越中の守將佐々成政、降將神保某と來りて安土に在り。信長、警報を得て、成政等をして、馳せ還りて之を距がし

越中能登丹後を定む

む。柴田勝家の義兒佐久間盛政、加賀の尾山に在り。賊を撃ちて之を殲し、景勝を走らす。成政至れば則事已に平ぐ。乃進みて悉く越中を定む。信長、越中を以て成政に賜ふ。是より先、前田利家、能登を定む。能登、加賀を以て之に増賜す。是に於て、細川藤孝、丹後を定め、其國主一色義定を誘殺す。丹後を以て之に賜ふ。

伊賀を定む  
因幡を定む

八月、信雄をして筒井順慶と與に伊賀を定めしむ。伊賀を信雄、信包に分賜す。乃秀吉をして大舉して毛利氏を伐たしむ。十月、鳥取城を抜き、因幡を定む。織田氏、既に足利氏に代り、近畿の十餘國を定む。法令嚴峻にして、一錢を竊む者と雖、斬に處す。姦盜息を屏め、路に遺らるるをも拾はず。行旅業を委して睡る。是の時に當りて、大阪以下強賊已に攘除に屬す。而れども西に毛利氏あり。東に長尾、武田の二氏あり。我と境を接して、未だ服従せず。徳川氏、數武田氏を攻めて之に克つ。北條氏、關東八州を以て内屬を求む。東北の豪傑、皆使をして方物を獻せしむ。武田勝頼、大に悞る。

木曾義昌

是の歲十一月、勝頼、勝長を送致す。勝長は信長の季子にして、甲斐に質たりし者なり。信濃の人木曾義昌、美濃の人苗木某に因りて、信忠に言て曰く、「臣、勝

頼の誅求に勝へず。願くは前導と爲りて甲斐を伐たんと。信忠、之を信長に告ぐ。信長曰く、「吾れ甲斐を伐たんと欲するも、未だ靈の乗す可きあらず。今此報を得て我が事成る。然りと雖、吾れ聞く、「木曾の地は險隘にして、人心測る可からず」と。宜しく其質子を徵して、然る後其地を踐むべし」と。信忠、乃義昌に任子と徵す。十二月粟二萬石を吉良に輸し、徳川氏を誡めて曰く、「明春將に甲斐に事あらんとす」と。

十年  
武田氏を伐つ

十年二月、信忠、既に義昌の任子を收め、五萬騎に將として木曾に入る。信長、自歩騎七萬に將として之に繼ぐ。徳川氏は、三萬餘騎を以て駿河よりし、北條氏は、三萬騎を以て相摸よりし、金森長近は、三千騎を以て飛騨よりし、並び進みて之に應ず。信忠、瀧川一益、川尼鎮吉を以て先鋒と爲し、伊奈に入る。伊奈の人降りて、鎮吉の兵を導き之を納る。我が兵進みて、松尾、飯田、小山の三城を陥る。木曾義昌、撃ちて甲斐の前軍を鳥居嶺に破り、捷を信忠に獻す。信忠、兵五千を遣して之を助け、自進みて桔梗原に陣す。復進みて飯田に陣し、大島城を陥る。甲斐、信濃の士民、素より勝頼の弊政に苦しむ。先を争ひて來り降る。信忠、兵を留めて大島を守らしめて、進みて飯島に陣す。勝頼、諏訪に在り。走り

高遠城

て甲斐に歸る。信忠、乃高遠の城を圍む。城、衝要に當り、守將仁科信盛、小山田昌辰等、力戰す。下す可からず。二月、信忠諸將に其前を攻めしめ、自其後を攻め、城を凌ぎて登り、信盛、昌辰以下の將領十七人を獲、首を斬ること二千餘級。信盛の首を齎して、信長に呂久川に獻せしむ。之を路左に擧す。信忠、進みて高島、深志の二城を陥れ、遂に甲斐に入る。勝頼以下已に山谷に逃れ匿る。信忠、古府に陣し、其留る者を誅し、弟勝長、及び森可成、子長可を遣し、上野を徇へて之を下さしむ。勝頼の天目山に在るを聞き、瀧川一益を遣して、之を圍み勝頼及び其子信勝を獲て、首を齎して信長に波合に獻せしむ。信長、大に喜びて曰く、「師を出して三十日、乃四國を定めて、其巨魁を獲たり。此兒、眞に大奇なり」と。信秀より傳ふる所の佩刀を以て之に賜ひ、人をして勝頼の首を京師に馳せしめて曰く、「乃父の一生、京に入るを以て志と爲す。吾れ豎子をして其志を繼がしむるなり」と。是に於て、信長、進みて諏訪に陣す。兵の諏訪に聚る者凡十餘萬なり。令を甲斐、信濃、駿河、上野に下して、降附を撫納す。武田氏の姦臣數十人を收へ、其罪を數めて之を誅す。北條氏、黄金、梁米を獻じて、戰捷を賀す。德川公、既に駿河を定め、來りて諏訪に歸す。信忠も亦來り會す。信長、之と謀

武田氏亡ぶ

【四國】甲斐、信濃、上野、駿河

驗功行賞

【四郡】更級、高井、水内、埴科

瀧川一益

信孝南征

りて大に功を論じ、賞を行ひ、駿河を德川公に、甲斐を川尻鎮吉に、上野を瀧川一益に、信濃の四郡を森長可に、岩村の地五萬石を長可の弟蘭丸に賜ふ。諸降將穴山信良、眞田昌幸等は、舊邑に因りて之を増損す。四月、信長、二府を巡視し武田氏の弊政を革め、諸將をして罷め歸らしむ。而して自駿河に入り、富士嶽を觀る。德川氏道を除きて供帳す。信長、之に吉良の粟二萬石を賜ひて曰く、「今用なし。以て乃の將士を賞せよ」と。乃西に歸る。瀧川一益に遺命して曰く、「吾れ汝を以て關東の管領と爲す。凡關八州より陸奥、出羽に至るまで、皆汝之を處分せよ。獨決する能はざる所は、之を家康に謀れ」と。之に名馬を賜ひて曰く、「宜しくこれに騎りて以て封に入るべし」と。因りて柴田勝家等をして、一益と應援を相爲し、以て長尾氏を圖らしむ。遂に尾張を経て安土に歸る。南海未だ定まらざるを以て、信孝に命じ、織田信澄、丹羽長秀、蜂屋頼隆等と、南征せしむ。曰く「事平がば四國を分賜せん」と。

五月、信孝等、大阪に軍す。信澄は信行の子なり。十五日、德川公、穴山信良と入りて謝す。信長、之を待するに甚渥し。惟任光秀をして之を饗せしむ。且日、羽柴秀吉の書を得。曰く、「秀吉、高松城を圍む。吉川元春、小春川隆景、毛利輝

自毛利氏を伐  
たんとす

明智光秀

信長を席にて  
光秀を辱かし  
む

元を擁して、數萬騎に將として來り援ふ。請ふ、援軍を得ん」と。信長曰く、「彼れ其巢穴を擧げて來る。是れ自覆滅を速くなり。吾れ自往きて之を掃殄し、元春、隆景の首を梟し、勢に乗じて遂に九州を定めんのみ」と。乃堀秀政を遣し馳せて秀吉を誡めて曰く、「汝之と相持して、歸り入らしむる勿れ」と。是に於て大に兵を徵す。池田信輝、細川忠興、高山友祥、中川清秀に命じて、先鋒と爲し先發せしむ。光秀も亦これに與る。

初め光秀、土岐氏の疏屬を以て、諸國に流寓す。遇ふ所なし。終に信長に干む。信長、擢で、阪下の城主と爲し、終に丹波を賜ふ。信長、將士を待つに禮節を設けず。嘲謔罵罵、以て常と爲す。而して光秀、人と爲り文深く、喜ぶて自修飾し、材藝を以て自高しとす。是より先、稻葉通朝の家臣齋藤、那須、罪あり。去りて光秀に仕ふ。通朝、之を信長に訴ふ。信長、光秀をして那須を還致し、齋藤に死を賜らしむ。光秀、命を奉せず。信長怒り、光秀を召して之を罵置す。嘗て將士に酒を飲ましむ。光秀、酒を逃る。信長、親追ひ捉へて之を伏せ、其項に騎り、刀を抜きて擬して曰く、「酒を飲まずば則之を飲め」と。光秀素より飲むに勝へず。強ひて一觥を嚙す。信長乃光秀を掖みて、手づから其頭を撃ちて曰

信長本能寺に  
館す

光秀反心あり

く、「好禿願以て、鼓に代ふべし」と。光秀慙憤して、自掃る、「信長己を殺さんと欲す。故に言動に形る」と。信長、森蘭丸を寵す。嘗て珍翫を陳ねて、之に謂て曰く、「汝得んと欲する所は、吾れ輒之を予へん」と。蘭丸曰く、「臣、得んと欲する所は、此に在らず。近江の志賀郡は、先臣可成の舊領なり。願くは還賜するを得ば、幸甚し。敢て望む所に非ざるなり」と。信長曰く、「暫く之を俟て、三歳の後當に汝が願を充すべし」と。光秀、屏後に在りて、之を聞き、自疑ひて曰く、「志賀は今我に屬す。我の誅せらるゝ、其れ三歳の後に在るか」と。既にして信長、光秀に命じ、蘭丸を以て女婿と爲し、之に志賀を予へしめんと欲するなり。光秀、復命を奉せず。是に至りて、命を受けて徳川氏を襲す。盛に帳具を治め、周旋甚勤む。俄にして出征の命あり。他人來りて之に代る。光秀大に悲りて曰く、「我をして徒に勞せしむ」と。悉く其具を湖中に投じて去る。是に於て、遂に反心あり。而れとも信長之を覺らず。乃津田益信及び蒲生賢秀等をして、安土を守らしめ、而して自近臣百餘人を以て、京師に入り、本能寺に館す。信忠、弟勝長等と妙覺寺に館す。光秀の安土を發するや、阪下に治行し、遂に丹波に入り、愛宕山祠に詣で、鬮を拈ること再三。夜、祠下に宿る。寝ねて寢らず。數嘆聲あ



愛宕連歌

り。従者問ふ、「何故に嘆ず」と。光秀叱して曰く、「汝が輩知る所に非ざるなり」と。其明、西坊に會し、連歌を爲す。或人、粽を供す。光秀、苞を脱せずして食ふ。卒然傍人に問ひて曰く、「本能寺の障の深さ幾尺ぞ」と。衆之を異しむ。既に罷めて龜山に歸る。

光秀腹臣に叛を謀す

【右府】信長

六月朔、光秀、從子光春、及び其將齋藤利三等五人を召し、之に謂て曰く、「汝等能く、我が爲に死するか。則一事の與に議す可きものあり。議、苟にも合はずば、則速に吾が頭を斫れ」と。五人相目して答ふる能はず。光春曰く、「臣等業に質を委せり。詎ぞ必しも問はんや。抑議する所の者は何事ぞや」と。光秀曰く、「吾れ殆ど右府に殺されんとすること、數なり」と。因りて具に語るに故を以てす曰く、「今事已に迫れり。吾れ將に先之に發せんとす」と。五人諫めて之を止めんと欲すれども、光秀の意色既に決し、諫む可からざるを視て、乃其謀を賛成す。光秀、五人に誓を納れ、質を効さしむ。是に於て、丹波の兵を悉して即發す。宣言すらく、「命を奉じて、西秀吉を援ふ」と。夜、大江山を度り、老阪に至る。右折すれば則備中に走る道なり。光秀乃馬首を左にして馳す。士卒驚き異む。既に桂川を渉る。光秀乃鞭を擧げて東に指し、颯言して曰く、「吾が敵は本能寺に在り

と。衆始めて其反を知る。

(日本樂府) 山陽作

本能寺、彌幾尺、我就大事在  
夕、交粽在手並、菱食、四、櫻梅  
雨天如曇、老阪西去備中道、  
揚鞭東指天猶早、我敵正在本  
能寺、敵在園中汝能備、



味爽、本能寺を圍み。  
呼驟して入り弓銃交發す。信長、

臥内に在り。驚き起きて曰く、「反く者は誰ぞ」と。蘭丸をして、出で、其



(織田信長肖像)

(織田信長本能寺にて奮闘の圖)  
光秀反し本能寺を圍む

信長等

旗幟を視しむ。反り報じて曰く、「惟任光秀なり」と。信長曰く、「豎子敢て爾るか」と。乃弓を手にして出づ。蘭丸以下宿直の者、みな肉薄して拒戦す。信長親射て數人を斃す。絃絶ゆ。槍を執りて闘ひ、右脇を傷く。乃走り入り、姫妾を揮しで逃れ去らしめ、火を縦ちて自殺す。年四十九。蘭丸、及び二弟坊丸、力丸及び金森長則、高橋寅松、矢代勝介、伴正林等、百餘人みな力戦して之に死す。

太閤記（織田右大臣御生書）

其食を喰ふ物は其器を毀たず、其樹に落す物は其枝を折らず、其器を害ひ其枝を折るは、自ら禍を霑るなり、此時光秀本能寺に迫つて、信長公を苦しめ奉り、早く御首を見んと將士に令して責討ちしは、是將に己が身を攻討つに異ならず、安田作兵衛真先に進んで門内に駈入り、仕黒む味方を横櫛に押通り、信長公の御首を賜らんと馳行くに、此時寺中合戦真最中と見えて、一進一退難散集合し、或は討ち或は討れ、寄手は大軍入替へく戦へども、御所方には續く新手もあらばこそ、御勢大牛討死し、今は纒に百四五十騎に討たされ、兎手落し手負はざる者なく、刺へ素肌なれば袖を切捨て裸に成り、堅甲利兵の大軍を防ぎ暇ひ、流る、汗と涌出る血は、唐紅に水くゆる龍田の川の、みぢ葉の、ひちて流る、如くなり、此時御所方の勇士高橋虎松と名乗り、三尺九寸の太刀を打振て壺所口より踊出で、群る寄手を五段三段に切開き、男を奮て血戦す、安田作兵衛此壺を見ると雖も、信長公に近付寄り、一鐘参らせんと思ひければ知らぬふりにて進行く、山本三右衛門は安田兵衛等と一所に門へ入らんとせし

が、味方の勢に隔られ、たやすく進み得ず、斯ては人に功を奪はるべしと、大門を七八間南の方へ退き、溝際に立寄り、そこに立たる足輕の肩に手をかけ、其儘に能く立てたべよと、鎧を力杖につき、あいと一はね高塚に飛上る、着たる具足は小櫻織、大袖小袖草摺のひらり、ときらめくは、蝶鳥などの戯れ遊ぶ如くにて、げに一興の見物やと賞讃の聲響しは鳴も止まざりけり、されは寄手三千人安田山本が功名に双ぶ者こそなかりけれ、扱堀より早く飛下り、是も信長公に馳合せんと進み入るに、彼の信長公の近臣高橋虎松、大太刀を真向にかざし、人なき所を行くごとく、切立て殖立て来る所に、山本三右衛門と端なく行合ひ、互に名乗て切結ぶ、虎松剛勇の壯者なれど數刻の戦、手疵數多負ひぬれば、働く専心に任せず、終に山本に討れけり、此時信長公は廣楳の際まで進み出給ひ、猶も弓射給ひしに、武道も既に盡給ひけん、絃段々に切れて飛散りければ、弓矢投捨て大音にて鎧を召す、はつといらへて奥殿より、辻が花の衣着たる三十許の女房、鎌十文字の鎧を取て信長公に奉る、信長公是を御覽じ、長谷川宗二やあると召る、に、やがて御前に参じ命を待、信長公仰せけるは、汝は武士に非ざれば敵も又是を殺さじ、女原を悉く召連れ、今の間に早く落ちゆくべし、信長が最後に女を連れたりといはれんも、此上の無念なり、早とくと下知し給ひ、かの女房が持來りし十文字の鎧をおつ取り、自ら寄來る敵に向ひ、十六歳の昔より鍛練有りし鋒先に、また、く内に十五六騎はたばたと突貫かれ、敢て近寄る者もなし、時に最前に御鎧を捧げし女房は、於能の方とて女に稀なる男婦なりしが、俱に冥途の御供せんと、二重の鉢巻縋にて結び流し、花田色の玉襟をり、しく引しめ、白柄の長刀搔込で、廣庭に走出で、

當る敵を嫌ひなくヒひ倒し殞落し、暫く挑み戦ひしが、山本三右衛門に渡合ひ腰の番ひを突通され、終に討死したりけり、右大臣信長公は御勢盛に喚き叫んで戦ひ給ふに、餘り強く當り給ひ、左の臂したゝかに突せ、御勦も自由ならず、既に危く見えさせ給ふ、蘭丸は惟任方の勇士四王天笑浦等と戦ひながら、大音にて千金の怒は骸鼠の爲に發せず、手づからの御戦は勿體なくこそ候へ、はや御入有るべしと呼はり捨て、向ふ敵を追ひ捲り、御生害の妨を防がんと悪戦する事諸人の耳目を驚かせり、信長公は蘭丸が疎に隨ひ、御生害をや期せられけん、奥の間さして引給ふを、最前より透を見合せ、伺ひ居たる安田作兵衛、信長公返させ給へと聲をかけ、鎧を上げて追奉る、蘭丸是を聞て、こは口惜しき事哉、御生害の際心元なしと、當の敵を打捨て、苦しげにちつと喚で走り、安田作兵衛止れと聲かけたり、此時信長公は戦を好み給はず、聞捨てして一間に入らせ給ひ、早く降子を引立給ふに、此時宿殘燈消すして、信長公の御影ありくと移りたり、安田影を目當に、鐵壁も通れと降子越に突通せば何かはしらず手答し、鎧先動くに中りたりと思ひ、降子蹴破りかけ入る所を、後より雷の落かゝること、森蘭丸を見知りたるかと鎧を上げて突く所を、安田作兵衛足踏直し、心得たりと鎧打合せて戦うたり、安田は明智が股肱の勇士、蘭丸は織田の逸物、龍と踊り虎と駈り、上中下段透間なく飛違うて戦ひしは、烈しかりける有様なり、蘭丸其日の出立は樹梅に鶴の丸を白に染殘したる素袍を着、太刀計を帯びたり、時に生年廿二歳、安田は思ひ掛けし軍なれば、黒皮の具足に肩草摺を白絲にて織たるを着たりけり、安田作兵衛も聞ゆる剛勇の若者なれど、蘭丸が必死の戦に始終叶ふべくも覺えざれば、心中に是を感じ、右

に流し左に拂ひ、少し進んで大に退き、軍になれたる場敷の功者、次第く、に條側まで引行を、蘭丸背て只一突と大喝一聲喚て突くを、作兵衛心得、後飛に大庭に飛たりしが、誤つて切石を疊み外して雨垂落の溝の中へ、鎧持ながら真仰向にぞ倒れたる、蘭丸得たり賢しと椽端に走り出で、下突に突通す、安田溝の中に身屈まり、草摺の間より陽根を半突切り、兩股骨へかけ、鎧先ぬけて敷石にかつしと當る、安田其柄をしつかと取り、上より引く勢に引起され、其儘佩刀を引抜て、片手なぐりに拂ひければ、素肌の蘭丸兩足を切落され、哀むべし大剛の勇士、枯木を倒すことごとふと轉ぶを、四王天又兵衛走寄て首を取たり、信長公は奥深く入らせ給ひ、殿中に火を放ち、其中にて御生害ましくける、御年四十九歳なり、嗚呼悲きかな、今日はいかなる悪日ぞや、いにし天文年中より今天正十年まで、四海の内に横行し、武威をもて天下の兵亂を切鎮め、民を塗炭の中に救ひ、四方の敵國其英名を鬼神のごとく恐れ振ひ、正二位右大臣に昇進し、大業既に成就せしを、逆臣惟任が爲に弑せられ給ひしこそ口惜かりし次第なれ、云々

光秀、信長の首を索むるに得ず。意甚懼る。齋藤利三、其衣の焦爛する者を得て之を示す。光秀尙安せず大に之を索む。信忠、變を聞きて大に愕き馳せて之に赴き、途に本能寺の烟起るを望見す。村井貞勝路左に跪きて報じて曰く、「右府已に弑に遇へり。君宜しく急に二條第を保つべし」と。信忠之に従ふ。貞勝をして皇太子を禁内に徙さしめ、入りて之を保つ。衆、或は議して曰く、「賊未だ來らざ

信忠二條城に  
籠る

光秀二條城を  
圍む  
〔逆旅〕旅宿

(織田信忠  
僚)



信忠死す  
松野平助

るに及びて、馳せて安土に歸り、我が旗鼓を建てば、則數萬騎立所に至らん。賊を討ち仇を復せんこと、一舉にして辨すべし」と。信忠曰く、「彼れ既に此大事を謀る。豈兵を置き、路を塞がざる者有らんや。其れ屍を道に暴さんよりは、寧此に自裁せん」と。衆以て然りと爲す。日中、賊二萬餘騎を合せて來り圍む。吾が兵僅に二三百人。鋒を連ねて奮戦し、庭に相逐ふ。猪子兵介、小澤六郎、逆旅に在り。警を聞きて之に赴く。主人之を止む。聽かずして入る。梶原松千代も亦、入りて援けんと欲す。家僕又右衛門之を止め、代りて入る。信忠之を褒めて長刀を賜ふ。數十人を斃して死す、賊我が兵の力戰するを思へ、乃弓銃手を遣し。近衛第の屋上に登り、瞰して亂發す。我が兵死傷略盡く。信忠乃腹を割きて死す。毛利秀高、福富貞次、菅谷正頼、齋藤新五、みな之に死す。其餘の從兵一人も逃るゝ者なし。初め安藤範俊の家臣松野平助、材名あり。範俊敗る。信長之を祿す。是に於て、八幡祠に宿る。難に及ばず。齋藤利三、素より之と善し。書を以て之を招く。平助伴り應じ、隙を窺ひて光秀を刺さんと欲す。光秀其意を覺り、敢て親近せず

助乃自殺す。光秀大に織田氏の臣僚の京師に在る者を索めて之を殺す。獨前田玄以、信忠の遺命を帯び、逃れて岐阜に至り、信忠の子三法師を抱き、走りて清洲に入る。

信長の性質

信長、尾張に起り、常に四方を平定するを以て志と爲す。虛美を喜ばず。廷臣或は征夷大將軍たるを勸む。信長曰く、「吾れ何ぞ遽に室町の故號を襲ふことを爲さん」と。然して將士功あれば、輒急に之を賞し、公廉を奨用して、政偏私なし。獄内の贖金は、悉く以て橋道を修むるの資と爲す。尤浮屠氏を憎む。嘗て一僧あり。自神通を得と稱し、愚民景附す。信長召見して詰問し、人をして、其兩手を捉らしめて、親刀を擧げて其頭を斫る。曰く、「猶神通を得るか」と。柴田勝家、一向賊の首級を獻す。信長喜色あり。楠友閔、側に在りて、諫めて曰く、「誰か天下の民に非ざらんや」と。因りて仁暴の是非を極論す。信長之を嘉納す。然して時、室町氏愉惰の後を承け、刑殺を以て威を立つ。得る所の地は、必其主を誅し、以て家臣に予ふ。性も亦猜忍にして、諸將の舊惡を追咎す。光秀の若き者、みな自安せず。其志を終へざる所以なり。

安土城

光秀、既に京師を定め、安土を取らんと欲し、即日、馳せて瀬田に至り、書を城

蒲生賢秀

主山岡景隆に遺る。景隆、使者を斬り、橋を焼きて逃る。光秀、卒を發して橋を修む。初め安土城中、變を聞きて未だ確報を得ず。物情恟然たり。日暮、數騎あり。馳せて京師より歸る。士民を要して之を問ふ。騎曰く、「兩公薨す」と。城中大に擾る。蒲生賢秀、衆を鎮めて拒ぎ守らんと欲す。衆、一夜に四五たび驚く。諸將士、逃亡する者多し。賢秀乃其子氏郷をして、輿馬數百を具へしめ、夫人以下を迎へて其邑日野に逃る。姫人、或は賢秀に天主の貨寶を取りて之を火き、以て賊に予ふる母れと勸む。賢秀曰く、「先君心を盡し經營する所、焼くに忍びざるなり。光秀其れ或は之を燒き、もしくはこれを取りて以て自殖するも、豈能く久しからんや。今吾れ其貨を取らば、人、之を何と謂はん」と。木村某をして之を守らしめ、去りて日野を保守す。光秀至り、其將士と貨寶を分ち取る。會天使來り之を勞ふ。光秀、意益驕る。使を遣して其女婿細川忠興を招く。忠興其使者を追ふ。其友人筒井順慶を招く。順慶至らず。光秀乃悞れて、京師に入り、務めて惠政を行ひ、以て人心を收む。復安土に適き賢秀を攻めんと欲す。賢秀、使を伊賀に遣し、援を信雄に求む。信雄、危疑して發せず。賢秀、乃質を送りて信と爲す。信雄、乃出でて椎山に次す。光秀敢て動かす。會伊賀に盜起る。

光秀、信興順慶を招けども來らず

信雄

秀吉

光秀を山崎に破る

中川清秀

柴田勝家

信雄、故を以て進む能はず。信孝、初め大阪に在り。信長の密旨を奉じ、艦を紀伊に修むと宣言し、因りて急に鷲森を襲ひ、幾と光佐を殺さんとす。而して變報至る。信孝、信澄、長秀と、圍を解きて退き、大阪に至る。信澄も亦、光秀の婿なり。叛きて光秀に應じ、其子城に據る。信孝、長秀、之に迫りて自殺せしめ、遂に光秀を誅せんと欲す。而れども兵潰えて收む可からず。會羽柴秀吉、數萬騎を以て備中より至る。信孝、大に喜び乃尼崎に會議す。諸將先を争ひて決せず。乃信長在時の法に因りて、次するに城邑の前後を以てす。高山友祥先鋒たり。中川清秀之に次ぎ池田信輝、丹羽長秀、又之に次ぐ。信孝は、自四千人に將として其後に在り。秀吉、後拒たり。光秀を山崎に討ちて、大に之を破る。光秀、誅に伏す。明智光春、安土を守る。破を聞き、城を燒きて阪下に走り、其妻子を殺して自殺す。齋藤利三等、みな捕誅せらる。清秀、俗字は瀬兵衛、山崎の役に、戰最力む。信孝、馬より下り、其手を握りて曰く、「吾子の力戰、吾れ徳を忘れず」と。秀吉、輿中より呼びて曰く、「瀬兵衛、勞せり」と。清秀曰く、「筑前守、氣貌已に天下を吞めり」と。信輝、秀吉等、信長の屍を本能寺に收めて之を葬り、遂に清洲に之を、三法師に謁す。柴田勝家、佐々成政、長尾景勝を、越中に相持し、

瀧川一益

魚津を抜く。變を聞きて收め、入りて光秀を討たんとす。柳瀬に至り。提聞を得直に清洲に之く。瀧川一益、厩橋城に在り。是の月七日、變聞を得。部下の將士説きて曰く、「變故の際人心測られず。且之を秘し、更に諸客將の質を取りて、然る後事に託して西上せん」と。一益曰く、「是れ豈秘す可けんや。我より之を發するに若かず」と。乃急に令を傳へて、諸客將を召し、變事を告げて曰く、「事已に此に至る。吾れ此地に在ると否とは、諸君の計る所に在り。吾れ且諸君の質を還さん」と。客將皆相謂て曰く、「管領、賊を推して我が輩を遇す。我が輩誓ひて相負かず」と。乃重ねて質を納れんことを請ふ。一益謝して之を遣歸す。明日、變報四より至る。北條氏直、變に乗じて一益を撃たんと欲す。一益乃部下八千人を率ゐて、鉦川に軍す。諸客將萬騎を以て來り援け、撃ちて敵の一將を走らす。氏直、全軍を以て繼ぎ至る。一益、客將に言はしめて曰く、「諸君、惠然一戰す。以て休むべし。一益請ふ、代り進まん」と。乃進み戰ふ。利あらず。其將篠岡某等二百人止り死す。一益、厩橋に歸り、盡く質子を返し、信濃に徑りて西す。使を遣して沿道の城主に告ぐ。眞田昌幸、木曾義昌、みな質を送り、兵を出して護送し、尾張に達せしむ。河尻鎮吉、甲斐に在り。甲斐亂る。會徳川氏の使者至る。鎮吉

【鉦川】上野

河尻鎮吉

清洲の會議

秀信

信孝秀吉を除かんとする

其異あるを疑ひ、之を殺す。鎮吉も亦、國人に殺さる。森長可、信濃に在り。諸質子を挾み、馳せて美濃に入り、盡く之を斬る。前田利家は、能登を定め、丹羽長秀は、若狹を定め、皆兵を收めて秀吉と清洲に會議し、三法師は、信長の嫡長孫たるを以て、立て、嗣と爲す。名を秀信と更む。安土に居らしめ、奉するに近江三十萬石を以てし、其餘に之を分領し、以て秀信の長ずるを諱つ。信雄は尾張を領し、信孝は美濃を領し、勝家は長濱を領す。長秀、素より若狹を有す。並せて志賀、高島を領す。信輝は、兵庫、尼崎を並領す。而して秀吉は、播磨、丹波、但馬、因幡を領す。勝家、長秀、信輝と更吏を京師に置く。已にして專秀吉に決す。秀吉の國、最富み、兵最強し。矜貴自持す。而して秀信は幼孩、信雄は暗弱、みな之を制馭する能はず。信孝英氣あり。曰く、「我が家、變故に遭遇す。而して我が家の奴輩、長を捨て、幼を立て、以て争ひて遺地を擻る。且吾れ信雄と同年に生る。特月日の少し後るゝを以て故に兄弟の名あるのみ。吾れ讎を復せし功あれども、秀吉乃攘みて之を没す。其篡竊の勢已に成れり。速に之を誅せずば、後制す可らず」と。乃密に勝家、一益と、秀吉を討たんことを謀る。又人をして長秀に説かしむ。長秀肯せず。秀吉、之を聞きて、乃信雄に結び、兵を發して信孝

を岐阜に攻む。岐阜兵少し。長秀、信孝を勸めて、其母及び乳母を出し、質と爲して之を和せしむ。

十一年

秀吉信孝の母を殺す

十一年正月、信雄、信孝の黨、北畠具親を篠山に攻めて之を陥れて、遂に秀吉と俱に一益を長島に攻む。二月、勝家、軍を柳瀬に出す。秀吉、自赴きて之に當る。四月、信孝、復兵を起して、勝家、一益に應ず。秀吉、信孝の母を安土城下に殺す。乳母の子幸田某、岐阜に在り。母之に書を遺りて曰く、「臣の身を君に致すは大義なり。親の子に先だちて死するは常道なり。汝は三七君に事へて其大義を行へ常道を以て自釋き、我が故を以て貳心を懷く勿れ」と。秀吉、幸田を招けども至らず。乃乳母を磔殺す。秀吉遂に岐阜を圍む。信孝、戦ひ敗れ、幸田兄弟、力戦して之に死す。

三七君信孝

賤ヶ嶽の戦

是の時に當りて、長秀以下の諸將、みな秀吉に屬し、之が爲に勝家を距ぐ。勝家、佐久間盛政をして、中川清秀を襲殺し、兵を收めて速に歸らしむ。盛政、勝に忤れて歸らず。秀吉、堀尾吉晴、及び降將稻葉通朝、氏家行廣等をして、信孝に備へしめて、馳せて盛政を擊ちて之を擒にす。勝家曰く、「盛政、我が言を用ゐず。果して此敗を取る。吾れ自往きて決戦せん」と。乃其兵を檢す。兵已に逃亡して、

毛受勝介

府中越前

在る者僅に三千。諸將皆退かんとを勸む。勝家曰く、「吾れ嘗て少を以て衆を擊ち勝を獲しこと數なり。諸君何ぞ我を扼むるや」と。家臣毛受勝介曰く、「往時君の將ゐし所は、皆濃尾の驍卒なり。今は北兵を領す。素より拊循の者に非ず。逃亡する所以なり。摧敗の餘何を折衝するに堪へんや。臣請ふ、君の背職を假り、偽りて君と稱して死なん。君逃れて北莊に入り、徐に自計を爲せ」と。勝家之に従ふ。秀吉、兵を縱ちて追撃す。其背職に遇ひ大に驚き、急に隊を整へて之を圍む。勝介大に呼びて曰く、「柴田勝家此に死せん」と。其兄と皆力戦して死す。勝家、間を得て走る。府中を過り、入りて前田利家を見て曰く、「子我が爲に力を出す。謝する所を知らず。吾れ命極りて此に至る。復何をか言はん。吾れ飢ゑたり。請ふ、飯を供せよ」と。利家之に供す。勝家、食畢りて、善馬を借りて出づ。利家、之に従はんと欲す。勝家之を揮ひて曰く、「子は秀吉と善し。我を以て爲す母れ」と。終に北莊に歸り、其將領の敵と姻ある者に諭して、皆之を遣る。留らんことを願ふもの九人。秀吉至り、城を圍むこと數重。勝家、夜、將士と天主閣に宴し、慷慨して曰く、「吾れ先君の恩を報せんと欲して、終に猴面藤吉に困しめらる。豈天に非ざらんや」と。其妻は、信長の妹なり。勝家、之をして逃れ去らしむ。妻

柴田勝家死す  
信孝自殺す

泣きて曰く、「妾、去秋、岐阜を出で、より、業に身を良人に委ぬ。今日の事、固より心に期す。何ぞ必しも逃れんや」と。是に於て、夫妻、訣飲して曉に徹す。終に刃に伏して駢死す。侍臣文荷といふ者、火を闇に縦ちて之に殉す。是の時に當りて、信雄、岐阜を圍む。城兵潰ゆ。信孝、出で、内海に奔る。信雄、人をして之に迫りて自殺せしむ。

賤嶽合戦記（勝家切腹之事）

廿三日午前、攻敵などを止、よばはりて曰、昨日廿二日之夜、山中にて御子息權六殿並に玄蕃殿を生捕て参候、あな痛はしき御事にて候と呼はりぬ、是より城中ひそまりて音もせず、其後は請取し門々を防ぎ守る計にて、しかく、敵砲も打たず、夜に入るとひとしく、殿守之上にも下にも、廣間其外梅々などにも酒宴はじまりけり、勝家孟に向つ、一族他家の人々をよび並べ申されけるは、あの藤吉耶猿くわじやが爲にかく成果る事無念之次第、とうかう云に及ばれず所詮酒呑で、明日はうき世の隙をあげばの、雲と消なんとて、文荷齋それと有しかば、名酒の樽共あまた置ならべ、種々の肴を出しつ、酒宴こそ始めけれ、彌右衛門尉に申付、何れの梅にも酒を呑候へと、樽肴給りしかば、何方も酒宴の聲々聞えけり、小谷の御方へ勝家さし給へば、一二酌て又返し侍けりるに、匠作も數盃をかたぶけ文荷齋にさし給ふ、小島若狭守は酒宴の半にも四方を見廻しつ、其品露心に忘れざりしかば、心を安んじゆるやかに酒をぞ愛しける、盃も度々廻りければ漸終なんとす、勝家小谷の御方に申されけるは御

身は信長公の御妹なれば、出させ給へつ、がもおはしますまじきと有ければ小谷の御方決りませ給うて、去秋の終岐阜より参り、かくまみえぬ事も前世の宿業、今更驚くべきに非ず、爰を去ん事思ひもよらず候、しかばあれど三人の息女をば出し侍れよ、父の菩提をも問はせ、又自が跡をも弔はれん爲ぞかしとの給へば、いと安き事なりとて、其よし姫君に申させ給ふ姉君いやとよ、母上共に同じ道にゆかん物をとなき悲び給ふを、文荷齋其譯も聞入れず御手を取引立三人出し奉りぬ、夜半の鐘聲殿守に至りしかば、御二所深閑に入りぬ、彼の四面楚歌の夜の夢、楚王虞氏が深き恨もかくやと思ひ出にけり、何れも梅々へ引入りまどろまんとなれば、はや郭公雲井に音づれ、別れを催し侍るに

小谷御方  
勝家

夏の夜の夢路はかなき跡の名を雲井にあげよ山時鳥  
さうねだにうちぬる程も夏の夜の別を誘ふ時鳥かな  
節義に當りて不變者なれば同じ道に侍らんと  
契あれやすしき道に伴ひて後の世迄も事へ仕へん  
となん脈ありければ、匠作猛き心もそれなう見え、更に袖をば濡されける  
小谷の御方其外數々の女房達、念誦稱名の聲哀をとめけり、若狭守文荷齋殿守の下に込草をつみ置、兼ての用意殘處もなく沙汰し置しかば、心靜に火をか  
け、半燃出るに及で雜人原をば出し、さて勝家のおはしましける五重に上り、  
下はかく仕まひ申候、御心靜に沙汰し給へと申上しかば、流石最期はよかりけり、男女三十餘人同じ煙と立上りぬ、勝家の氣象常にしも違ふ事、それぐに  
感をなし、卯月廿四日申の刻にぞ終りにけり。



佐久間盛政等  
殺さる

五月、秀吉、佐久間盛政、柴田權六を京師に斬る。盛政、素より虓武、戦ふ毎に鐵砲を用ゐ、躬自陣を陥る。人呼びて鬼盛政と曰ふ。刑に臨みて言て曰く、「我れ悔ゆるくは修理の言を聴かざりしを。苟にも修理の言を聴かば、則秀吉をして我が如くならしめん」と。修理は勝家なり。

一益降る

六月、一益、秀吉に降る。秀吉、之を近江に放ち、信雄をして其地を取らしむ。長秀は己を助けしを以て、之に柴田氏の地を取らしむ。池田、堀、森氏、みな分地あり。

秀吉信雄を除  
かんとす

既にして秀吉、信雄を激して之を除かんと欲し、飛語を設けて曰く、「羽柴、將に北畠氏に不利ならんとす」と。

十二年

十二年、正月、諸將、正を安土に賀す。皆過りて信雄に見ゆ。獨秀吉大津に至りて入らず。信雄怒る。諸將之を和解して、三井寺に盟はしむ。信雄の將岡田重吉、津川義冬、淺井多宮、瀧川雄利、みな驍將なり。秀吉、盟に先だちて四人を招き、勝ふに厚利を以てす。三人之を聽す。獨雄利伴り聽し、盟に臨みて信雄に告ぐ。信雄、驚き馳せて長島に歸り、遂に秀吉を討たんことを議す。三人以て不可と爲す。信雄曰く、「吾れ猴奴を誅せんこと易々のみ。汝が輩、何ぞ我を沮むを得ん」

と。三人、疾と稱して出でず。

徳川家康信雄  
を助く  
【先考】信長

三月、信雄、甲を伏せ、三人を召して之を誅し、分ちて其邑を攻め、松島を抜きて、之を雄利に予へ、援を徳川公に求む。徳川公の安土に来るや、信長、之をして界府に遊ばしむ。信長の害に遭ふを聞き、走りて其國に歸る。是に於て兵を發して信雄を助く。信雄、又池田信輝、及び其二婿森長可、堀秀政を招く。秀吉も亦、信輝を誘ふ。信輝の子輝政、長島に質たり。信雄、之を還して曰く、「先考、卿を待する最厚し。卿必我に負かじ。我れ其質を持するは、是れ卿を疑ふなり」と。信輝既に其質を收め、乃秀吉に應じ、瀧川一益を誂みて、亦秀吉に應せしむ。兵を聚めて木造に據りて舊封を復す。織田信包、蒲生氏郷、關萬徹、皆一益に應じて、嶺城を攻む。城將佐久間正勝、部將山口重政等と、固く守りて之を拒ぐ。敵、援兵至ると聞き、圍を解きて去る。正勝則長島に還り、又壘江を守る。信雄、清洲に在り。徳川公と兵二萬を合せて、小牧に軍す。秀吉、十二萬人を以て大山に軍す。

小牧の戦

【二將】信輝  
長可

四月、秀吉、信輝、長可をして參河を襲はしむ。信雄、徳川公と、邀へ撃ちて二將を獲たり。秀吉、亦筒井定次、九鬼嘉隆をして、松島を攻めしむること月餘。雄

山口重政

利、徳川氏の將服部正成と、固く守りて之を拒ぐ。定次の和を講ずるを以て、城を致して卻く。秀吉、嶺、神戸、利井、竹鼻の數城を抜き、退きて大垣に軍す。六月、信雄、正勝をして荳生に城かしむ。一盆乃壁江の留守前田種利を誘ひ降す。種利の二子長種、定利は、前田、下市の二壘を守る。山口重政は、大野の壘を守る。二子みな降る。遂に重政を招きて曰く、「汝が母壁江に在り。聽かずば則之を殺さん」と。重政答へて曰く、「吾れ命を受けて、城を守るを知る。其他を知らず。豈公等の人面獸行に倣はんや」と。一盆、嘉隆と、迫るに兵艦を以てす。重政、炬を投じて燒きて之を走らす。敵、轉じて下市に赴く。又撃ちて之を走らす。信雄、徳川公と來り援けて、前田、下市を抜き、長種を走らせ、定利を斬り、大に重政を賞し、遂に壁江を圍む。

【外山】今富山  
秀吉伊勢に入り  
信雄と和す

七月、一盆、種利を斬りて降る。信雄、其死を宥す。乃走りて木造に歸る。城將富田知信、疑ひて納れず。一盆乃京師に奔り、後北陸に死す。八月、秀吉、又尾張に入り、萬徹、氏郷をして、伊勢の諸城を攻めしむ。佐々成政は、兵を外山に起して、遂に信雄に應じ、前田利家を攻む。克たず。十一月、秀吉、八萬人を以て伊勢に入る。信雄、出で、陣を對す。秀吉、人をし

成政雪を胃し  
て信濃に入る

て和を請はしむ。信雄之を許し、桑名の城下に盟ふ。秀吉、陽に信雄を尊び、臣禮を執ること故の如し。信雄、大に喜ぶ。成政、未だ之を知らず。徳川公に就きて謀を協せ、以て秀吉を圍まんと欲す。乃疾と稱して屏居し、潜に壯士百餘人と雪を胃して、信濃に入る。侍臣を外山に留め、饋食稟啓、常の如くせしむ。之を誡めて曰く、「我が往還を度るに、二十日に過ぎず。利家必覺る能はじ。即し覺らば兵を治めよ。則我れ已に歸り至らん」と。是に於て、橋に乗りて兼行す。經る所皆山谷、絶えて人烟なし。一の樵家を得て之に入る。樵夫、大に愕きて、鬼物と爲す。從者曰く、「吾が輩は越中より深志に赴く者、汝、郷導を爲せ。吾れ重く汝を賞せん」と。樵夫乃柴を燒きて之を燎り、導きて下諏訪に至り、健歩をして徳川氏に告げしむ。徳川氏乃人馬を遣して之を迎ふ。十二月、遠江に至り、説きて曰く、「願くは公、五國の兵を擧げよ。吾も亦越中を擧げて、兩雄力を戮せ、鼓行して西せば、必秀吉を擒にせん」と。徳川氏、其言を以て偃れりと爲し、且、北地は出で援ふに便ならざるを知り、乃之を辭す。成政、遂に尾張に適き、信雄に再兵を擧げんことを勸む。信雄、肯かず。成政意を失ひて歸る。

十三年

信雄、從三位に叙し、參議に任せらる。十三年、正二位に進み、大納言に遷る。初め丹羽長秀、秀吉を以て忠功ありと爲し、意を枉げて之を助く。是に於て、其勢、織田氏の上に出づるを視、則大に悔恨し、疾に託して自殺す。其子長重、猶弱なり。舊臣與に謀りて、兵を擧げて長秀の志を繼がんと欲す。謀頗る漏る。八月、秀吉、北、成政を攻む。成政逆へ戦ひ、克たずして降る。秀吉、乃越中を前田利家に與へ、越前を堀秀政に予へ、長重に返すに若狹を以てす。

丹羽長秀自殺す

十五年  
長重松任に移る

十五年、秀吉、長重の軍法を犯すを以て、若狹を奪ひ、擯けて松任の城主と爲し五萬石を給す。家臣成田某、憤懣して、其同僚に謂て曰く、「吾れ事を擧げんと欲す。誰か吾に與する者ぞ」と。衆敢て答ふる莫し。成田罵りて曰く、「皆人に非ざるなり」と。秀吉、之を聞き、人をして成田を殺さしむ。是の歲、秀吉、成政に予ふるに肥後を以てす。肥後に盜起る。秀吉怒る。明年閏五月、成政、自大阪に赴きて之を謝す。秀吉、人をして之を尼崎に迎へしめて死を賜ふ。信雄、從二位内大臣に陞る。秀吉、其咽喉の地に據るを以て、之を徙さんと欲して、未だ果さず。

十八年

十八年、秀吉、北條氏を伐つ。信雄、兵一萬五千を以て之を助け、韭山を攻む。

北條征伐  
信雄封地を失ふ

事平ぐに及びて、秀吉、徳川氏を關東八州に封じ、其舊國五州を以て、信雄に致さんと欲す。信雄、辭して曰く、「尾張、伊勢は、吾が故地なり。仍これに居るを得ば足れり。敢て大封に膺らんや」と。秀吉、其己が封を受くるを屑しとせざるを怒り、乃二州を奪ひて、之を己が甥秀次に予へ、信雄を出羽の秋田に逐ふ。明年、之を伊豫に徙す。山口重政等、みな徳川氏に事ふ。

文祿元年  
秀雄  
秀勝

(蒲生氏郷肖像)



文祿元年、秀吉、信雄を召して、大阪に至らしめ、其子秀雄に予ふるに、大野五萬石を以てす。信雄、退きて伏見に居り、髪を削りて、常眞と稱す。常眞の弟次丸、信長の在時より秀吉に養はる。更に秀勝と名づけて、之を丹波に封す。左近衛少將と爲る。

四年  
蒲生氏郷卒す

四年、秀勝卒す。嗣なくして國除かる。是の歲、蒲生氏郷卒す。氏郷幼より英敏なり。信長、之を識拔し、十餘萬石を予へ、女を以て之に妻す。秀吉、又任するに方面を以てす。累に封を加へ、百萬石に至り、會津を鎮せしむ。己にして之を悔ゆ。石田三成、因りて其異心ありと譖りて、之を毒す。疾作りて起たず。孤子秀行嗣ぐ。秀吉、其寡婦織田氏の美を聞き、之を取らんと欲す。

す。織田氏、肯せず。秀吉之を脅す。家臣交其往くを勸む。織田氏、髪を削り、死を以て自失ふ。秀吉怒る。

慶長三年  
秀信

慶長三年、事に託して其八十三萬石を削り、之を宇都宮に徙す。此の時に當りて、秀信、年已に長じて中納言と爲る。秀吉、之を岐阜に徙す。食邑故の如し。秀吉薨じ、子秀頼嗣ぐ。徳川公、天下の政を攝す。上杉景勝、石田三成と、公を除かんと謀る。

五年  
三成亂を成す

五年六月、徳川公、諸將を率ゐて上杉氏を攻む。秀信、快遊者倭にして、國用窮竭す。故を以て軍に従ふこと能はず。七月、石田三成、兵を關西に擧げ、徳川公を追躡す。人をして、秀信を脅さしめて曰く、「岐阜は東下の衝に當る。従はずば則ち粉せん」と。秀信、疑懼して三成に附かんと欲す。老臣木造具康諫めて曰く、「公は右府の嫡孫を以て、顧りて豊臣氏の家奴に役せらるゝか」と。秀信、猶豫して決せず。具康等、之を前田玄以に謀らんと請ふ。玄以、是の時、京師の所司代たり。秀信乃之を遣す。玄以曰く、「速に東に嚮へ」と。具康馳せ還りて、未だ至らず。近習争ひて其西軍に應せんことを勸む。三成、又黄金百枚を遣り、暗はすに大封を以てす。秀信、終に三成と、澤山に盟ふ。具康至りて嘆恨し、因り

秀信西軍に應ず

木造具康

秀信卒す

て又三成を勝殺せんことを請ふ。聽さず。終に西軍の爲に岐阜を守る。尾張、美濃の諸城、是に依りて多く西軍に屬す。既にして東軍還りて清洲に至る。秀信、兵を出して木曾川に拒ぐ。具康曰く、「我が兵寡し。請ふ、壁を堅くして後援を待たん」と。聽かず。東軍、川を濟り來り戦ひ、北ぐるを追ひて城に傳く。秀信、兵を分ち外城を守る。具康曰く、「寡兵分つ可からず。請ふ、專、内城を守らん」と。又聽さず。城遂に陷る。具康、力戦して創を被る。秀信、降りて高野に逃れ、數歳にして卒す。東將福島正則、人をして具康を勞問せしむ。既にして前田氏、之を聘せんと欲し、延くに厚祿を以てす。辭して曰く、「福島公、已に臣を知る」と。遂に正則に就き、其國老と爲る。

信雄西軍に應せん

信雄、伏見に在り。徳川公の東征するや、信雄、疾を以て従はず。三成、信雄を誂む。信雄、辭するに兵なきを以てす。乃約して金千枚を給し、以て兵を募らしむ。曰く、「事成らば復尾張に封せん」と。信雄、乃之に應じ、金を請ふ。乃銀千枚を予ふ。信雄曰く、「尾張知る可し」と。秀雄を召して之を謀る。秀雄、力諫して止む。秀雄卒して嗣なし。徳川氏、封を收めて、信雄を問はず。信雄徙りて京師に居り、遂に大阪に徙る。秀頼の母と中表の親有るを以てなり。初め信長の妹、

柴田勝家の三女

淺井長政に適きて三女を生む。再柴田勝家に適く。勝家、死に臨みて、人をして三女を一乗谷に匿さしむ。秀吉、收めて之を育つ。皆容色あり。秀吉自其長女を娶る。次女は京極高次に嫁ぎ、二女は少將秀勝に嫁ぐ。秀勝卒す。更に徳川氏の婦と爲す。長女、秀吉の寵を專にす。秀頼を生み、母子共に大阪に居る。乃信雄を迎へて天満第に居らしむ。

十九年、片桐且元、遊君信雄に大本を圖る

信雄大阪を去る

十九年、秀頼の傅片桐且元、關東に使用して歸る。或人、之を淺井氏に讒す。淺井氏、乃信雄を延き、人をして之に説かして曰く、「且元關東と謀を通じて、吾が母子を圖る。吾れ將に其歸るを待ち、甲を伏して之を誅し、遂に兵を擧げんとす。内兄、我が爲に將となれ」と。信雄驚きて曰く、「是れ大事なり。且彼れ叛狀未だ見れず。請ふ、之を熟思せよ」と。淺井氏、之を聞き、憚らずして曰く、「再請ひて従はずば、當に先此翁を除きて漏泄を防ぐべし」と。一侍女、信雄と故あり。茗を捧げて出で、其耳に附きて之を告ぐ。淺井氏、再請はしむ。信雄伴り諾して曰く、「事已に此に至る。吾れ豈固辭せんや。吾れ少きも、亦一萬に將たり。指揮の方は固より慣熟する所なり。今老いたりと雖、猶能く方面に當るを得ん」と。淺井氏、大に喜び、歸りて報を候たしむ。信雄、第に歸り、其下に謂て曰く、「吾

長益大阪に在り

元和元年

長正

長正、尙長

長益卒す

れ豈再徳川の徳に背く可けんや」と。乃京師に走り、人をして馳せて且元を要し之を警めしむ。且元、故を以て免るゝを得たり。信長の弟長益、秀吉に屬し、大和二萬石を食む。從四位下侍従たり。髪を削りて、有樂と稱す。淺井氏の外叔なるを以て大阪に在り。大野治長等と、並に秀頼を輔けて、東軍を拒ぐ。城中これに倚頼す。和議起るに及びて、先質を東に納れ、淺井氏に勸めて和を成さしむ。和成る。長益乃駿府に赴き、請ひて曰く、「僕園中に在り。抜けて東軍に歸せんと欲す。而して和適に成り、以て今日あるを得たり。僕復願ふ所なし。獨願くは京師、界府の間に於て、一隙地を得て、終老の計を爲さん」と。徳川公、優旨慰藉す。

元和元年、兵再起る。長益少子尙長と、京師に出奔し、遂に關東に赴き、徳川公に尾張に遇ひて、悉く城中の虚實を告ぐ。其長子長正、雲正寺と稱す。猶大阪に在りて、元帥たらんと請ふ。衆、之を許さず。長正曰く、「吾れ信長の從子にして秀頼の從父なり。乃元帥と爲るも、何ぞ不可ならん。今此の如し。復何か望まん」と。亦京師に出奔す。事平ぐに及びて、徳川氏、長益の地を分ちて、芝村を長正に、柳本を尙長に賜ふ。幾何もなくして長益卒す。信雄に賜ふに、大和宇多郡五

信雄卒す  
信友、信良

萬石を以てす。寛永七年、卒す。第五子信友嗣ぐ。第四子信良、兄秀雄の國除か  
るるに及びて、召されて關東に至り、上野の小幡を賜ひ、二萬石を食む。信友の後、  
故ありて二萬石を削り、丹波の柏原に徙ざる。信良の後、故ありて一萬石を削り、  
出羽の高畠に徙ざる。此四家並に立ちて今に至る。位、從四位下に過ぎず。然し  
て豊臣氏既に亡びて、織田氏の祀は、永く徳川氏と俱に存す。識者以て其流澤遠  
く重盛の忠孝に出で、近く信長の功德に由ると爲すなり。

織田氏の勳王

外史氏曰く、往時、平安の故老、元龜間の事を観るに及ぶありて言ふ、其時宮闕廢  
廢し、群兒頽垣の中に入り、土を搏ちて戯を爲す。織田公來るに及びて、始めて  
觀るべき有りと云ふと。

夫れ應仁以還、海内分裂し、輦轂の下、毎に兵馬馳逐の場と爲る。右府に非らず  
して誰か能く草萊を闢除して、王室を再造せんや。朝廷其功を酬ゆるに及びて、  
撰するに征夷の拜を以てす。則辭して受けず。蓋し將家と王室と、俱に衰頽を  
極め、名重く實輕し。猶謂ゆる大將軍の告身、僅に一醉に直する者の如くならざ  
らんや。右府の志、海宇を混同するに在り。遽に虚名を冒すを欲せざるのみ。之  
を彼の關東管領を假りて以て隣國に誇る者に視ふるに、其器量固より間あり。

【告身】受官の  
符  
信長の志

超世の方

織田氏の強大  
になりし因縁

抑朝廷の名器、天下の豪傑を輕重するに足らざること、此の如きに至る。之を挟み  
て以て天下に令するも、天下未だ必變動せざるなり。而して右府、之が爲に扶植  
經紀し、勳勳として置かず。是れ其高義、齊桓を凌ぎて晋文を駕すと謂ふと雖、  
可なり。是の時に當りて、群雄の方隅に割據する者、環視傍觀して、能く此に出  
づる莫し。其日夜務めて眠食に代ふる所は、曰く「戰のみと。而して其謂ゆる戰  
は、徒に勝負を銖兩の間に較べ撃擧搏擧、以て尋常を争ふ、武田、上杉、北條、  
毛利の如き、槩然らざる無し。獨右府、超世の材を以て、籠蓋して之を取る。其  
武田、上杉を視ること、猶我が藩籬の如く、其をして相持して決せず。日に其財  
賦を費し、月に其甲兵を敝れしめ、適以て我が東西に隔闕するに足れり。而して  
我は以て力を專にし、畿甸を經略するを得たり。畿甸已に定りて、西面して毛利  
氏に臨む。枯を拉ぎ朽を摧くが如きのみ。是に於て、我が疆土益大に、兵力益強  
し。強大の我を以て、費敵の敵に加ふ。上杉、武田、固より我を支ふる能はず。  
而して北條氏、孤立なれば、則東國皆圖る可きなり。是れ其成算、夙に胸中に定  
まれり。奚ぞ必しも區區の勝敗を較べんや。猶夫の奕碁の如きなり。天下の群雄、  
方に角を守り傍に依る。而して右府、獨全局を以て其勝を制す。之を超世の才と

織田氏の短所

謂はざる可けんや。然して數百年分裂の世を定むるは、盤根錯節を治むるが如く必鋤厥斬斷を以て功を見る。其間必大に人心を矯拂する者あり。而して之を取るに甚難き者は、之を持つこと必太急なり。將帥を待し、臣民を御するに、猜忍刻厲の病なき能はず。中道にして禍に遭ふ所以、亦勢の必至にして、深く咎むるに足らざるなり。昔、周の世宗、英明の資を以て、混一の志を抱き、衆言に牽かれず。精を勵まし進取し、半途にして没せりと雖、而も能く趙宋の業を開けり。右府の迹、蓋し之に似たり。

而して豊臣氏、右府の將校を以て、其成緒を繼ぎ、能く其志を就せり。而して王を尊ぶの義、四方を經營するの略に至りては、一として右府を師とせざる者なし。即徳川氏の興るも、亦此に因らざる能はず。以て王室、將家、並に今日の盛を見るるを致す。大業を佐成し、四方に藩屏する者は、槩、右府の置きし所に係る。則之を右府の業と謂ふも、亦何ぞ不可ならん。これを室を築くに譬ふれば、其蕪穢を治め、其高卑を鏟り、而して又之が爲に其材木を鳩め、後人をして之に繩墨斧斤を加へ、成して之に居らしむ。嗚呼、其勞寧ぞ没す可けんや。

外史氏曰。往時平安故老有及親元龜間事言。其時宮闕廢。群兒入類

垣中。博士爲戲。及織田公來始有可觀云。夫應仁以還。海內分裂。聲教之下。每爲兵馬馳逐之場。非右府誰能掃除草萊。以再造王室哉。及朝廷體其功。擬以征夷之拜。則辭不受。蓋將家與王室俱極衰頽。名重實輕。不猶所謂大將軍告身。區區一醉者耶。右府志在混同海宇。不欲遽冒虛名。爾視之。彼假關東管領。以誇隣國者。其器量固有間焉。抑朝廷名器。不足輕重天下。豪傑至於如此。挾焉以令天下。天下未必變動也。而右府爲之扶植經紀。勤勤不置。是其高義。雖謂凌齊桓而駕晉文可也。當是之時。群雄之割據方隅者。環視傍觀。而莫能出於此。其日夜所務。以代眠食者。曰戰而已矣。而所謂戰。徒較勝負於銖兩之間。拏攫搏噬。以爭尋常。如武田上杉北條毛利。概無不然。獨右府以超世之材。籠蓋而取之。其視武田上杉。猶我藩籬。使其相持不決。日費其財賦。月蔽其甲兵。適足以隔閼我東面。而我得以專力經路。畿甸已定。西面以臨毛利氏。如拉枯摧朽耳。於是我疆土益大。兵力益強。以強大之我。加費敵之敵。上杉武田固不能支我。而北條氏孤立矣。則東園皆可圖也。是其成算。夙定於胸中。奚必較區區勝敗哉。猶夫奕碁也。天下群雄。方守角依傍。而右府獨以全局制其

勝可不謂之超世之才歟。然定數百年分裂之世。如治盤根錯節。必以鋤  
 暨斬斷見功。其間必有大矯拂人心者。而取之甚難者。持之必太急。待將  
 帥御臣民。不能無猜忍刻厲之病。所以中道遭禍。亦勢之必至。不足深咎  
 也。昔周世宗以英明之資。而抱混一之志。不牽衆言。厲精進取。雖半途而  
 沒。而能開趙宋之業。右府之迹。蓋似之矣。而豐臣氏以右府將校。繼其成  
 緒。能就其志。而至於尊王之義。經營四方之略。無一不師右府者。即德川  
 氏之興。亦不能不因此。以致王室將家。並見今日之盛。佐成大業。藩屏四  
 方者。概係右府所置焉。則謂之右府之業。亦何不可。譬之築室。治其蕪穢。  
 鏹其高卑。而又爲之鳩其材木。使後人加之繩墨斧斤。成而居之。嗚呼其  
 勞寧可沒也。

### 邦文日本外史卷之十四終

### 邦文日本外史卷之十五

#### 德川氏前記

#### 豐臣氏上

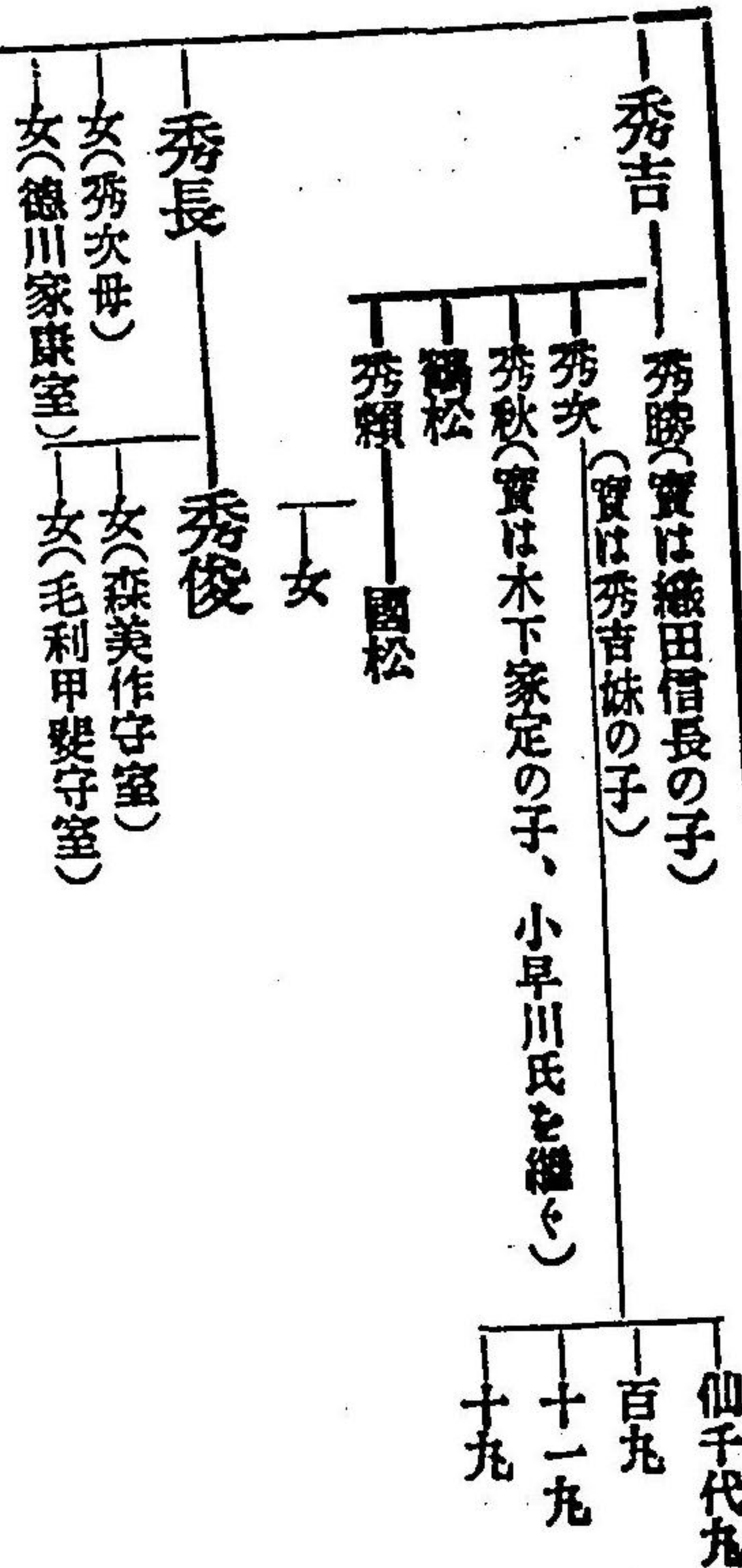
豐臣氏略系

彌助

(豐臣氏系圖)

○國吉—吉高—昌吾

筑阿彌





豐臣氏の出處

日吉丸

豐臣氏は、尾張より出づ。尾張愛知郡に中邑あり。邑に銀杏樹多し。因りて或は銀杏村と呼ぶ。享保、天文の際、村民彌助といふ者あり。彌助子なし。其妻と之を天に祈る。妻、日輪の其懐に入るを夢みる。已にして身めり。天文五年正月朔、一男子を生む。因りて名づけて日吉と曰ふ。日吉生れて英異なり。八歳の時父を失ふ。其母、日吉を挈げて、轉じて邑人に寄食す。邑人之を思ふ。同閭に筑阿彌といふ者あり。國主織田信秀の僕たり。疾を以て歸耕す。邑人爲に議し、納れて繼父と爲す。一男一女を生む。乃日吉を邑傍の光明寺に託して、僧と爲らしめんと欲す。日吉機敏にして誦梵を曉せず。人の武事を談ずるを聞く毎に、輒之を傾聽す。慨然として歎じて曰く、「僧は乞丐の徒のみ。大丈夫、亂世に生れて、安んず乞丐を學ぶことを爲さん」と。是に於て、遊嬉、意に任せ、人と諍へば、輒之を毆撃し、僧をして己を厭苦せしめんと欲す。僧、遂に遂ひて其家に歸さんと議す。日吉、繼父の己を怒るを恐るゝや、大言して曰く、「果して我を逐はば、我且寺を焚き、悉く群僧を擊殺せん」と。僧頗る懼る。乃事に托して辭謝し、尤物を與へ、禮して之を歸す。日吉、時に甫めて十歳なり。父素より貧しく、共に存する能はず。復遣りて人の奴と爲す。至る所皆數月にして去る。尾張、美濃の間に轉徙し

日吉丸僧なるを恥づ

日吉丸人の奴と爲る

與助

織田氏に仕ふ

木下藤吉

小筑

て二十歳に比ぶ。遂に遠江に如き、土豪松下之綱の家奴と爲る。之綱、其才幹を愛し、事毎に之を使ふ。名を與助と命ず。之綱、一日從容として、問ひて曰く、「汝は尾張の人なり。織田氏用の所の鎧の何様なるを知るか」と。與助對へて曰く、「天下の鎧は皆桶皮なり。尾張獨胸圓を用ゐる。膝を右肋に施して、屈伸意の如し」と。之綱曰く、「吾れ胸圓一領を得んと欲す。汝、吾が爲に往きて買ひ來れ」と。則黄金六兩を付して之を遣る。與助行自計りて曰く、「此金を擲みて以て仕進を資けん。苟も意を得ば、他日之を償ふも易きのみ。小筋拘るに足らざる也」と。乃尾張に入り、其叔父に就きて之を謀る。叔父之を可とす。因りて勸めて織田氏に仕へしむ。是の時に當りて、信秀既に没し、信長嗣ぎて立ち、四疆を攻略す。與助亦以爲らく、「信長に非ざれば、共に功名を成すに足る者なし」と。是に於て、其金を用ゐて、刀劍衣服を辨じ、自、姓名を造りて、木下藤吉と曰ふ。信長の出づるを聞ひ、道の側に跪謁して曰く、「臣の父筑阿彌は、嘗て君の先公の奴たり。願くは君、復臣を收めて奴と爲せ」と。信長熟視て、笑ひて曰く、「汝が面、猴に類たり。其心必提からん」と。乃收めて奴となす。常に鞋を穿りて以て従ふ。其筑阿彌の子なるを以て、呼びて小筑と曰ふ。藤吉、奉仕甚勤む。近臣に依託し、

藤吉清洲城壁の壊敗を要す

其使令に給す。信長嘗て晨を冒して獨出づ。從者未だ屬せず。而して藤吉輒之に從ふ。此の如きこと數にして信長寢く之を親近す。

其明年、信長居る所の清洲城、壁壞るゝこと百步可り。吏に命じ卒を發して之を補はしむるに、月を彌りて成らず。藤吉從ひて城下を過ぐ。仰ぎ視て歎じて曰く、「噫、危し」と。因りて獨語之を久しくす。信長、微に之を聞き、藤吉を呼びて、面詰して曰く、「小筑、汝、何を言はんと欲す」と。藤吉、左右を畏憚して、敢て答へず。信長伴り怒りて、其手を拉りて之を近づぐ。藤吉乃曰く、「方今、君の國は、東に今川、武田あり。西に齋藤、淺井、六角あり。日我が隙を窺ふ。然して備を弛ぶる此の如し。有司、君の爲に謀りて忠ならず」と。信長嘿然たり。既にして舍に歸り、藤吉を召して曰く、「汝をして工事を司らしめば、則汝能く速に之を竣らんか」と。藤吉曰く、「能ふ」と。信長曰く、「吾れ今日、汝に命じて工事を司らしむ」と。藤吉、拜謝し、徑に吏に詣りて、告げて曰く、「主公、僕に命じて工事を司らしむ。願くは徒屬を諭して、僕が令を聽かしめよ」と。吏、意に之を憎みて曰く、「子好く之を爲せ。吾れ復管せざる也」と。藤吉乃盡く役徒を會するに君命を以てし、之に酒食を賜ひ、乃分ちて十隊となし、一隊を以て十歩に充て、

藤吉清洲城の工事を督す

永祿二年

自之を獎勵督促す。兩日にして成る。信長適獵より歸り、見て大に驚きて曰く、「猴奴乃能く此の如し」と。因りて俸を加へ、升せて吏と爲す。是の歲永祿二年なり。

三年

三年、藤吉、又上言して曰く、「清洲城は水に乏し。小牧に徙るを便とす」と。信長已に之を欲す。而して勞費を憚り、未だ果さず。且人の水に乏しきを知るを惡む。乃叱して曰く、「猴奴何ぞ知らん。敢て妄言を進めば、罪、死に當つ」と。凡藤吉、事を言へば、輒叱斥せらる。衆之を目笑して曰く、「彼の面皮、何ぞ厚きや」と。藤吉以て意と爲さず。獨、深く信長に結ばんと欲す。信長の土前田利家、淺野長勝、藤吉と善し。淺野、中邑の人杉原某の二女を養ふ。利家、其長女を悦び之を娶らんと欲す。女肯せず。之を強ひて已まず。淺野之を患ふ。藤吉、權に利家に謂て曰く、「子、之を含めよ。吾れ已に之に通ず」と。利家笑ひて曰く、「吾れ未だ之を知らざるなり。苟も然らば、子蓋を速に婚媾せざる。吾れ子の爲に之を嫌せん」と。藤吉も亦甚辭せず。遂に柴田勝家に因りて信長に請ふ。允ざる。藤吉、家貧し。婚を成すの夕、夫妻、藁を簀に布きて坐す。瓦紅敗盞を以て相酬ゆ。妻、其常人に非ざるを知るや、之に事ふる甚謹む。後に淺野、近江の人安井

藤吉想す

長政といふ者を養ひて子となす。妻すに其少女を以てす。是に於て、淺野、加藤、福島、小出の諸人、皆外戚を以て藤吉に屬す。

太閤記（藤吉郎娶藤井又左衛門女）

信長卿の足輕頭藤井又左衛門、一女あり、名を八重と呼べり、元より家富み榮えける中に出生せし女なれば、萬の業に拙からず、加之容貌麗美、紅粉の色を借らずして、おのづからの國色此郷中に唱へ高し、爰に信長卿の小姓頭に前田犬千代といへる若者あり、此八重を戀ひ慕ひ、媒介をもて又左衛門に女を乞ふ。又左衛門大に喜び、先づ縁め約諾をなし、女八重に此事を語る、いかゞ思ひけん、此女犬千代に嫁はんことを嫌ひ、父の粗忽に約せし事を恨む、爰に於て又左衛門藤吉郎を招き、此次第を物語り、犬千代に断を告げて婚姻異變の儀を計らばしむ、藤吉郎承して犬千代が許に至り、對面して様々すかし説けども、元來犬千代強勇の壯士なれば會て以て承引せず、婚姻異變の趣意を聞きて其後に返答すべしといふ、藤吉郎計策を構へ、偽りて云く又左衛門の女八重は、某と兼て夫婦の契約あり、父又左衛門此事を知らず貴殿に婚姻を許しぬれども、とて此事成就すまじ、足下快氣を以て某が罪を免し、此婚儀異變なし給はらば、大悦少からずといふ、犬千代甚驚きけるが、是は藤吉郎が頓計にて、彼女には外に約せし男あるべし、いかにぞや藤吉如き猿面冠者に、かくまで深く騙れ合ふべきと察しければ、腹と面を和らげ、某會て足下にかゝる契約ある事を知らず、不覺にも申出し、多罪免るゝ方これなし、今より我が婚姻を相止め、足下の媒酌と成りて必此事成就ならしむべしといふ、藤吉郎犬千代が心根を知りぬ

れば、甚迷惑し、色々に理れども犬千代ますます意地強く信長卿へ申上げ、事既に決定す、藤吉郎大に困り是非なく又左衛門夫婦にこの事を告ぐ、又左衛門も陸方なく女八重に此事を語れば、此女藤吉郎が聞き面を嫌はず、悦びてこれを賭す、又左衛門夫婦大に悦び、又藤吉郎を招きて此由を物語るに、藤吉郎愈々難造し、此一件我れ一事の計策にて、かくならんとは思ひもよらず、いかにして事を延し、重ねて計儀あるべしといへど、又左衛門更に承引せず、事既に爰に至れり、いかんとも成し難し、且娘足下に嫁はんことを希ふ、殊更君の御聞に達しぬれば、いづれ異變なりがたとて、終に吉日を選び、則犬千代を媒酌として、八重と藤吉郎とを夫婦とす、犬千代ひそかに兩人が容體を伺ふに、更に隔つるけしきもなく、八重が藤吉郎を敬ふ事、臣の君に仕ふるごとし、理なるかな、藤吉郎天下掌握の時、北の政所と稱し、後に高臺院と號し奉るは此御方の事なりけり

六年

六年夏、信長、兵を河洲に闕し、處に藤吉を以て將となす。藤吉、之を部勒指麾す。兵法に老いたる者の如し。其九月、信長出で、洲股に舍す。近臣福富某、其刀箒を失ふ。藤吉を意ふ。藤吉、急に津島の市に赴き、密に金を懸けて之を購ふ。一卒あり。來りて刀箒を弼ぐ。藤吉、之を驗するに、乃刀箒を盗みし者なり。即之を就縛し、信長の歸るを候ひ、卒を携へて要謁し、俯伏垂泣す。信長故を問ふ。藤吉具に對へて曰く、「臣唯貧し。故に人に意る」と。信長、之を憐みて、爲に其

藤吉に百貫の  
色を賜ふ

(木下藤吉を  
捕へて疑を  
晴す圖)



藤吉美濃の豪  
族と相識る

密に藤吉に謀る。藤吉、對へて曰く、「孤壘、敵地に斗入す。我が兵必往くを欲せじ。即往くも、其地形の險易を暗せず。一敗せば復往く者なからん。其土人に因りて之を用ゐるに若かず。臣嘗て美濃に寓す。其豪俠、大盜と相識る、宜しく誘

懸金を償ふ。遂に賜ふに百貫の邑を以てす。信長方に儉を行ひ國を富ます。薪炭の費多きを思ふ。藤吉に命じて之を司らしむ。費を省くこと十の七、因りて之が數事を試みるに、皆効あり。然れども未だ兵を將ゐしめざるなり。藤吉、私に一旗を制し、少年を集めて自從ふ。信長、之を覘て、其妄を怒り、命じて其旗を斫る。藤吉、意色自如たり。信長、既に今川氏に克ちて、尾張を定め、西、齋藤氏を攻む。洲股河を踰えて兵を用ゐる。數志を得ず。因りて諸將を會し、壘を河西に築き、一將を以て之を守らしめんとを謀る。諸將自危み、得て當る者なし。信長、

ひて我が用を爲さしむべし」と。因りて指を屈して其姓名を擧ぐるに、蜂須賀小六、稻田大炊、梶原隼人、青山新七、以下六十餘人を得たり。其黨屬千二百人なり。信長曰く、「吾も亦此輩ありと聞く、誰か此を將ゐる者ぞ」と。曰く、「臣、願くは之に當らん」と。信長之を許す。

九年

九年九月、卒を發して壘を築く。敵將の近邑を守る者、八千人を以て出で、之を沮む。我が兵且戦ひ且築く。數日にして成る。是に於て、藤吉に授くるに甲士五百を以てし、戒めて之を遣る。藤吉、乃識る所の者を招聚す。壘兵凡三千可り。敵、誘出して之を陥れんと欲し、輕卒を以て戦を挑む。藤吉肯て出でず。即夜、其衆を聚め、議して曰く、「敵必疲れたらん。且我を以て怯と爲し、復備を設けざらん。襲ひて破るべきなり」と。乃小六等をして、數十人を以て敵城を襲はしむ。戒めて曰く、「敵をして我が壘を尾入せしむること莫れ」と。大炊曰く、「公、憂ふる勿れ。門を開き、二三人を容るべくして以て之を待て。臣請ふ、これに殿せんと。藤吉曰く、「前言は主公の意を以てするのみ。危道を行はずば、以て大功をなすなし。自固くして士を弃つるは、吾が爲さざる所なり。公等、之を勉めよ」と。衆踊躍して出づ。頃して邑中火起り、大に燄し。藤吉、又兵を遣して之を援く。

藤吉に三千貫の邑を賜ひ秀吉と改めしむ  
信長大澤を殺さんとする

竹中重治

十一年

十二年

秀吉義昭將軍に關す

衆、大に獲て至る。乃首虜を信長に効す。信長、藤吉に一旗を賜ひ、豊傍に就きて三千貫を賜ふ。名を命じて秀吉と曰ふ。美濃の豪傑大澤某、宇留間城に據る。信長の患ふる所たり。秀吉、計を以て之を降し、携へて信長に謁す。信長大に喜び、其夜、密に秀吉を召して曰く、「大澤叛服必ず可らず。速に之を殺すに若かず」と。對へて曰く、「叛かば則之を誅せんのみ。今にして之を殺さば、復來る者なけん」と。聽かず。秀吉、舎に歸り、刀を佩ひずして、大澤を召して曰く、「吾れ子の身に於て、安せざる所あり。子第速に亡げよ。吾れ子の爲に留りて賢と爲らん」と。大澤、即亡げ去る。諸豪傑、之を聞きて、多く秀吉に屬せんと願ふ。竹中重治といふ者、奇計を好む。齋藤氏に従ひて遇せられず。亦來りて屬す。十一年、信長に従ひて六角義賢を撃ち、先鋒たり。諸將と箕作城を攻めて之を拔く。信長、將軍足利義昭を京師に擁立す。三好氏の兵屢之を犯す。十二年、義昭、信長に謂て曰く、「吾が爲に一將の智勇兼備なる者を置きて、以て京師を鎮せよ」と。信長曰く、「諾」と。將に擇びて以て進めんとす。衆、意に柴田勝家、丹羽長秀、佐久間信盛の三人を擬す。命發するに至れば、則、木下藤吉なり。衆、大に驚く。秀吉既に命を拜し、即日、足利氏に詣りて、義昭に面謁す。

大内を修む

元龜元年  
朝倉義景を撃つ

姉川

二年

京師の事を裁決するに、立どころに辨せざるなし。三好氏も敢て犯さず。衆、之を妬み、其自用太過ぐるを謂る。信長斥けて納れず。尋いで大内を修む。秀吉及び村井貞勝を以て、工を監せしむ。八月、從へて伊勢を撃ち、淺香城を攻めて、先登す。元龜元年四月、從ひて朝倉義景を越前に撃ち、先鋒となりて、手筒城を抜く。會淺井長政、兵を發して後を斷つ。信長、軍を班さんと欲すれど、義景の尾撃せんことを恐る。曰く、「誰か留りて義景を拒ぐ者ぞ」と。衆、敢て答へず。秀吉進みて曰く、「願くは臣に命せよ」と。乃三千人を以て留りて義景に當る。義景背て出でず。遂に兵を引き西す。參河の國主徳川公、客將を以て信長の軍に殿たり。秀吉、之と兵を合せて、行土寇を撃ちて、京師に達る。功を以て愛智川の三萬石を食む。木村、生駒、前野の諸人、之に屬す。六月、從ひて淺井、朝倉の二氏を姉川に撃つ。因りて横山を守る。九月、淺井長政、朝倉義景、兵を合せて信長を大津に圍む。秀吉赴き援け、圍解けて歸る。二年五月、淺井長政、兵を發して鎌羽城を攻む。城、横山を距ること頗遠し。秀吉、輕兵を以て馳せて山の背を透り、旗を城の後に立つ。敵、驚きて潰走す。八月

月、従ひて淺井氏の山本城を攻む。

三年七月、又之を攻む。朝倉義景來り救ふ。逆へ撃ちて之を破る。

天正元年、信長の命を以て、將軍義昭を廢し、之を若江に徙す。淀城、義昭の爲

に守りて下らず。往きて説きて之を降す。八月、朝倉氏滅ぶ。秀吉、攻めて小谷

を抜き、淺井長政の父子を獲たり。秀吉、二氏を拒ぐ年あり。信長をして、北顧

の憂無く、以て畿内を經營するを得しむ。功を以て淺井氏の故地十八萬石を食む

明年、長濱に城きて之に居る。

三年五月、信長、徳川氏を援け、武田勝頼と長篠に戦ふ。秀吉、左先鋒と爲りて

功あり。八月、朝倉の餘黨、大に越前に起る。信長これを攻めて、敦賀に至る。

秀吉、命を受けて舟師を以て、遶りて敵の後に由で、岸に上り舟を毀ち、河野を

襲ひてこれを取り、遂に龍門を抜く。諸城皆潰ゆ。是の歳、筑前守に叙せられ、

氏を羽柴と更む。秀吉、桐を以て號となし、金銀を以て馬表と爲す。一捷ごとに

一瓠を加ふ。曰く、「吾れ必積みて千に至らん」と。因りて千瓠と稱す。織田氏の

軍を出すや、桐號瓠表、敵望みて之を避く。前後封を加へらる、總て二十二萬

石。秀吉、私に其謀臣と譏して曰く、「主公は、外優裕にして、内猜吝なり。吾れ

三年  
天正元年  
義昭を若江に  
徙す

秀吉、淺井の  
故地十八萬石  
を食む  
長濱城を築く

三年  
長篠

羽柴筑前守と  
なる

千瓠

廿二萬石

【大坂】秀勝

大封を受くれども、必終を保つこと能はじ」と。因りて從容として信長に白して

曰く、「臣、敢て請ふ、次郎を養ひて子と爲し、之に讓るに臣の祿を以てせん」と。

信長、喜ぶ。因りて問ひて曰く、「汝の祿は如何」と。曰く、「君、臣に西征を命ぜ

ば、西國の二三州は、日を指して取るべし。取らば輒君に獻せん。臣、其餘を

請はんのみ」と。信長、乃其少子秀勝を以て、秀吉の義子と爲す。是の時に當り

て、毛利輝元、山陽、山陰十餘州に割據し、浮田直家、備前、美作を以て之に附

く。播磨の人赤松義祐、別所長治、小寺政職等、其兵を被んことを恐れて、歎を

織田氏に送る。政職の使者黒田孝高、器略あり。秀吉に因りて毛利氏の撃つべき

狀を説きて曰く、「臣請ふ、之が嚮導をなさん」と。秀吉、具に之を信長に語る。

信長、終に意を決して西征す。

五年、秀吉を以て西征大將となす。播磨を取りて以て自封せしむ。十月、秀吉、

入りて辭す。信長、授くるに記職を以てし、曰く、「功成らば、則中國を擧げて汝

に與へん。汝、遂に進みて九州を取れ。其援師の若きは、當に請に依りて之を遣

すべし」と。秀吉、拜して對へて曰く、「君、臣の鄙陋を捨てず。勳舊の諸將を

舍きて、大任を臣に命ず。臣、敢て力を竭さざらんや。臣、記職の 眼を辱くす

黒田孝高

西征に決す

五年

秀吉志願

是れ君、臣をして專制を得しむるなり。叛くを討ち、服するを撫で、機に臨み變を制して、以て中國を定めんこと、臣の度内に在り。君の近臣森、矢部、福富の諸人、功を積み勞を累ぬれども、未だ報いる所あらず。中國既に定まらば、願くは以て此輩を封せよ。臣は則直に進み、勢に乗じて遂に九州を下さん。九州下らば、則願くは其一歳の入を賜へ。糧仗を蓄へ、舟艦を造り、海を濟りて朝鮮に入らん。君、臣の功を賞せんと欲せば、願くは朝鮮を以て請と爲さん。乃、朝鮮の兵を用ゐて、以て明に入らん。庶幾くは君の威靈に倚りて、明國に席卷し、三國を合せて一と爲さん。是れ臣の宿志なり」と。信長笑ひて曰く、「秀吉又復大言ならんか」と。遂に便宜、事に従ふを許す。

是に於て、秀吉、兵數千を將ゐて、播磨に入り、御著に至る。政職、中悔いて、走りて毛利氏に歸す。黒田孝高、其父宗圓と姫路に居り、迎へて秀吉に説きて曰く、「臣の居る所は形勝の地なり。君宜しく據りて根本と爲し、西面して以て毛利氏を圍るべし」と。秀吉之に従ふ。孝高に予あるに安栗郡を以てす。

十一月、秀吉、兵を將ゐ佐用を攻めて、之を抜き、進みて上月を取る。浮田直家岡山に在り。兵を發して來り援く。孝高逆へ戦ふ。秀吉赴き援け、隊將堀尾吉晴

上月城を取る

六年 姫路城

別所長治 三木城

吉川 小早川 高倉山

をして、進撃せしむ。我兵少しく卻く。秀吉、後より呼びて曰く、「今日始めて中國の兒と戦ふ。濃尾の差を貽す勿れ」と。我兵奮ひ前み、撃ちて直家の兵を走らせ、遂に上月を抜きて還る。已にして直家、襲ひて之を復す。

六年六月、秀吉、大に姫路に城く。故の出雲の國主尼子勝久、兵を以て來り、屬し、上月を取る。糧乏きを以て退き還る。城、復直家の有と爲る。二月、秀吉赴き攻めて、盡く其兵を焚き殺し、城を以て勝久に予ふ。

三月、別所長治、叛きて毛利氏に附く。族黨八千を聚めて、三木城に據る。城甚險なり。而して野口、志方、神吉、櫛橋等の諸寨、皆之に應ず。秀吉地圖を按へ識して曰く、「彼れ我が三木を攻むるを俟ちて、其後を襲はん」と欲するなり。吾れ當に其計に反して、以て勝を制すべし」と。乃、野口を攻めてこれを下す。

四月、毛利氏の族將吉川元春、小早川隆景、直家と兵七萬を合せて上月を攻む。秀吉、兵を留めて三木に備へ、而して自赴きて之を援け、高倉山に陣す。信長、攝津守荒木村重等をして來り助けしむ。

五月、更に其三子信忠、信雄、信孝を遣し、來り援けしむ。相持して戦はず。秀吉以爲らく、敵は兵多く食足る。未だ勝つべからず。若勝つとも吾が功に非ざる

【書寫山】掃磨  
三木を攻む

荒木村重

なりと。乃、信長に請ひて師を班し、書寫山に陣し、攻めて神吉、志方を抜く。八月、秀吉、二萬人を將ゐて三木を攻む。直家、秀吉の終に抗す可らざるを知りて、歎を送らんと欲し、會塚港の藥商の子小西彌九郎といふ者、岡山の買人に養はる。其生父は京師に老す。秀吉、微かりし時數、其家に館し、彌九郎と親み善し。直家、因りて用ゐて使者に充てて、三木に赴かしむ。秀吉、爲に信長に請ひて之を許す。伯耆の國主南條元續も亦、國を以て降る。而して荒木村重は、明智光秀の爲に讒せられ、罪を得て、叛きて毛利氏に應ず。十一月、信長、自、將として村重を討つ。秀吉、往きて信長に見えて曰く、「臣、村重は叛く者に非ざるを識る。是れ必故あらん。臣請ふ、説きて之を降さん」と。乃、輕装して伊丹に赴き、村重に面諭す。村重謝して曰く、「織田公、豈終に我に釋然たらんや」と。秀吉泣きて、別れて出づ。伊丹の人、之を殺さんと請ふ。村重曰く、「彼れ肯て身を輕じて此に來る。之を殺すは不義なり」と。秀吉、更に黒田孝高を遣して、之を説かしむ。村重之を囚ふ。孝高屈せず。秀吉、乃、三木に歸り、戰を休め、長圍を築きて、之を困しましむ。長治、村重と通じ、間道より私に出で、淡河、丹生に城きて互に應援を爲す。

七年

八年

七年正月、長治出で、秀吉を襲ふ。秀吉、異父弟秀長を逆へ撃ちて、大に之を破り、其銳兵八百を斬る。二月、秀吉、風雨の夜を以て、襲ひて丹生を取り、秀長をして五百騎を以て淡河を攻めしむ。利あらず。守將も亦收めて三木に入る。乃、加藤光泰に命じ、寨を築きて其糧道を絶たしむ。九月、村重、伊丹を棄て、走りて華隈を保つ。孝高、乃歸るを得たり。是より先、竹中重治死す。孝高、獨、謀主たり。村重、長治と、皆急を毛利氏に告ぐ。毛利氏、援ふ能はず。獨、糧食を送る。襲ひて平田の寨を破る。長治、兵を引き、出で、兵糧を取る。秀吉麾下を以て、大村に邀へ撃つ。近士脇阪安治、敵の驍將魚住源吾を斬る。秀吉、因りて大に之を破り、別所氏の族十人を獲たり。壘を徙し、城に逼る。八年春、遂に之を陥る。長治をして自殺せしめ、以て城兵を免れしむ。

別所記 (三木城兵糧攻)

去程に秀吉所々の戦に打勝ち、國中の城々も過半攻落し、中國の緩も大村戦に手懸し、三木城も糧盡て見えければ、今は斯うと彌々附城に打寄り、南は八幡山、西は平田、北は長屋、東は大塚迄詰寄らる。敵城と近き所は僅に五六町に不過、向城に井欄を高く上げ、前には柵逆茂木を張り、大筏を焼き、鐵り返りて、偏に兵糧詰とぞ見えし、宮の上の要害を乗取り、則宮の上より城内を見下し、兵力既に盡きたりとて、同十一日南の構に、人數を付て山下を放し、長治



【兒島】備前

の弟彦之進友之の持口鷹尾山城守が構の新城へ遁り給ふに、城兵飢乏勞れて甲斐々々敷働不叶、遙切出る者も忽愛彼處に切伏らる。中に名を惜む者と見えて、若武者三十八人大手の木戸を開き、各一面に立並て、一度に腹をぞ切たりける仍て易々と大手より乗入り、首實檢ありて、詰の城へ打寄らる、是に於て、盡く播磨を定む。乃、浮田直家をして、備前、美作の兵を以て、西、毛利氏を圍らしめ、兒島に城く。小早川隆景、數之を攻む。乃、淺野長政を遣し、舟師を率ゐて赴き援け、撃ちて之を走らす。時に山名氏は、但馬、因幡に據りて、毛利氏に屬す。是に於て、秀吉、自、將として、山名祐豐を但馬に撃ち、竹田城を攻む。四月、山名豊邦を因幡に撃つ。因幡の質子、鹿野城に在り。秀吉攻めて之を取る。七月、再但馬に入りて、諸城を抜く。山名祐豐、出石城を以て降る。遂に但馬を定む。再因幡に入りて、鳥取城に至り、取る所の質子を城外に縛し、諭して之を降す。豊邦、乃、出で、降る。而して城兵未だ下らず。兵を引きて還る。

但馬因幡を取

九年

九年春、海買をして金數千兩を齎して、因幡に赴きて、粟を索め價を倍して之を糶せしむ。因幡の人大に喜び、争ひて糶す。七月、秀吉、乃、兵五萬を以て鳥取を攻む。秀長をして、丸山を攻めしむ。二城

伯耆に入る  
【五國】丹波、但馬、因幡、美作、備前

十年

淡路に入る

食乏し。我が牙兵加藤清正等、日夜攻撃す。清正是、杉原氏の戚屬なり。襦袢のとき母を喪ふ。秀吉の妻、取りて之を育つ。是の役に甫めて十八なり。城兵と戦ひて、多く首級を獲たり。十月、吉川元春、兵を發して來り救ふ。未だ至らずして、城陷る。秀吉、進みて伯耆に入り、南條元續を助け、鷓山に軍して元春と相持す。天、已に寒し。因幡を定め、降將宮部繼潤をして之を守らしめて還る。秀吉、五歳以て、五國を定む。十二月、安土に赴きて、即夜、信長に賜す。信長、呼びて之を前め、其面を撫でて曰く、「汝が面目、復昔日の藤吉に非ず。明日、我も且に客の禮を以て、汝を饗せん」と。且日、秀吉、寶刀一、鞍馬百、土物五十を獻す。布旅して地を蔽ふ。信長、城樓より之を視て、欣然として左右に謂て曰く、「此れ大膽藤吉の獻する所の者か」と。饗して之を遣る。十年正月、直家、病みて卒す。秀吉、爲に請ひて、其子秀家を立つ。宮部繼潤、人をして來りて、吉川元春の鳥取を攻めんと欲するを告げしむ。秀吉曰く、「彼れ之を北より攻む。吾れ將に之を南より救はんとす」と。乃、兵を引きて、淡路に入る。二十日にして之を定む。

備中に入る

四月、六萬人を率ゐて、備中に入り、宮地を攻めて之を下す。遂に冠山を攻む。加藤清正、先登す。浮田氏の兵、之に繼ぐ。冠山の兵、盡く高松城に走る。秀吉、隨ひて城を圍む。城傍、平田にして池沼多し。而して甲部河その西に在り。秀吉、山に登りて熟視して曰く、「是れ灌ぐ可きなり」と。

五月、自、營を畦鼻岡に移して、巨防を城南に築き、河水を引きて之を灌ぐ。淺野某をして、舟を以て大砲を載せ、城樓を撃碎せしむ。是に於て、吉川元春、乃、因幡を捨て、來り救ひ、小早川隆景と兵を合せて、廂山に陣す。輝元、其後に在り。秀吉、二萬人を分ちて之に當る。益、防を築きて峻ならしむ。城兵、櫓を結びて坐す。元春、隆景、數、戰を挑む。秀吉、壘を固くして出でず。因りて謀りて曰く、「吾々數國を連取す。今又毛利氏を擧ぐれば、則功大にして身危し。主公を此に請ひて、之が先鋒を爲す能若かず」と。乃、使を馳せて信長に白して曰く、「城の陷るは旦夕に在り。而して毛利、大擧して來り援く。請ふ、大旗を出せ。軍を分ちて二と爲し、一は以て城に當り、一は以て援師を撃たば、一歳を出でずして、中國を擧ぐべし」と。信長、大に喜び、堀秀政をして、先往かしむ。乃、明智光秀、筒井順慶、池田信輝、中川清秀、高山友祥等に命じて、兵三萬五千を

信長中國を征せんとして

高松城水に浸さる

率ゐ、秀吉を援けしむ。而して自、百餘人を以て京師に入り、本能寺に館し、將に自之に繼がんとす。初め光秀、事を以て怨望す。是に至りて、又往くを欲せず。信長、迫りて之を遣り、丹波に歸り、兵を治めて西せしむ。是の時に當りて、高松城の水に漸さる、こと數尺、東西の軍、相距ること百步可り。毛利氏、東軍の大擧して且に至ると聞き、遂に使をして和を議せしむ。秀吉、未だ之を許さず。

六月、人あり、京師の使者なりと稱し、馳せて軍門に入る。秀吉、之を覽る。知る所の宗仁といふ者の變を報するなり。曰く、「光秀反して、丹波の兵を以て、右府を本能寺に攻めて、之を殺せり」と。右府は信長なり。秀吉、大に驚く。而れども未だ宣言せず。明日、數十騎を率ゐて堤防を巡視す。是の日、城陷り、城將自殺す。而れども毛利氏、猶軍を張りて去らず。明日、使者を遣し、來りて前議を治めしむ。秀吉、之を卻けて曰く、「當に明日を蹶ちて之を議すべし」と。明日、使者復至る。秀吉、自度るに、事終に泄れん。我より之を發するに若かずと。乃、真に使者に告ぐるに變故を以てし、返り報せしめて曰く、「事已に此に至る。公等、猶我と和するか。若我を撃たんと欲せば、則今日に若くはなし。公等徐に之を計

本能寺の變

【城將】清水宗治  
秀吉毛利氏と和す

隆景の語

れ」と。使者返り報ず。輝元、大に喜びて諸將に謀る。諸將皆曰く、「我れ信長と和す。秀吉と和するに非ず。今、信長死す。彼れ軍情沮廢し、危疑を萌起せん。我れ此の時に乘じて、之を掩撃せば、必秀吉を獲ん。是れ天の我が家に幸するなり。失ふ可らず」と。隆景曰く、「吾の見る所は此と異なり。信長の死は、天の我が家に幸するに非ず。乃、秀吉に幸するなり。何となれば、則應仁以來、七道分離し、争亂相踵ぐ。今日に至りて極れり。天、將に一豪傑を生じ、以て天下を掃蕩せん」と。吾れ秀吉の舉動を視るに、是に非ざるを得んか。信長既に死す。其子弟將佐、孰か秀吉の右に出づる者ぞ。夫れ和議、外に發して、變故、内に起る。常人をして之に處せしめば、必其事を秘して、速に前議を成さん。今、正に告げて隠さず。吾が從違に任す。其量豈測る可けんや。吾れ人をして其陣を候視せしむるに、平日に異ならず。今之と戦ふは、我は曲、彼は直、我を仇とする必深く、敢死して來り戦はん。能く必之を獲ることを保せんや。苟も之を獲ずして、其を脱歸せしめ、異日、雲蒸龍變せば、我れ遺類なからん。吾を以て之を計るに、前約に従ふに如くは莫し。彼れ禍難に遭際し、我れ約に違はざること多し。功名富貴、將に我と共にせんとす。是れ我れ彼と慶幸を同くするなり」と。輝元之を然り

秀吉光秀を撃んとす

尼崎に至り哀を奉る

とし、乃、質を送りて和を成し、且之を弔ふ。是に於て、秀吉還りて光秀を討たんと欲す。因りて毛利氏に乞ひて、弓銃各々五百、旗三十、騎士一隊を假る。輝元、其言の如くす。秀吉、諸將士を會し、垂泣して之に言て曰く、「吾れ右府の恩を受くること、物の比すべきなし。汝が輩の知る所なり。今日、死を致し仇を復すは、吾に非ずして誰ぞや。天下の事此一舉に在り。汝が輩、其れ我が爲に之を勉めよ」と。乃、兵を引きて途に上り、程を兼ねて疾く行きて、尼崎に至る。是の時に當りて、光秀、既に信長及信忠を弑し、遂に進みて安土を陥れ、其寶貨を收めて西し、京師に屯して、政令を施行す。復、兵を引きて安土に適く。織田氏の公族將帥皆觀望して相伏し、敢て先發するものなし。秀吉、既に尼崎に至り、哀を發し、髪を斷ち形を毀り、人をして周く諸將に告げしめて曰く、「明智光秀、洪恩を蕪棄し、敢て大逆を行ふ。天地の容れざる所、人神の共に憤る所なり。秀吉の義、光秀と共に天を戴かず。悉く領國の兵を發し、自、將として此に至る。願くは諸公と俱に一戦し、必賢子を梟し、以て先君の靈を弔せん」と。是に於て、諸將帥、盡く尼崎に會す。初め光秀の難を發するや、其衆と謀りて曰く、「方今、柴田勝家は上杉氏

光秀光春をして安土を守らしむ  
〔河内〕河内光秀淀城に入  
秀吉使を光秀に送て山崎に會戦せんとす

山崎

天王山

に當り、瀧川一益は北條氏に當り、羽柴秀吉は毛利氏に當る。而して丹羽長秀、信孝を佐け、將に四國に赴かんとす。我れ空虛の地に出でば、以て大事を成すを得ん。天下圖るに足らざるなり」と。是に至りて秀吉、攝津に在りと聞きて、大に驚き、其從子光春をして安土を守らしめ、自、洞嶺に至り、十二日、遂に淀城に入る。秀吉使を遣し、光秀に告げて曰く、「明日、山崎に會戦せん」と。光秀之を諾し、乃、將士を聚む。其將齋藤利三、洞嶺に在り。諫めて曰く、「秀吉の大衆新に來る。其鋒甚銳なり。戰、必利なからん。且に之を避け、退きて阪下に入りて、以て後圖を爲すに如かず」と。光秀怒りて曰く、「天下、右府を見ること鬼神の如くす。而れども吾れ一撃して之を獲たり。天下、誰か能く我に敵せん。汝、速に來り戰へ。何ぞ藤吉を畏れんや」と。利三、已むことを得ずして、來り會す。遂に見兵一萬六千を以て、分ちて六隊と爲し、夜半、雨を冒して、桂川を渡りて山崎に至る。筒井順慶、大和の兵萬人を擧げて、洞嶺に軍して、其後援を爲す。黎明、秀吉、諸將を統べて至る。高山友祥、先鋒たり、中川清秀、池田信輝、丹羽長秀、織田信孝、次を以て相屬す。兵各數千。秀吉、自、騎卒二萬を將わて、其後に居る。已にして兩軍皆陣す。秀吉、北、天王山を瞻み、指して左右に開て



〔山崎合戦之圖〕

曰く、「今日の戰、敵をして先此を獲しめば、吾が利に非ざるなり」と。言未だ畢らざるに、賊の旗幟登る。乃、堀尾吉晴に命じて、往きて之を奪はしむ。吉晴、聲に應じて起ち、單騎馳せて之に赴けば、則賊兵先上る者、已に千餘人なり。吉晴、其兵を顧るに、能く屬する者十五六騎、弓銃手二十人なり。進みて其後を躡む。賊の弓銃、前に在り。用ゐる可からず。吉晴の全兵、堀秀政と、皆至り、大に呼びて奮撃す。賊兵、遂に山を棄て、走る。吉晴代りて之に陣す。友祥、先鋒となり、山崎の南門を關して、他隊の先進するを聽さず。天王山の軍聲起るを聞き、乃、門を開きて進み、賊の左陣と大

〔勝龍城〕山城  
長岡に在り

光秀土人に刺  
殺さる

に戦ふ。殺傷相當る。清秀、阪を踰えて進む。賊の左陣進む能はず。信輝も亦、川を濟りて、其右陣を衝き、合撃して大に之を破り、其三將を斬る。洞嶺の軍、勝敗を觀望して、戦はずして走る。秀吉、北ぐるを追ひ、直に光秀に逼る。光秀怒りて親戦はんと欲す。比田某、其馬を叩きて曰く、「敵鋒犯す可からず。請ふ、且勝龍城に入らん」と。光秀、惶惑して曰く、「勝龍安にか在る」と。比田、騎して前導す。我が兵前後に充塞す。比田等戦ひ且走り、纔に城に達するを得たり。関に上りて望めば、則我が兵已に城を圍むこと數重なり。城兵、稍散亡して、餘る所僅に百人。即夜、光秀、十餘騎と圍を潰して北に出で、馳せて阪下に向ひ、小栗樓に至る。土兵四に起り、林中より槍を以て、其肋を刺す。馬より墜ちて死す。秀吉、既に光秀の軍を破り、信長の尸を灰燼中に收めて之を殞し、進みて圍城寺に陣す。光秀の子光慶、龜山に在りと聞き、兵を遣して之を攻め、光慶を斬る。又從子の光春、安土に在りと聞き堀秀政をして、萬人に將として之を伐たしむ。光春に大津に會す。撃ちて之を破る。光春、騎して湖水を渡り、阪下に入り、手づから光秀の妻孥を刃し、城を火きて自殺す。

豊臣(高松)

(上略) 信長明智が爲に自害し給ひぬと、秀吉の陣に聞えけり、此先毛利家より平を請ひ侍りぬれども、秀吉用おざりしが急ぎ都に登り、明智光秀と戦はんと思ひ給へりければ、毛利家の謀小寺官兵衛をよび、かうく、京より人來りぬ、兼ていひし如く、毛利家と平をなすべし、立越しかくと計ふべしと宜へば、小寺急ぎ毛利家の陣所に行きてかうくと云ひ語り侍りぬ、信長自害を未だ毛利家に知らずやあらん、やがて同心なれば誓紙のちかひを固くしことなりぬれば、六月六日秀吉播磨に歸り給ふ、雨ふり川水出しを、漸々にしてしものぎ、その夜姫路に着き給ふ、軍兵遅れ明る日に着くもあり着ぬもあり、九日姫路を立ち都にのぼり、明智光秀と戦を急ぎ給ふ、同十二日攝津國天神岡場につき給ひぬ、光秀は秀吉備中の軍を平にしてのぼりぬと聞きて、青龍寺の城に移り、其勢を山崎の東に軍立す、同十三日未明に天神の馬場を立ち山崎に向ふ、中川瀨兵衛、高山右近、秀吉に心ざしありければ、山崎の宿のはづれ寶寺を東に軍立して、明智が陣に向ふ、秀吉の先陣多く加はりけり、いまだ戦はざるに秀吉のずさ加藤遠江旗を進めて、山崎の宿の南川のはたを直に、久我阪を上りに練へまはちんと進み行けば、明智が勢うしろをつまればと色めきみえしに、中川高山兵を進めて掛りければ、明智先勢戦はんとすれどかなはず、御牧三右衛門尉などその場に討れぬれば、我れさきにと落ち行きけり、或は丹波路久我稲手思ひく、に落つるものを、追掛り、討取ること數もしうざりけり、明智光秀軍破れぬるを見て、青龍寺の城へ走りいりぬ、これまで圍むこと隙なかりしが、いかゞはしたりけん親しきずさ五六人具して城を紛れ出で、阪本の館へぞ落行

さける、常に人通ふ道はちのづからとがむることやと、道をかへて伏見の北の方、大龜谷に掛り山中にて物具をばぬぎ捨て、勤修寺を過ぎ小栗栖を過りしに、野伏兵の聲して、夜更馬の音するは如何様に、落人にこそあらめ、いざ物具とらんといふもあり、よしなしといふもありけり、水無月十三日月はたけ登りぬれど、いたう曇りてくちがかりけり、里の中道の細きを出て行くに、垣さしにつぎける鐘、明智光秀が脇にきたりぬ、されどさらぬ體にて掛け通りて三町計ゆき、里のはづれたて馬よりころび落ちけり、隨ひし者立寄り、さはいかにといふに、里の中に野伏の聲にてつき出せし鐘あたりぬ、其にていはば野伏も指したひ來べきと思ひ、さらぬ様にて是まで過ぎぬ、今は行くべきやうにもあらす、首を切りて顔を深くかくすべしとて絶え入りけり、さわぎけれども陸方なし、いひしに任せ首を切りて乗りたる馬の鞍置に包み、道より一町ばかり傍なる藪のしげれる澤にかくし、死がいの見知るべきにあらねばとて、道の少しわきに取れかくして、隨ひしものは其より思ひく、に落ちゆきけり、青龍寺には、明智城を出でぬれば兵どもこぼれ落ちけり、取巻勢にあひてうたる、もあり、生捕らるゝも多かりけり、生捕どもに問ふに、明智はまだ暮れはてぬ程に城を出でたり、それをしうでかくなんともみな同口に云ひければ、さてこそ明智青龍寺を落ちけりとはしれり、阪本にこそゆかめと軍兵江西へといそぎぬ、明智彌平次は安土の城にありしが、秀吉西國より登り山城久我堰にて軍に向ふと聞きて、此城守らんことよしなし、光秀と一所にこそは死なめとて、十三日安土を立ちて山崎へと落ちしに、堀久太郎主軍過ぎてより、安土へと進み行くに、大津打出の旗にて彌平次が勢に行き向ふ、互に鋒を交へて戦ふ、彌平次が

兵多く討たれけり、されど彌平次八十餘騎計を引具して、潮水の汀を掛抜けて阪本の城に入ぬ、十四日秀吉三井寺に至り給ひぬ、明智が落人の首切りて方々より持ちきたる中に、小栗栖の里人明智光秀が首を持ち來れり、如何にしてかくぞと問ひ給へば、今朝里人の外に出で落人ありやと、方々見廻りしに、藪くろにして首を見つけぬ、物につかみし様いかさま常の人にはあらじと思ひ、彼此見し程に、中に見知りたるものありて、是なんといへば、いそぎもち來ぬと答へぬ、秀吉悦び信長を討ちし報はや來にけりと、杖を持ちて首をうち給ひけり、彌平次は阪本の城に入りぬれども、隨へる者はみなおのぶさまぐに落ち行きて城を守るべきやうにもあらず、光秀が子自然といふを具して天主に昇りぬ、敵四方より近付きぬれば、自然を刺殺し、天主に火をかけ焼きあげて、腹切りて失せけり、齋藤内藏助は明智が二なき者なり、軍場をのがれ江西堅田の井貝といへるものを頼み、身を隠さんとせしを、井貝頼めて秀吉へ参らせけり、光秀がむくろを求め首を横ぎて、粟田口に張付にせられ内藏助も其かたはらにしかなり、京わらんへ落書をなせり、明智氏を推任に改む、明智とかける事は人みなしれぬれば、あくをしらせんとにや、

主の首切るより早き討死はこれたうはつのもたる成けり  
 野にまけす六の齋藤は七日く、られ駒をこそかけ  
 例の人のくせなるべし、(下略)

齋藤利三も亦、捕はれて誅に伏す。而して光秀の首至る。秀吉、乃、提を朝廷に

清洲會議

秀信

鬼柴田

奏し、光秀の首を京師に徇へて本能寺に梟す。信長の墓する日を去る、十有三日なり。遂に留りて山崎の寶寺に幕し、支黨を誅し、降附を納る。是の時に當りて秀吉の威、畿内に震ふ。四方の兵士、山崎に來り聚る者、凡六七萬人。天子、其功を嘉し、詔して、從四位下に叙し、右近衛中將に任せらる。秀吉、辭して敢て拜せず。秀吉、信長の繼嗣、未だ定らざるを以て、諸將領と清洲に會して、事を議す。八月、瀧川一益、柴田勝家、皆兵を引きて之に會す。議す、「信雄は北畠氏を冒し、信孝は神戸氏を冒す。皆信長の庶子なり。宜しく立つべからず」と。乃、信忠の遺命を以て、其長子秀信を立て、嗣と爲も、安土に居らしむ。而して信雄之を攝す。柴田、丹羽、池田氏、羽柴氏と更吏を京師に置く。信雄以下、各々遺地を分ちて之を領す。秀吉、自、播磨、但馬、因幡、丹波の諸州を略定す。是に至りて、皆其有と爲る。則復分地を受けず。諸將、乃、浮田秀家、及丹波の國主細川藤孝をして、之に附庸せしむ。長濱は秀吉の舊領たり。勝家、其南出の便地なるを以て、之を奪ふ。勝家の威望、諸將に最たり。號して鬼柴田と曰ふ。是の日踞りて酒を飲み、謾言を以て、秀吉に挑む。長秀、秀吉の耳に附けて、語りて曰く、「子、國家を定めんと欺せば、即勝家を斬れ」と。秀吉晒ひて答へず。諸

信長を大徳寺に葬る

〔三氏〕柴田、丹羽、池田

勝家秀吉を圖る

將、耳目の是に非ざるを視て、促して其宴を罷む。信雄は近江に歸り、信孝は美濃に歸り、勝家は越前に歸り、一益は伊勢に歸り、長秀は若狹に歸り、秀吉は、池田信輝と攝津に歸る。勝家、秀吉、長濱に在りと聞き、敢て北せず。秀吉、乃、義子秀勝を遣して、質となす。勝家拉して北に行き、尋いで還す。初め秀吉、長濱より姫路に徙り、未だ其家に移さず。本能寺の變に阿閉長之、京極高次、長濱を取りて、光秀に應せんと欲す。家皆に亡げて、伊吹山に匿る。長之、其貨財を取りて、光秀に従ふ。山崎に戦ひ、敗走して死す。是に於て、秀吉之を族し、高次を降し、而して山崎に歸る。十一月、詔して從五位下に叙し、左近衛少將に任せらる。秀吉命を拜す。因りて信長の爵位を追贈せんことを請ふ。公族諸將に告げて、大徳寺に葬る。來り會する者なし。秀吉、自、喪主となり、弟秀長をして、卒萬人を帥わて之を監護せしむ。既にして三氏、皆其吏を罷め、一に秀吉に決す。秀吉、又信雄と心を協せしむ。以て秀信を佐く。勝家、之を嫉み思む。信孝も亦、信雄と權を争ひて、相惡し、是に於て、信孝、遂に勝家、一益、及佐々成政、氏家行廣、稻葉通朝等と共に、秀吉及信雄を圖り、期を約して並び起らんとす。信雄、之を秀吉に謀る。秀吉日

秀吉岐阜を攻む

く、「越前は雪多し。彼れ今未だ兵を出す能はじ。請ふ、此時に及びて美濃を伐た  
 ん」と。乃、池田、丹羽、筒井、細川の諸將と、五萬人を合せて、岐阜を攻む。  
 行廣、通朝、皆降る。信孝、伴りて和を乞ふ。丹羽長秀、之を賛す。和成る。秀  
 吉、乃其質子を取りて、山崎に歸る。勝家、出で、之を援けんと欲すれども、雪  
 に阻てられて出づる能はず。氷雪を視て輒憤怒す。乃、人を遣して長秀に説き、  
 兵を連ねて西向せんとす。長秀肯せず。一益、書を以て勝家に教へて曰く、「伴り  
 て和し、來歲、雪解くるに及びて、其不意に出で、之を夾み攻むるに若かず」  
 と。前田利家等の五輩をして、山崎に來り、憾を釋き心を協せて、俱に幼主を輔  
 けんと請はしむ。秀吉、之を許す。使者返り報ず。勝家、兵備稍懈る。秀吉已に  
 使者を遣し、左右に謂て曰く、「彼れ我を怠らしめて、來り襲はんと欲するのみ。  
 吾れ且に其膽を破らん」と。  
 十二月、兵を引きて長濱に至る。勝家の義子勝豊之を守る。勝豊、素より勝家と  
 隙あり。秀吉、之を招き降して、復長濱を取る。益、城堡を築き、其糧仗を備へ  
 て以て、越前の衝路を拒ぐ。十二月、還り、秀信、及び諸將に獻遣す。勝家親じ  
 所の京畿に在る者に遇へば、故に之を仇視す。

十一年

秀吉伊勢を攻む

十二年正月朔、姫路より歸りて、士民を撫循し、賞を頒ち、輔を賜ふ。七日、京  
 師に入朝し、遂に安土に至る。雪未だ解けざるに及びて、一益を取り、雪已に解  
 くるに及びて、勝家を圖らんと議す。乃、内外の將士を徴して、草津に會せしめ、  
 兵七萬を部して三隊と爲し、三道より伊勢に入る。一益、長島に在り。分ちて諸  
 城を拒ぐ。秀吉、兵を留めて之に備へ、而して進みて桑名に至る。火を城下に縱  
 ち、退きて營を爲る。其衆を誡めて曰く、「瀧川も亦、兵に老いたる者、今夜必來  
 らん」と。一益、其下に謂て曰く、「我れ已に兵を分つ、在る者は甚少し。寡を以  
 て衆を撃つ、夜襲に如かず」と。即夜、兵を潜めて秀吉の陣に赴き、其備あるを  
 視て乃去る。閏月、秀吉、攻めて龜山を下して、之を信雄に納る。蒲生氏郷、關  
 萬鐵をして、嶺城を攻めしむ。嶺城未だ下らず。勝家、之を聞き、兵を發して南  
 に出づ。

佐久間盛政  
近江  
【柳瀬、木本】

二月、佐久間盛政をして、步騎二萬を將わて、出で、柳瀬に陣せしむ。前田利長、  
 先鋒たり。火を關原に縱ちて退き、木本に陣す。秀吉、乃、氏郷以下の七將を留  
 めて、一益に當りて、自、諸軍を引きて柳瀬に赴く。自、老兵十餘騎と山に上  
 り、北軍を望みて曰く、「是れ速戰を以て勝つべからざるなり」と。乃、兵を勒し



て十二隊となし、湖山の形勢に據りて連珠の砦を築く。而して自、長濱に屯す。三月、勝家、悉く兵を引きて柳瀬に至る。我兵、壁を堅くして出でず。丹羽長秀來りて之を助く。

信孝、勝家一益に應ず

【神戸君】信孝

山路監將

【磯岳】近江

四月、信孝、復兵を擧げて、勝家、一益に應ず。其十七日、秀吉、其軍を以て南し、信孝を攻めて、大垣に至る。盛政、進みて諸壘を撃たんと欲す。勝家許さず。是の時、柴田勝豊、疾を養ひて京師に在り。其部下山路將監といふ者、叛きて北軍に降り、盛政の營に在り。衆中、盛政に謂て曰く、「聞く、神戸君、兵を擧げて我に應ず。而して秀吉、往きて之を撃つ。子、豈赴き援けざるを得んや」と。盛政曰く、「固よりなり。道路阻絶して、敵、其間に充塞す。我れ將に之を如何せん」と。將監、進みて其耳に附し、語げて曰く、「敵の諸壘皆固し。獨、中川清秀の壘、磯岳の麓に在り。我を去る最遠し。而して其備固からず。吾れ兵を潜めて之に趨り、其不意に出でば、必志を得ん。秀吉、大垣に在り。速に來ること能はじ。子、急に擊ちて失ふ勿れ」と。盛政大に喜び、十九日、往きて勝家に告ぐ。勝家曰く、「可なり。我れ利家と留りて、諸壘に當らん。汝、則往きて撃て、擊ちて勝たば速に還れ。慎みて留る勿れ」と。盛政、乃從弟勝政と、萬人を將りて、夜に乗じて

余吾湖の東に至り、湖に循ひて馳せ、曉に比びて岳麓に至る。中川氏の卒、方に馬に湖に飲ぶ。盛政の先鋒執へて之を斬る。其一人逃れ返りて、急を告ぐ。清秀、高山友祥と、數千人を以て、出で、戰ふ。盛政其部將に謂て曰く、「長篠の戦に、鷲巢に火して捷ちたり。是れ倣ふ可きなり」と。人を遣し、其壘下の營を燒かしむ。我が軍願て敗る。友祥、走りて秀長に依る。秀長等惶急して、敢て援けず。清秀、苦戰して終に死す。盛政既に勝ち、因りて留りて還らず。勝家、之を召し還す。盛政答ふるに、日傾き兵疲る。當に明を蹙ちて還るべきを以てす。勝家曰く、「直路一里に過ぎず。何ぞ亟に還らざる」と。盛政笑ひて曰く、「老怯の過慮、何を意と爲すに足らん」と。使者五反す。而して日已に暮る。是の時に當りて、秀吉、岐阜を攻めんと欲して、大雨に逢ひ、呂久河漲りて未だ濟らず。午の時に報至る。秀吉、方に食す。使者に問ひて曰く、「盛政退くや、未だしや」と。曰く、「未だし」と。秀吉、乃箸を投げて起ち、刀を抜きて踴躍して曰く、「吾れ大將を得たり」と。即、駄卒五十人に命じて先往き、沿道の民を募りて曰く、「吾れ將に賤岳に赴かんとす。炬火して我を導き、酒食して我に餉せよ」と。遂に掘尾吉晴をして、留りて岐阜に當らしめ、自、輕兵一萬五千を提げて、鞭を擧げて疾く馳す。



（戦線合戦之）

藤川に及びて昏黒なり。山谷皆虚なり。餉者争ひ至る。兵皆立ながら食ふ。秀吉行、且呼びて曰く、「其里閭を記せよ。吾れ將に凱旋の時、之を賞せん」と。北軍相驚きて曰く、「濃路の諸山、炬火多し。秀吉來れり」と。盛政大に駭き、將に闇に乗じて軍を抜きて北せんとす。適月已に出づ。我軍之を覩て、進みて其後に躡す。盛政、隊を留めて、之に殿せしめ、兵を引きて岳北に上りて陣す。勝政、麓に在り。之と合せんと欲す。而して金銀の馬表已に岳南に在り。銃丸亂發す。勝政の兵、立どころに死する者二百餘人。其陣稍く亂る。秀吉、左右を顧みて、兵を縦ちて之に乗す。加藤清正、福島正則、

加藤嘉明、平野長泰、脇阪安治、糟屋武則、片桐且元、先を争ひて奮撃す。斬獲する所多し。諸軍従ひて進み、遂に大に之を破り、勝政を擒にし、進みて盛政に破り、又大に之を破る。斬首五千級。

戦線合戦記（丹羽三郎左衛門尉賤嶽の城へ箱入事）

不破彦三、佐久間久右衛門が陣へ、夜半頃より松明美濃路より、海道峠々夥しく見え、其とはなしに物さわがしく成出しかば、下々起きよ、其用意せよと、聲々にしきりけれども、昨日終日、戦ひ疲れ、しかく、いぢへ事をせせりしなり、されども物になれたるは、此けしきはたゞ事にあらざるべしと、其様急なるもあり、玄蕃允陣中も、彌さわざ立、退かんとひしめき立出しかども、十九日夜節處を密歩し來り、晝は終日戦ひ暮したり、目ざす共知れぬよるの道、小篠が上の露諸共に落まろび、起きては倒れ、たふれては起上り急ぎしが、せめて月をよすがにせんと、しる内、廿日の夜の月、山の端にのぼれば、聊か道しるべあり、南方の勢は兼て支度を調べ、敵退きなば付かんと待得し事なれば、未だ陣拂もせざりし内に、はやひと付きて見えたりけり、原彦次郎、安井左近も、賤嶽を押しありしが、漸く仕拂ひて一手に成りし時、玄蕃、今日の殿も此兩人を頼入ると云ひしかば、委細意得候と領掌し、跡に打けるが、鐵砲千挺五六張宛、一町々々に伏せ置き、是迄引取り下知次第うてよと有りしか共敵すき間なく引付かり來て、鐵砲をだに打兼る計に急なりけり、原と安井と立代り、殿せんと堅く約して、一二はさきも待れども、こはき殿にや有けん、

安井は引取りて退きしにより、原一人して前後に目をくばり、左右に下知し退きしが、青木勘七郎、原勘兵衛、長井五郎右衛門、豊島猪兵衛、鷲見源次郎、鷲津九藏、毛屋新内など、引返しては突倒し突退けられ、敵も引にけり青木は其中にて行年劣る程に、跡をば我れにまかせよとて、二三度引かへし、鎧を合せ突のけしが、何れも鎧を以てたゞき合ひけるに、青木計引ぬき引抜突きしかば、敵思ふ程には付かざりけり、かく六七人の兵共、歸し合せあまた、ひ戦ひし故、後は原が勢にはしたはざりし也、柴田三左衛門尉は、三千餘騎の勢を率し、賤ヶ嶽の空筋なる堀切を、前之口越えつゝ、南に向ひて勢を備へ、敵勢を押へありけるが、兄の玄蕃允、一萬五六千の勢をやうくにして、志津嶽の北なる山へ引上げ、余呉の海邊より押し上る勢を押へ有りしが、三左衛門方へは我が勢ははや難なく引退きし也、急ぎ是迄引取り候へと、使者を兩度に及びしかば、さらば玄蕃允と一手にならんとせし處、秀吉卿は夜の明くるを待かれ、木本をまだほのくらしきにおし出し、志津嶽の城の南に御旗を立てさせられ、弓級砲の頭分共に、堀切のこなたなる勢は、只今(巳時)引取ると見えしぞ、急ぎはせ付け討たせよと、使番母衣之者を以て仰付られしかば、心得候と云ひもはてず、ひしと引附け、堀切より引上げ候を、懸渡しに狙ひすましうたせしかば、時の間に手負二百人餘打出しけり、敵は此手負をのけんとせしに、勢の次第も亂れ、右往左往なるを、御旗元より御覽じて、小姓ども法度をゆるすぞ、引付けて手柄をせよやくと、御身を押し下知し給ひしかば、相悦び、真先に石川兵助などすゝり行きけるに、福島市松、加藤虎之助、同孫六郎平野權平、臨阪基内、糟屋助右衛門、片桐助作等、我れ劣らじと引付けし處に

玄蕃、拜郷五左衛門をよび、先手危く見ゆるぞ、能きに計ひ候べしと云ひしかば、引べき所を引かずして、かく成り來り、今更計ひになる物かと思ひしか共、面もふらず引かへしければ、淺井吉兵衛尉、山路將監、宿屋七左衛門尉も俱に歸し合せしが、拜郷真先に鎧を打込むとひとしく、石川兵助と名乗り出で、鎧を合せ戦ひしが、共に打死してけり、渡邊勘兵衛尉、淺井喜八郎、淺野日向守は、堀切を跡に見なし、嶺わきを追立て行くに、加藤虎之助、同孫六、彼の十人計の小姓衆、曳々聲を上げ、すき間をあらせず追立て行くにこそ、吉兵衛、將監も、余呉の方なる谷へ心ざすやうに見えしや否、渡邊勘兵衛、淺井喜八郎、見知りたるぞと詞をかけし處に、心得たりといひ、鎧を以て向はんとせしが、如何はしたりけん二人とも谷へ落ちまらるひしを、麓にありし大鹽金右衛門が手に討取りしなり、柴田三右衛門尉は足をも亂さず、手負共をも打かこひ、二十町計引取りけるに、秀吉卿の小姓衆、ひたと付きて追ひ行く處に、前田又左衛門尉、茂山の麓高き處に、二千餘の勢を二段に備へありしを、便りとして、佐久間久右衛門、逃るゝ味方を左右におし分け、踏とまりしはしが程ありしなり、玄蕃、今日の軍はこらへがちなると、大の眼に角を立て下知しける處に、原彦次郎進み出で、我々は左様に存せざるなり、今日の軍はひかへ行く程、敵の勢は彌重りて厚く、味方の勢は見るが内にうち崩れすべく候、願くは只今一合戦候へかし、先は十萬騎成りとも、某さわざ不申候、今朝我が勢、敵を度々突きつろげ、手なみの程も能く見せ候べし、然にや予が殿には、得も付かざりし故、後は心安く引候へ、之によりてかくは申候ぞ、一番合戦をば吾々致候はんと、押返し云ひしか共、玄蕃允、陳を防ぎ用おざりしなり、案の如く未

た舌の根もかわかざるに、南方の勢、谷よりは水の涌くが如く溢れ上り、峠よりは吹飛ぶ木枯のやうに寄せ、勢十重二十重に厚く成り行きしを、北國勢のうらに控へたる羽兵、見驚き色ゆき出しを、丹羽五郎右衛門尉長秀、すはく時は今なり、惣がりに懸れや者どもと、金の馬じるしをふらせ、喧とか、りしにこそ、玄蕃允佐久間久右衛門が勢、惣敗軍には成にけり、

【核山】近江

遂に進みて勝家に逼る。勝家、核山に在り。賤岳の軍、大に囂しきを聞きて、之を危む。已にして敗卒交至る。勝家曰く、「盛政果して我が事を敗る」と。遂に北に走る。過りて前田利家を府中に見る。其馬を請ひて、馳せて北莊に入る。秀吉走るを追ひ、府中に至り、單騎城門を打つ。利家の俗字を連呼して曰く、「又左々々」と。利家、乃、出で、之を迎へ、其兵を以て従ふ。諸城、風を望みて解走す。且日、秀吉北莊に至り、自、其後山に上り、堀秀政をして火を縦ち、烟に乗じて城に迫らしむ。或人、盛政、及勝家の養子權六を縛し、麾下に獻す。秀吉、之を城中に視す。勝家遂に自、燒殺す。秀吉、城中に火起るを見て、則兵を引ききて北し加賀、能登を徇へ、盡く之を下す。信孝、出走して自殺し、一益降る。是に於て秀吉還りて阪下に軍す。六月、從四位下に叙し、參議に任せらる。

勝家戦死  
信孝

賤岳七槍

近畿粗定まる

大阪城を築く

信雄秀吉を嫉む  
十二年

七月、大に戦功を賞す。北莊を丹羽長秀に、大垣を池田信輝に、澤山を堀秀政に、金山を森長可に予へ、近臣七人に秩各千石を賜ふ。世呼びて、賤岳の七槍と曰ふ、是に於て、近畿粗定まる。山陽、山陰の將士、來りて去歲の盟を尋ぐ。上杉氏、徳川氏、皆使して戦捷を賀せしむ。秀吉、天下に覇たるの志あり。謂ふに、京師は狹迫にして、漕運に便ならず。且邸第を列ぬる地なし。大阪は、北に大河を帯び、西に海水を控へ、地勢宏壯にして、以て七道を管攝すべしと。十一月、遂に十餘州の卒を起し、大阪に城き、成りてこれに従る。信雄、秀吉の威權、日に隆なるを視て、心平なる能はず。其下に三驍將あり。秀吉、厚く之を遇す。信雄、其私有るかを疑ふ。十二年三月、三將を殺し、秀吉と絶ちて、援を徳川氏に乞ふ。池田信輝、森長可、堀秀政、皆秀吉の爲に信雄を拒ぐ。信雄の將瀧川雄利、初め質を秀吉に送る。秀吉之を脇阪安治に屬す。是に於て、雄利、詐りて之を奪ひ還し、其邑上野に據る。安治怒り、從者二十人を以て伊賀に入り、夜、土兵を募り、上野城を襲ひて之を抜き、雄利を走らす。秀吉、安治を留めて伊賀を定めしむ。信輝、長可も亦、大山を抜きて之を守る。秀吉、尾藤知定を遣し、二人の軍を監せしめて曰く、「彼れ必勇を負み

小牧

て浪に戦はん。汝、往きて之を制せよ」と。遂に自將として東せんと欲す。會南海盜起る。乃中村一氏等を南面に當らしめ、浮田秀家を西面に當らしめ、丹羽長秀、前田利家を北面に當らしむ。而して自、將として東下し、大山に至る。徳川氏、北畠氏、兵を合せて小牧に陣す。壘を對して未だ戦はず。秀吉、書を遣りて戦はんと請ふ。徳川氏、肯せず。四月、信輝、自、間道より參河を擣かんと請ふ。秀吉答へず。明日、復請ふ。乃之を許す。信輝、二婿秀政、長可を率ゐて以て往く。曰く、「親戚軍に赴く。他の證左なし」と。秀吉、乃三好秀次をして之を助けしむ。秀次は、秀吉の妹の子なり。發するに臨みて、信輝を誡めて曰く、「宜しく篠木、柏井に塞し、土兵を募り、火を東參河に縱つべし。敵を侮りて輕しく進み、勝を恃みて備へざる勿れ」と。既に之を遣り、自徒りて樂田に陣す。信輝、長可、進みて岩崎を抜く。或人走りて徳川公に告ぐ。公、信雄と其懈るを伺ひ、襲ひて長湫に撃ちて之を殺す。其將佐の曰く、「秀吉、軍機に敏し。今必來らん」と。乃、兵を收めて退く。秀吉、敗聞を得て、袂を奮ひて起ちて曰く、「敵、次を亂して來る。吾れ迎へて疾く撃ちて、以て之を壘にす可し」と。急に精兵二萬を抽て、自、將として長湫に赴く。敵退きて小幡に入ると聞き、隨ひて之を攻めん

長湫

【二帥】徳川氏  
北畠氏

と欲す。稻葉道朝、諫むるに日暮兵疲るゝを以てす。乃止む。令を下して曰く、「且日、攻めて二帥を擒にせよ」と。參河の將士、争ひて秀吉の陣を襲はんと請ふ。徳川公、肯せずして曰く、「秀吉の勇略は世出にめらざる。其れ狂れて之を輕す可けんや」と夜、退きて小牧に還る。秀吉も亦、樂田に還る。

大垣

五月、諸將を留めて樂田を守らしめ、兵を引き、攻めて利井嶺、神戸、松島、竹鼻の諸城を抜く。

六月、竹鼻を以て一柳直末に予ふ。森長可の弟忠政をして、兄の邑を襲かしむ。蒲生氏郷を松島に封じ、十二萬石を食ましめ、傍近の諸城を統攝せしむ。秀吉、自、大垣に陣し、伊勢、尾張の間に往來して、諸城砦を修む。脇阪安治を遣して志摩を徇へしめ、大和の國主筒井定次を伊賀に移し、大和を以て弟秀長に賜ひ、志摩を以て九鬼嘉隆に賜ふ。

十月、羽津に陣す。信雄、桑名に陣す。其君臣、内に相猜疑し、軍中數驚く。秀吉、乃、富田知信、津田信季に謂て曰く、「我れ先君の爲に仇を復し、務めて國家を鎮定す。而るに諸郎、細説を聽きて、遽に我を誅せんと欲す。我れ已むことを得ずして、起ちて之を較ぶ。神戸君既に良死せず。我れ今に至りてこれを悼む。」

我が爲に北畠君に謝せよ。蓋そ細故を捐て、富貴を與共にせざる」と。二人往きて之を信雄に告ぐ。信雄之を許す。矢田河原に相見て、和成る。徳川公使をして之を賀せしむ。尋いで其子秀康を送りて質と爲す。

末森成

秀吉の東するや、南海の盜數岸和田を攻む。土佐の國主長曾我部元親、四國を略定し、兵を發して之を援けて、大阪を窺ふ。中村一氏、岸和田を守り、撃ちて之を卻く。佐々成政、又越中を以て北畠氏に應じ、兵萬餘を將ゐて末森城を攻む。城前田家に屬す。城將奥村永富、其妻と、士卒を獎勵して固く守る。利家赴き救ひ、大に成政を破る。成政援を徳川公に求む。公、之を辭す。十一月、秀吉從三位に進み、大納言に任ぜらる。

十三年

十三年二月、正二位に進み、内大臣に陞る。是に於て、兵を南海、北陸に用ゐんと議し、先南海を定めんと欲す。南海の賊根來、雜賀、最強し。羽柴氏の且に來らんとするを聞きて。三寨を千石壕に築き、銳を悉して之を守る。

三月、秀吉、五十萬を將ゐて南伐し、秀次をして三寨に備へしめて、直に根來寺を指す。寨兵、弓銃を以て之を要す。秀次、騎を縦ちて傍より撃ち、遂に兵を合せて寨を圍む。我が軍、火箭を發し、賊の硝權に中つ。賊悉く焚死す。諸寨、皆

根來寺を燒く  
紀伊和泉近江  
を定む

解走す。秀吉、則、生兵六萬を以て、急に根來を襲ひて之を焚き、遂に攻めて雜賀を下す。紀伊川を引きて、大田の壘に灌ぎ其魁首五十人を磔す。進みて熊野、高野を下し、諸關寨を撤す。紀伊、和泉を以て秀長に加賜し、近江を以て秀次に賜ふ。

四國を攻む

四月、大阪に歸る。秀吉遂に書を以て長曾我部元親を諭す、「當に伊豫、讃岐を獻じ、天子に來朝すべし。否せずば則罰あらん」と。元親聽かず。五月、秀長、秀次をして舟師六萬を以て、往きて之を討たしむ。阿波より入る。又浮田秀家を讃岐より、小早川隆景を伊豫よりして、並に元親を攻めしむ。元親、兵を將ゐて羽津に拒ぐ。秀次は和氣を攻め、秀長は一宮を攻め、皆之を降し、合して木津を攻め、又之を降す。諸城解走す。仙石秀久、前に封を淡路に受く。七月、其兵を以て屋島を抜く。秀家、隆景も亦、數城を陷る。諸軍、期を刻して、羽津に萃る。元親、乃、降を乞ひ、質を送りて、遂に入朝す。秀吉讓めて曰く、「來ること何ぞ晚き」と。乃、其三國を奪ふ。阿波を蜂須賀家政に、讃岐を仙石秀久、十河存保に、伊豫を小早川隆景、來島康親に賜ひ、伊豫の正木を以て加藤嘉明に賜ひ、淡路の洲本を以て脇坂安治に賜ふ。南海盡く定まる。

南海定まる

秀吉關白と爲る

豊臣氏と稱す五人を置きて政令を掌らしむ

【水口】近江

初め秀吉、微賤より起り、姓氏なし。始に平氏を稱し、中を藤原氏を稱す。是に於て、征夷大將軍たらんと欲す。右大臣藤原晴季、素より秀吉と善し。之が爲に謀りて曰く、「故事に、大將軍は源氏に非ずば不可なり。公は藤原氏を稱す。宜しく關白と爲るべし」と。秀吉曰く、「關白は何物ぞ」と。晴季曰く、「位天子に亞ぎ、百官を統御す」と。秀吉大に喜ぶ。時に藤原昭實、關白たり。晴季、諷して其官を辭せしめ、秀吉を以て之に代らしむ。朝廷其意に違ふことを重しとして、遂に詔して之を許す。秀吉、趨從を具へ、入朝して恩を謝し、奏請して子弟將士に授くるに官爵を以てす。秀吉、他姓を冒すを羞り、請ひて新姓を賜はり、豊臣と曰ふ。吏五人を置きて、政令を奉行せしむ。淺野長政、石田三成、増田長盛、諸の訟獄を掌り、長束正家、錢穀を掌り、前田玄以、僧、祝を掌る。長政は彈正少弼に任せられ、後甲斐に封せらる。玄以は徳善院と稱し、法印に任せらる。嘗て、織田氏の吏たり。後篠山に封せらる。正家は太藏少輔に任せらる。嘗て丹羽氏の吏たり。後水口に封せらる。三成は治部少輔に任せられ、後澤山に封せらる。長盛は右衛門尉に任せられ、後郡山に封せらる。秀吉、五人を戒めて曰く、「大事は會議して之を決し、小事は必ずしも然らず。留滯あらしむること勿れ。贈

豊臣氏歳入

北伐す

飛驒を略し信濃を降す

賄を納るゝこと勿れ。恩仇を挾むこと勿れ。訟獄の事は、貧富貴賤となく、一切事に従へ」と。是の時に當りて。豊臣氏の歳入二百萬石、府庫之に稱ふ。曰く、「吾れ獨、自封殖すべからず」と。遂に令を下して金五千枚、銀三萬枚を諸將士に分ち、其軍費を償ふ。場を京師の第門に設け、一日に悉く之を散す。八月、自、騎兵十萬に將として北伐す。北畠信雄は尾張、伊勢の兵を以て、前田利家は能登、加賀の兵を以て、皆これに會す。佐々成政、富山に據り、三十餘壘を穀粟嶺に築く。秀吉、疑兵を張りて之に當て、而して海に航して直に富山を襲ふ。成政、惶駭し、髪を削り出で、降る。乃越中を利家の子利長に加賜す。丹羽氏罪あるを以て、越前を奪ひ、其半を割きて、堀秀政に予ふ。村上、溝口の二氏をして之に屬せしめ、以て北陸を鎮せしむ。而して越後の國主上杉景勝未だ來らず。秀吉既に成政に勝ちて、則石田三成等の十餘騎と、險を踰え直に越後に入り、其疆上の吏に謂て曰く、「吾は秀吉なり。汝が主已に使を我に通す。我れ故に來り見て、事を面議せんと欲す」と。吏、使を馳せて景勝に告ぐ。景勝大に驚きて遂に盟ふ。秀吉左右を屏けて與に語る。既に畢りて西に還る。金森長近をして飛驒を略せしめ、其國司姉小路頼綱を攻めて之を滅す。因りて長近を封す。是より先、

〔二城〕内城外城

信濃の豪族眞田昌幸、來りて欺を送る。子の幸村を納れて質と爲す。昌幸、父の幸隆より武田氏に屬す。武田氏の亡ぶるに及びて、徳川氏に屬して、上田を領し北條氏を攻めて、沼田を取る。徳川氏、北條氏と婚し、昌幸をして、沼田を還致せしむ。答へて曰く、「公の賜ふ所の上田は掌大の地のみ。沼田に至りては、我れ吾が兵力を以て之を取る。焉ぞ他人に予ふるを得んや」と。徳川公怒り、歩騎七千を率ゐて來り攻む。閏月、上杉景勝、秀吉の旨を以て、兵を發して昌幸を援く。昌幸、之を内城に延きて、自、外城に居り、柵を城内に植て、兵を城外に伏せ、而して羸卒を出して敵を誘ふ。敵、進みて城に入る。柵内より銃を發す。敵陣亂る。二城挟み撃ちて之を破る。敵走り出づる時、伏起りて又之を破る。昌幸の子信幸も亦、北條氏の兵を沼田に迎へ撃りて之を破る。

九月、景勝、自、將として來り援く。敵軍退き去る。小笠原貞慶も亦、昌幸に因りて欺を送り、景勝と、並に豊臣氏に連衡して、以て關東を圖る。徳川氏、北畠氏、悞れて從を約す。

十一月、徳川氏の將石川數正來奔す。其國大に擾る。秀吉、乃信雄に謂て曰く、「吾れ既に中州を定む。東西未だ服せず。近日將に西伐せんとす。宜しく先徳川氏

毛利氏大阪に來る

〔乃叔〕隆景乃翁元春

十四年 聚樂邸成る 方廣寺を建つ

と和して以て、北條を拒ぐべきなり。子我が爲に之を圖れ」と。信雄、乃、二使を遣して徳川公を諭す。公、其變あらんことを恐れて、敢て來らず。是の歳、毛利氏、小早川隆景、吉川元長を遣し大阪に來らしむ。元長は元春の子なり。秀吉、善く之を待す。曰く、「天主閣新に成る。當に卿等をして一觀せしむべし」と。乃、自一侍女を從へて、隆景、元長、及び其從者數十人を導きて閣に上り、遠近の山海を指示す。因りて元長に謂て曰く、「吾れ乃叔に予ふるに伊豫を以てす。乃翁には未だ予ふる所あらず。吾れ數乃翁と兵を治す。常に相見て往日の戰略を談せざるを恨む。明年吾れ將に九州を伐たんとす。乃翁を煩して先鋒と爲さん。事平かば、之に筑前を予へん」と。

十四年二月、内野の第成る。名を聚樂と命ず。秀吉、將に天子の幸を請ひ、諸侯を率ゐて之に朝せんとす。是の歳、又方廣寺を建て木を以て大佛を造る。高さ十六丈。卒數萬人を興し、四方の工人盡く集る。

四月、其妹を以て徳川公に妻す。

五月、上杉景勝、入りて觀ゆ。是より先、豊後の國主大友義鎮も亦、入りて觀ゆ。始め島津義久、薩摩より起り、荐に九國を食む。義鎮、肥前の國主龍造寺政家と



西伐せんとす  
【教】主將の命  
令

歳々其兵を被る。並に援を秀吉に乞ふ。窟の城主高橋鎮種、立花の城主戸次宗茂皆來りて欺を送る。是に於て、秀吉、將に西伐せんとす。教を列國に下し、並に固守して以て俟たしむ。

七月、義久、弟義弘、家久を遣して二筑を略し、秋月氏、筑紫氏を降し、乃、鎮種を攻む。鎮種、自殺す。宗茂固く守り、使を來らせて急を告ぐ。秀吉、乃、黒田孝高を遣し、毛利輝元、吉川元春、小早川隆景を趣す。

書を島津氏に  
送る

九月、又加藤嘉明、脇阪安治を遣し、長曾我部元親、十河存保を趣す。皆兵を發して西向す。遂に書を義久に遣りて曰く、「關白問ふ、何を以て朝貢せざる。何を以て座ながら官爵を取る。何ぞ縦に兵を出して、隣國を攻略するか」と。仙石秀久をして、書を齎して往かしむ。因りて秀久を誡めて曰く、「彼れ若し服せずば、且く與に戦ふ勿れ。退きて以て我を蹙て」と。秀久至る。義久、書を地に投じて曰く、「我が族、此に國すること十四世。朝貢を促すものは、獨近衛氏あり。猴冠者敢て我を屈致せんと欲するか」と秀久憤恚し、大友氏の兵を以て、進みて家久を撃つ。元親、存保、之に従ふ。元親の子信親、存保と、皆敗死す。元親は伊豫に走り、秀久は豊後に走る。嘉明、安治、力戰して退く。義久、遂に大舉して豊後

頼久怒る

に入り、十六城を下す。大友義鎮、既に死す。其子義統出で戦ひて大に敗る。事聞ゆ。秀吉、怒りて秀久の邑を奪ひ、之を尾藤知定に予ふ。終に西伐を議し、益徳川公の入朝を促す。

大廳  
【女】徳川氏夫  
人

十月、公、萬餘人を従へて發す。秀吉の母を大廳と曰ふ。往きて女を岡崎に問ひ、以て其國人を安す。徳川公京師に至る。秀吉數人を従へ、其館に就きて手を握りて欺語す。遂に酒を呼びて其諸將を召し、小牧の戦を談じ、歡を盡して出づ。

後陽成天皇  
秀吉太政大臣  
となる

十一月、徳川公、入りて聚樂第に謁し、禮を畢りて去る。是より先、皇太子、殞す。是の月、天皇位を皇太孫に禪る。皇太孫、位に即く。是を後陽成天皇と爲す。十二月、天皇、詔して秀吉を以て太政大臣となす。關白職、故の如し。是に於て、秀吉奏請して曰く、「臣、島津義久の入朝を徴すに、義久命を奉せず。臣請ふ、自將として之を伐たん」と。乃越中、尾張以西三十七國に令して兵を發し、明年二月を以て、大坂に會せしむ。石田三成、大谷吉隆、長束正家に命じて、糧餉を掌らしめ、小西隆祐、建部壽徳をして漕運を掌らしめ、先小倉に赴き、三十萬人の糧、二萬匹の馬芻を具へ、一歳を支ふ可くあらしむ。

西伐準備

十五年

十五年二月、兵の大坂に會する者十五萬人。秀吉、令を下して鹵掠を禁じ、鬪諍

西伐の途につ

(秀吉水陸の兵を發して西伐する圖)



を止め。又吏を沿道の驛舎に置き、軍行をして塞滞なからしむ。乃秀長を遣し、前軍に將として、先發せしむ。三月朔、秀吉、自、諸軍に將として京師を發し、水陸俱に下る。義久、既に大友義統を逐ひて、豊後の府内に居り、兵を發して四出す。豊臣氏の前軍、豊前に至ると聞きて、乃家久をして耳川を守らしめ、兵を引き退く。秀長、耳川に至る。諸將先濟る。家久、夜、南條、宮部氏の營を襲ふ。南條敗れ、宮部、擊ちて之を卻く。明日、秀長乃濟る。敵、遂に退きて高城を保つ。既にして又退く。二十五日、秀吉、赤間關に至る。増田長盛を留めて、關戸城を守らしめ、丸尾某、城戸

【馬岳】豊後

【小倉】肥前

【合子】肥前

某をして、門司城を守らしめ、國人の質子を徵し、海を濟りて豊前に入る。二十八日、馬岳に陣し、兵を分ちて並進む。時に秋月種實、島津氏の兵を招き、岩石城に據る。城、豊前、筑前の間に跨り、險固を以て聞ゆ。秀吉、義子秀勝を遣して之を攻め、蒲生氏郷、前田利長をして、之を輔けしめ、自、麾下を以て杉原山に登る。四月、氏郷、其南を攻め、利長、其北を攻む。城兵能く拒ぐ。氏郷、先其郭に入る。秀吉、山上より其徽號を望見し、自、其袍を脱し、人をして齎し馳せて之を賜ひて曰く、「此を被て以て内城に登れ」と。氏郷、感激して、身、士卒に先だつ。風、大に起るに逢ひ、火を縱ちて城を焚く。城即陷る。秀吉、乃進みて、小倉に至る。種實遁れ去る。子種長をして、城を以て降らしむ。秀吉、悉く其地を收め、進みて高良山に軍す。龍造寺政家、肥前の兵を以て來り會す。肥後の諸城、皆解走す。薩摩の驍將新納忠元、伊集院忠棟、合子城を守る。走りて八代を保ち島津征久と兵を合せて堅く守る。秀吉、兵艦を以て之を攻む。忠元等、夜遁る。秀吉、其城に入りて諸將に謂て曰く、「吾れ僻遠の國を征誅す。苟も塵盡を期せば勞不可なる所あらん。且に吾が俠を見さん。宜しく優容に従ひて、速に大功を成すべし」と。乃衢路に榜して曰く、「名門故家の敵に脅從する者、及豪俠の大盜を

進みて薩摩に  
入る  
忠良降る  
千何

聚め黨を結ぶ者、一切皆宥し、其自新するを聽す」と。令始めて下る。軍門、市の如し。秀吉、進みて薩摩に入り、島津忠良を降す。五月、進みて千代河に至る。河は海港に接す。前に發せし所の漕船盡くこと、濠に渡る。乃、水軍の將加藤嘉明、脇阪安治、九鬼嘉隆に命じ、浮梁を造りて軍を濟し牙を太平寺に建て、軍營を環布し、池澤を填め、丘阜を夷ぐることを方二里餘。中に門港を開き、縦横四達す。遠近、風を望みて潰ゆ。乃水軍の三將を遣して、桂忠助を平佐に攻めしむ。脇阪安治、先登す。忠助降る。是に於て、秀長、日向の故主伊京祐丘を以て、先鋒となし、五萬人を以て日向より入る。前田利家、淺野彈正、龍造寺政家等を以て先鋒とし、五萬人を以て大隅より入る。家久、佐土原を以て降る。義弘、退きて求麻に陣す。諸軍、合して南下して、鹿兒島に臨む。島津氏の將佐、交義久に請はんと勸む。乃、伊集院忠棟を遣し、秀長に因りて罪を謝す。秀吉曰く、「吾れ初め不廷の臣を誅し、遺類無からしめんと欲す。吾れ聞く、島津氏は、源右大將の遠裔なりと。四百歳の名族を、一日にして之を滅すは、吾も亦忍びざるなり。其れ之を宥せ」と。義久大に喜び、髪を削り、僧衣を被て、近臣五六人を従へ、太平寺に詣りて降る。秀吉延見し、謔言を以て之を慰藉し、

家久降る  
〔佐原土〕日向  
鹿兒島に入る

命するに義弘を以て嗣と爲さしむ。琉球國、使を馳せて貢獻を修む。

九州紹運記 (太閤秀吉公薩州御進發の事)

天正丁亥四月朔日、秀吉公香春岳へ裏らせ給ひ、岩石を御覽あり、誰が城ぞと御尋有りければ、秋月が人数差籠ると申上り、先陣衆は去年より何事を仕たるや、あはれなる疲城さへ打崩さぬとて、少し御機嫌宜しからずして御通りありければ、諸軍我先にと取懸り乗崩す、かくて小隈に御着有りて、三日御滞留なされけり、かゝる處に四月三日、秋月種實、嫡子種永父子共に法體仕、樹柴といふ名物の茶入を奉捧、御陣所に走入、秀吉公御上意に、降人と云法體と云、さらば赦免と被仰なり、同四月五日、秋月に御陣替成され、立花左近將監參陣成されければ、悉く御座には、近年我に荷擔し、諸方に敵を請け、軍勢比類なく就中紹運事、於岩屋九州の大軍を引請、我が朱印を成宛所を守り、多くの軍卒を亡し遂切腹の條、甚以大忠功の至なり、向後御志却あるべからざるの旨、御懇切に仰せ聞け、則吳服、御太刀、御馬を拜領して御前を退出ありければ時に取て武士の面目哉とぞ人々感じける、則薩州への御先を仕候へとて、同四月十一日には筑後高良山に御着陣成されければ、龍造寺參陣して、是も先陣を仰付らる、叔亦南の關、山鹿、隈本、宇土、相良、其外九州の大名小名、草の風に低くが如く、皆參陣仕御禮を遂げ候へば、程なく八代へ御着成され、夫より薩州の和泉へ御着成され、暫く御滞留にて、先陣に様子を聞召し合せらるべしとなり、本より千登川へは兵船數千艘乗込、河下の京泊まで三里の間際ぎ雙べたり、并に京境の商人船何千艘ともなく乗入れ、警固の兵船の如く昇、指

物、幕を打飾り立てたれば、河風に翻り松風波の音に動揺す、陸には京勢數萬騎、其外筑後大名小名打合、諸軍勢千盞三里四方には尺地もなくこそ見えければ、いかなる島津なりとも、此大勢にはおのづから恐を成し、太閤公千盞へ御着陣に及びては、御使言を遂げ参陣の覺悟とぞ聞えける、

九州紹運記（島津参陣の事）

太閤秀吉公、千盞へ御着陣あれば、島津義久を始め伊集院、下堂院、入米院、其外の親族何れも法體仕り、證人を先立て、千盞に参陣仕らるゝに依て、皆々御有免にて御對面成され、本國相違無く遣さるゝ由仰出さるゝ者也

大に將士の功を論ず

六月、凱旋して太宰府に至り、盡く九州の質子を收め、大に功罪を論ず。島津氏をして故土に因りて薩摩、大隅、日向を領せしめ、其侵地を削りて、肥後を佐々成政に、筑前を小早川隆景に、豊前を黒田孝高、森勝信に、筑前を毛利秀包、立花宗茂に賜ふ。而して大友義統、高橋統增、伊東祐兵、龍造寺政家は、皆舊領に復す。差増損あり。政家の族鍋島直茂をして、國事を攝せしむ。政家、天するに及び、乃直茂を立つ。耳川の事、尾藤知定、秀長をして、即救はざらしめたり。因りて其讃岐を奪ふ。後以て生駒親正に賜ふ。丹羽長重、軍法を犯せり。因りて其若狹を奪ひ、之を淺野氏に賜ふ。阿蘇大宮司の邑を削り、彦山の僧徒を律す。大村氏、私に西蠻の妖賊を舍せり。因りて其長崎の邑を奪ひ、賊二十餘人を邑中

西海の政令を修む

に際し、鍋島氏をして外國の互市を監せしむ。天主教を禁じ、遂に大に西海の政令を修む。

七月、京師に復命す。天皇、使を遣して之を郊勞す。

佐々成政

八月、徳川公、自來りて戦捷を賀す。是の歳、西海の諸侯、皆國に就く。秀吉、成政を誡む「善く土豪を待し、國民を擾す勿れ」と。成政、教に違ふ。士民叛く。

加藤清正  
小西行長

年を諭えて粗定まる。秀吉、之を讓めて死を賜ひ、肥後を以て加藤清正、小西行長に分賜す。清正是主計頭と爲り、行長は攝津守となる。行長は即彌九郎なり。

十六年

秀吉、二人に謂て曰く「他日、將に以て汝を用ゐること有らんとす」と。

聚樂行幸

十六年正月、秀吉遂に奏して臨幸を乞ふ。時に大亂の後を承け、典籍殘亡せり。乃、前田玄以をして、公卿と雜議せしめて、足利義滿、義教の故事を用ゐる。

四月十四日、天皇、聚樂第に幸す。關白秀吉、文武の百官を率ゐて扈從す。扈從は、蓋し新典なり。遠近縱觀す。父老或は流涕するものあり。曰く「吾が濟行幸の儀ありと聞くこと久し。今親しく觀るを得たり」と。即日、享禮を行ひ、伶人をして、五常、太平の諸樂を奏せしむ。明日、秀吉、早に盛服して出で、御座の右に侍し、盡く天下の牧伯を召して、前に列せしむ。内大臣信雄、大納言家康、大



(衆樂行幸之)

納言秀長、中納言秀次、左近衛中將秀家、右近衛少將利家、侍從元親、侍從義統以下次を以て進み、盟ひて曰く、「皇恩を奉戴し、力を王事に竭し、敢て怠ること有る勿し。皇家の邑敢て侵むこと或る勿し。犯す者あらば、相共に之を誦責し、子孫を戒囑し、敢て渝ること或る勿し。關白の令する所は、事大小となく、敢て奉せざることを或る勿し。斯盟に違ふ所の者は六十六州の神祇、大に之を罰殛し其國家を覆し、能く其祿を享くること莫らしめん」と。明日、諸牧伯を宴す。天皇、歌を賜ふ。關白以下、皆之に慶ぐ。車駕、駐ること五日にして、宮に還り給ふ。秀吉、京師の戸税を以て供御に奉じ、其戸

租を以て上皇の湯沐の邑と爲す。近江の高島郡を以て廷臣の采田に充つ。凡て金帛珍寶の獻、前後算なし。

豊饗 (内野行幸)

二月の比より、衆樂の亭に行幸なし奉るべき催しあり、久しく絶てなかりし事なれば、ゆづりかなりし物なり、民部卿法印玄以といへるに仰せて、萬取行はせ給へば諸家の古き録を考へ尋攪りて、勤めらる、此度は永享九年室町殿へ行幸の例とぞ聞えし、されど此度はかれにまさりける事多かりけり、日を選びて四月十四日とぞ定められける、遠き國々よりもこれを見ん爲に、高き賤しき登り築りければ都の賑ひいはんかたなし、その日になりぬれば殿下とく参り給ひて、奉行職事をめして、制限午の時以前のよし急がせ給ふ、兼てよりみな健の御所の御氣色うかふにこそ、衛府の鞞弓筋を帶し、上達部以下參集り、御殿御留守などたれくと仰定めらる、奉行事したるよし奏すれば、南殿に出御あり、御束帶御衣は山鳩色なり、御殿より長橋まで蒔道布氈を敷き、殿下御裾をとりたまふ、陰陽頭反問をつとむ、園司の奏、鈴の奏も例のごとし、殿下笏をならして勅答の由を告げ給ふ、御紐持は中山頭中將慶親朝臣、御草鞋は宮小路頭辨光房朝臣、次に風笠を御階の間もとよせて左右の大將御綱以下例の如し、さて四足の門を北へ、正親町を西へ、衆樂の亭まで十四五町その間辻がため六千人なり、烏帽子着の侍をわたして、國母准后と女御の御輿を始め、大典侍御局、勾當御局、その外女中衆の御懸三十丁餘、みな下簾あり、侍こしぞへ百餘人御供の人童姿などさすがに覺えて花やかなり、そのあとに少し引下りて

奥四十五丁あり、六宮の御方、伏見殿、九條殿、一條殿、二條殿、その外菊亭  
 右大臣晴季公、徳大寺前内大臣公維公、飛鳥井前大納言雅春卿、四辻大納言公  
 遠卿、大炊御門前大納言經頼卿、勸修寺大納言晴豊卿、中山大納言親綱卿伯三  
 位雅朝王、此御衆にて侍ふとぞ (中略) つぎの侍は数をしらず、馬上の装  
 束は一日たりとて、五色の地に四季の花鳥を、唐織浮織りうもん縫箔にして、  
 奥地蜀紅の綾羅錦織もあやなり、よしの山の春のけしき龍田川の秋のよそほ  
 ひもいかゞとちほえ侍り、五畿七道より登りつとひたる貴賤老少、かまびすし  
 きこともなく、聲をしづめて風笠を拜したてまつる、みちすがら管鼓のひびき  
 何となく殊勝にして、感歎肝にめいじたり、(中略) 御酒宴はて、西おもての御  
 几帳あけさせ給へば、庭の植木など繁りあふ、若葉の中にをを櫻つゝ山吹な  
 どの咲残りたるに、蝶鳥のこゑ夕日のかげにたはぶれていと興ありとぞ、水殿  
 雲廊別にはるを口賦に長生不老の樂をあつむるものなり、くればつるかたぐ  
 に大殿油かゞげそへて、御遊とぞ聞えける、御人數十四五人一番五常樂、二番  
 鄧曲、三番太平樂 (中略) 鄧曲、徳是北辰椿葉蔭二改、高尙南面松花色十回、  
 此句を期詠し給ふなり、いろくの調の中に就て、主上の御爪音珠の外にこそ  
 聞えければ、花にさへづる春の鶯、梢に吟ずる秋の蟬、夕の松風腕の水のなが  
 め、寂々風々と心もすみわたる、天津乙女くだりつべき折からとぞ、曲終て猶  
 感情ふかく龍顔わかやかなり、御心にもかやうのめづらかなるすさびは、その  
 かみにもあらしと悦の眉をひらき給ふ、(中略) 三日め十六日朝氣より空いと  
 きくもり雨にやならんといふより、はやひとつふたつこぼれおち、しめやかに  
 降り出で、檜皮の軒をつたふ玉水の音、きのよの琴のひびきをのこすかとおほ

めかれて、物しづかなり、きのよ和歌の御會折にあひて尤殊勝となん (中略)

歌寄松祝和歌 御製  
 わきてけふまつかひあれや松が枝の世々の契をかけてみせつ、

春日待みゆき衆樂第同歌寄松祝和歌  
 よろづ代の君がみゆきになれ、む緑木高き軒のたま松 關白豊臣秀吉  
 契あれや君まちえたる時の風千世をならせる庭の松が枝 右 佐 九  
 治れるときとはしるし松がえの木ずるによはふ萬代の聲 中務卿邦房親王  
 浪風もふきしづまりて松高きやまとしまねの四方の浦々 准三宮兼孝  
 相生の松のみどりもけふ更に幾千代ふべき色もみすらむ 准三宮内基  
 (中略) 四日目十七日舞御覽、一番萬歳樂、二番延喜樂、三番太平樂、四番拍鉢  
 五番陵王、六番納蘇利、七番採桑老、八番古鳥蘇、九番還城樂、十番拔頭 (中  
 略) 五日め十八日還幸なり、殿下まわり給ふ、こんく御よろこびのことゝも  
 あり、やがて又行幸御申沙汰あるべし、御あらしなどこまやかに契らせ給ひ  
 午の刻ばかりに風笠をよせさせたまひて、行幸のことく、前驅より次第く  
 杏をひき馬上の響づらをろくし、御心閑なる還行なり、云々

九月、毛利氏を諭し、其出雲、伯耆を割きて、族の吉川廣家に予へしむ。廣家は  
 元春の子、元長の弟なり。

十月、大に茗蕪を北野に張る。

十七年五月、復、金銀各三十六萬五千兩を、文武の百官に分つ。是の時、秀吉の

北野茗蕪  
 茗蕪茶會  
 十七年

威令、幾と天下に遍し。東北の豪傑、佐竹、里見、結城、那須、岩城、葦名、松前の諸族、争ひて使幣を修む。秀吉、其私闘を禁じて、之を朝覲せしむ。而して獨北條氏政は、關東八州に據り、伊達政宗は、陸奥、出羽に據りて、降るを肯せず。天子、聚樂に幸するの次月、秀吉、富田知信、津田信季を遣し、相模に起き氏政を諭さしめて曰く、「吾子、五世の勢に席り、擅に八州を有ちて朝貢を修めず不義なり。今、天子、新に立つ。天下嚮歸せざるものなし。吾子、宜しく速に入りて觀ゆべし」と。氏政の子氏直と議して、敢て堅對せず。

八月、氏政使をして、來り請はしめて曰く、「眞田昌幸、我が沼田を取る。請ふ、昌幸をして之を返さしめよ。然る後に朝せん」と。諸將皆忿りて曰く、「氏政亡狀なり。請ふ、兵を發して之を討たん」と。秀吉曰く、「未だし」と。是の年七月、復知信、信季をして、昌幸に就きて之を諭さしむ。昌幸、命を奉じて、沼田を北條氏に致す。是に於て、二使遂に小田原に往き、其入朝を趣して曰く、「朝せざれば則罰あり」と。氏政、其親族、將領と議して曰く、「我と彼と相距ること遠なり。彼れ何ぞ輒來らん。且彼れ特能く畿内西國を服するのみ。古稱す、關八州は天下に敵すべし」と。且箱根は天險なり。彼れ果して來らんか、我れ八州の勁兵

北條氏政を諭す

氏政秀吉の命に従はず

秀吉氏政を怒る

伊達政宗

秀吉怒り氏政を伐んとす

氏政に檄す  
先右府信長

を以て、諸を箱根に要せば、彼れ何ぞ能く爲さん。在昔、平氏大軍を發し、來りて源氏を攻む。富士川に至りて、鶴嶋の起つを聞き、遂に恇悸して潰ゆ。關白も亦、此の如きのみ」と。乃、使者を禮せず。使者潛に其言を聞き、歸りて秀吉に報す。秀吉怒りて曰く、「氏政、吾を以て平維盛に比するか。吾れ將に吾が披備を之に示さんとす」と。德川公、數、氏政に入朝を勸むれども肯せず。是の歲、伊達政宗、葦名城を滅して、會津の四郡を併せ、二階堂氏を滅し、仙道の七郡を併す。佐竹、岩城の諸族、これを討ちて、みな敗る。秀吉、使をして政宗を責讓せしめ、其入朝を命ず。政宗も亦肯せず。

十月、眞田昌幸、來り告げて曰く、「沼田に那胡桃城あり。臣が墳墓の地たり。北條氏の將、沼田を守る者、遂に之を取らんと欲す。臣曰く、『殿下命じて沼田を致さしむれども、未だ那胡桃を致すを聞かざるなり』と。彼れ聽かずして遂に之を攻取す。敢て告ぐ」と。秀吉、大に怒り、遂に奏して氏政を討たんと請ふ。秀吉の使者石卷康昌、京師に在り。悞れて之を陳謝す。秀吉聽かず。康昌を相模に押送し、書を氏政に遺りて、之と絶ちて曰く、「秀吉、微賤より起り、先右府の爲に拔擢せられ、攻城野戰して、功を弓馬の間に立つ。既に變故に遇ひ、兵を提げて

東上し、逆臣を誅夷し、以て右府の恩眷に答ふ。遂に太政の任を忝くす。天子を佐けて、以て亂逆を定む。叛く者は伐ち、服する者は撫づ。七道の豪傑、我が歴する所に従はざる者なし。汝氏政、險を負み力を恃みて、敢て朝貢を修めず。狡詐貪婪にして、天子の命を輕蔑す。夫れ天地の際、一も詔勅に違ふ者ありて、誅討を漏るゝは、秀吉、之を取づ。乃の城地を修め、乃の甲兵を勵ませよ。明年、吾れ將に王節を操りて諸軍を率ゐ、以て汝氏政の罪を正さんとす」と。書、相模に至る。氏政以て意と爲さずして曰く、「役れ奔聲を以て、我を慮さんと欲す。彼れ誠に来らんか、大舉せば則食少からん。小舉せば則力少からん。是れ與し易きのみ」と。秀吉、遂に駿河、越後、以西の四十五國に令して、兵を發し、明年三月を以て、京師に會せしむ。其京師に遠き者は、便道より直に關東に赴かしむ。長束正家に命じて、粟二十萬石を運びて駿河に至らしむ。又金一萬枚を出して、海道に諸國に驅せしむ。時に海路久しく絶え、民みな風濤の險を憚れて曰く、「海龍王、崇を爲さん」と。秀吉笑ひて曰く、「吾れ王命を受けて不廷を討つに何物の龍王ぞ、敢て我を沮むを得んや」と。檣を作りて之を援け、浦に投じて進む。水軍の三將をして、長曾我部元親と、糧船を護りて、以て東せしむ。

【王節】節刀

氏政意とせず

秀吉迷信を破る

武將感狀紀

秀吉北條氏政を伐つ時馬船を小田原にまはさるるに遠州の御前崎は昔より馬の事は昔ふに及ばず馬道具をも船にのせず、若し誤りて馬の皮にてしたる器さへ船中にあるれば必ず破損する事度々なり、されば謹みて口に馬と云ふ事をも忌と音ひ傳へ候と申者あり、秀吉自筆の牒を書きて船頭に渡し、是を龍宮に送せば難あるべからずとて舟ども乗り出し彼所に至れば俄に風雨雷電して日中忽暗となる、右の牒を海に投入ければ風雨しづまりて船恙なし、其の狀に云く今度北條を誅伐するに就いて予船をして相州小田原に赴かしむ無難にこれを過すべきものなり、龍宮殿太閤と書れたり、是は偶然なるべけれど此類の事凡民の惑より言ひ傳へて其理なき者多し、秀吉學問の力なしといへども、生質明敏なる故にこれを識破す、然れども愚昧の船頭ども聽に慣ひて大に恐るべき事を慮り其心を安せんが爲なり、又災映は氣を以つてこれを迎へて自ら招くの理を見る者歟。

十二月、徳川公、來りて約束を乞ふ。氏直、公に因りて罪を謝し、入朝せんと請ふ。秀吉許さず。是に於て、徳川公以下の將帥を會す。關東の地圖を開きて、指畫部置す。眞田昌幸、素より徳川公と惡し。時に下座に在りて圖を窺ふことを得ず。秀吉呼びて、之を前めて曰く、「吾れ家康を以て、海道先鋒となし、汝を以て山道の先鋒と爲す」と。昌幸、感喜す。退きて人に謂て曰く、「殿下の一言を得



十八年  
秀忠

たるは、百萬の封を得るに多る」と。  
十八年正月、徳川公、其嗣子を送り、質となす。秀吉之に姓を羽柴氏、名を秀忠と賜ひ、之を遣歸して、曰く、「卿、其氏直と姻あるを以てせるか。吾れ何ぞ卿を疑はんや」と。徳川公、乃海道の諸城を空しくし、道を除して供帳して以て待つ。二月、秀吉、毛利輝元を召して、京師を守らしめ、弟秀長に大阪を守らしめ、徳川、北畠、前田、上杉の諸將をして、其兵を以て先發せしむ。

【陛下】關の階  
京師を發して  
小田原に向ふ

三月朔、自、我服して、入朝し、節刀を陛下に受け、拜辭して起ち、關を出で馬に上り、騎卒十七萬を率ゐて東す。部伍清肅し、鎧仗鮮明なり。士民をして之を縱觀せしむ。氏政、盡く八州の城主を召して、小田原に集め、親信の將帥を遣して、箱根の諸城を拒ぎ、兵數萬を以て其後を守らしむ。二十七日、秀吉、沼津に至る。明日、自山に上り、敵の城寨を候ひ視て、即夜、令を下して、秀次に五萬を以て山中を攻め、信雄に三萬を以て葦山を攻め、而して徳川公に二萬五千を以て、直に箱根を踰えしむ。明日、諸將、蓐食して並に發す。秀次、中村一氏を以て先鋒となし、陣を徙して城に近づかしむ。城上の銃丸雨の如く注ぐ。一柳直末、之に死す。一氏衆を勵まし、攻めて其郭を破り、敵將間宮好高を斬り、進

みて内城に薄る。其騎士渡部了、堞を攀ちて上る。秀次、乃軍を靡きて齊しく登り、將城北條氏勝を走らす。信雄も亦葦山の郭を破る。徳川公、三城を陥れ、酒匂に至る。成兵皆潰ゆ。

四月、秀吉、將軍を率ゐて、小田原に抵り。牙を石垣山に建て、夜、萬卒に令して、城を築かしめ、紙と壁に糊す。之を望むに聖の如し。城兵驚き、以て神となす。秀吉、徳川公を携へて城樓に上り、下し視て曰く、「關八州は我が目中に在り日ならずして取りて、以て卿に予へんのみ」と。徳川公、拜して曰く、「幸甚」と。秀吉、其耳に附して語りて曰く、「卿も亦小田原に居るか」と。曰く、「然り」と。秀吉曰く、「不可なり。我れ嘗て地圖を見るに、此より遙に東、二十里可に地あり江戸と云ふ。河海を襟帶し、地潤く、土肥えたり。卿宜しく此に居るべし」と。徳川公曰く、「謹みて教を奉せん」と。是に於て、諸軍に令して、城を圍ましむること數重なり。水軍の將士、又沿海の諸城を破りて來り會す。上杉勝景、前田利家、北陸の兵三萬を率ゐ、眞田昌幸を以て先鋒とし、上野に入る。大導師政繁、松枝を以て降り、導きて武藏に入り、七城を下し、鉢形を攻む。秀吉、淺野彈正少彌、木村常陸介を遣して、之を助けしむ。二將、別に武藏を徇へて岩築を攻む

江戸

疏書

長圍を築きて城を攻む

淺野氏の嗣子幸長、左京大夫と稱す。甫めて十五なり。先登して遂に之を抜く。二將、遂に上野を徇へ、二總、安房に至る。一月に六十餘城を下す。而して小田原、固く守りて下らず。流言あり。曰く、「徳川、織田、歎を城中に通ず」と。衆情疑懼す。秀吉、即、近臣數人を従へ、信雄と俱に徳川氏の營に飲む。明日、徳川公と具に、織田氏の營に飲む。衆の疑即釋く。遂に諸軍に令して戰を休めて、長圍を築き、更番遊息し、海道の伎樂を徴し、酒を置きて高會す。秀吉、徳川公以下と、歌詞を造りて之を被ふ。謹呼、晝夜を連れ、以て據久の意を示す。城兵大に困しむ。徳川公初め、大衆久しく屯し、穀價必騰るを度り、私に其吏に命じて多く糧餉を蓄ふ。已にして長束正家、漕轉を掌り米粟狼戾す。乃、秀吉の善く人を用ゐるに服するなり。是の時に當りて、豊臣氏の軍、城を環りて陣する者、幾三十萬。山陵林麓兵に非る者莫し。關以東風を望みて降り附く。相馬、秋田、南部津輕の諸族、或は謁を軍門に執り、或は使をして、弊を納れしめ、項背相望む伊達政宗、人をして形勢を視はしむ。還り報す。則大に懼れ、乃背て使弊を修め徳川氏に就きて降を乞ふ。徳川公、使者を戒めて曰く、「二亟に來り謁せざる可からず」と。

政宗來降る

政宗の辨疑

六月、政宗、百餘騎と下野に入る。路塞りて通ることを得ず。還りて越後、信濃に由り、間行して箱根に至り、秀吉に謁せんと乞ふ。秀吉、謁者に問ひて曰く、「政宗の狀貌如何」と。曰く、「齡二十歳可、眇にして髮を被り、奇偉なる甚し」と。秀吉、輒く見ゆるを許さず、人をして之を詰責せしめて曰く、「吾れ王命を受け、天下を經略す。遐方絶域の人と雖、來り歸せざる莫し。汝、東北に屈強じ、兵數萬を擁し、未だ嘗て一介の使を發せず。葦名義廣、心を王室に歸す。而るに汝擅に之を攻む。是何の故ぞ」と。政宗答へて曰く、「義廣、臣の叛將を納れ、佐竹、岩城に結びて、以て臣を滅さんと圖る。臣、二本松氏を討ちて、以て父の仇を報せんと欲するに、又義廣の爲に拒がる。故に臣、日夜攻撃して、終に之に克つことを得たり。臣、敵中に在りて、四方の事を知らず。殿下の東伐に及びて、然して後、天下に歸する所あるを知るなり。是を以て來り謁す」と。秀吉、又之に言はしめて曰く、「汝の陳する所、果して偽なくば、則盡く犯したる所の會津、仙道の地を獻せよ。不らずば、則亟に汝の國に歸り、徐に守備を修めよ、吾れ北條氏を討滅し、然る後、汝を我馬の間に見ん」と。政宗曰く、「臣が生死、唯殿下の令のまゝなり。況や邑土をや」と。其侵地を致して、乃入りて見ゆ。秀吉便服し

政宗の勝を挫

で坐し、之を慰勞して問ひて曰く、「卿陸奥に在りて、幾戦せしぞ」と。曰く、「三十餘戦」と。秀吉曰く、「是れ村老の小闘のみ。意ふに未だ大兵を部勒する法を知らざるらん」と。因りて起ちて政宗を引き、出で、廣野に下陣す。秀吉、前に在りて指示して曰く、「彼は畿内の軍なり。彼は阪以西の軍なり。彼は海道の軍なり」と。政宗、唯々、敢て仰ぎ視る莫し。既に罷めて還歸す。諸將、交之を留めて遣らざるを勸む。曰く、「之を遣るは、是れ猶虎を野に縱つが如きのみ」と。秀吉晒ひて曰く、「吾れ兵を用ひずして、五十四郡を取る。汝が輩の知る所に非ず」と。政宗退き、人に附て曰く、「關白は天威なり」と。遂に去りて國に往く。石田三成、大谷吉隆、長束正家等、是に於て、館林を攻め降し、遂に忍城を攻む。城將成田長康、小田原に在り。其兵、留守して下らず。秀吉、彈正少弼父子をして、助は攻めしめて、終に之を降す。景勝、利家、亦鉢形以下の諸城を降す。降附五萬人を並せて來り謁す。秀吉、甚賞せず。三人頗る嘖らす。秀吉、近臣に問て曰く、「三人功無きに非ず。然れども降れば輒之を受く、勳勞を稱するに足らず。或は降し、或は屠り、恩威並行はれ、然る後賞す可きのみ」と。二人之を聞きて復發し、八玉子の城を屠り、還りて首級を效す。秀吉、乃之を賞す。是に於て、八州の諸

長勝利家降り來る

關白は天威なり

將士逃れ降る者相踵く

關白は天威なり

氏直出で、降る

氏直自盡す

城、大半皆破る。然れども其將士、小田原城内に在り。我が兵、其父母妻子を虜にして之を視す。將士逃れ降ること相踵く、我が侍史山中某、成田長康と善し、秀吉、命じて陰に書を以て之を招かしむ。長康、乃款を送る。秀吉、徳川公をして、其降書を以て、氏直に遺らしめて曰く、「子の將帥みな貳心あり。事已に危迫なり子、盍ぞ早く自計を爲さる」と。氏直、氏政と議して、長康を召す。至らず。乃、柵を長康の營に環らし、兵を置きて監護す。是より城中、人々相疑ふ。秀吉、黒田孝高、羽柴勝雅を遣し、城に入りて氏政父子を見て、説くに禍福を以てせしむ。氏政肯せず。

七月、氏直、遂に出で、徳川氏の營に就きて降を乞ふ。徳川氏、嫌を避け敢て通せず。之をして勝雅に因らしむ。勝雅以て告ぐ。秀吉、之を許す。氏政をして城を致して出でしむ。因りて諸將に謂て曰く、「吾が此行、不廷の臣を誅せんと欲す。今にして之を釋す。是れ信を天下に失ふなり。吾れ民政を誅して、其餘を釋さんと欲す」と。諸將曰く、「善し」と。乃、使者四輩を遣し、氏政の舎に就かしめて死を賜ふ。秀吉其首を覽て罵りて曰く、「汝、王命を輕蔑し、敢て我を笑侮す。今如何ぞ」と。石田三成をして、之を京師に齎しめ、一條辰橋に梟す。氏規、小田

原既に下ると聞き、又葦山を以て降る。乃氏直、氏規等、三十人を高野に縦ち、俸百口を給ひ、尋ぎて萬口を給ふ。乃、北條氏の故地八國を擧げて、以て徳川氏に賜ひ、別に十萬石を以て、其湯沐の邑と爲す。徳川氏の故地五國を擧げて、以て信雄に賜ふ。信雄肯て受けず。秀吉怒りて曰く、「卿が才民の上と爲る可らず。吾れ特に先右府の子を以て、厚く之を封せんと欲す。卿、乃之を薄しとするか」と。乃之を秋田に放ち、駿河を中村一氏に、甲斐を加藤光康に尾張、及び北伊勢の五郡を秀次に、三河を池田輝政、田中吉政に、遠江を堀尾吉晴、山内一豊、有馬豊氏に、信濃を森忠政、石川數正、仙石秀久に賜ふ。關東諸豪の功罪を論じ、之を黜陟す。大導師政繁を執へ、之を詰めて曰く、「汝北條氏の舊將を以て、首として我に降る。我の功臣は、乃北條氏の叛臣なり。叛臣は天下の罪人なり。吾れ私に之を釋す能はず」と。乃之を櫻田に誅す。

功罪を論ず

遂に兵を引きて東下し、宇都宮に至る。伊達政宗、南部信直等皆迎へ謁す。八月、白河に至る。淺野彈正少將、大谷吉隆、石田三成に命じて、陸奥、出羽の地を檢せしむ。諸謀臣に問ひて曰く、「吾れ一將を選びて、東北を鎮撫せしめんと欲す。卿等みな見る所を陳べよ」と。衆の對ふる所各異なり。秀吉曰く、「みな非

藩生氏郷

なり。藩生氏郷に非ずば可なる者なし」と。氏郷に賜ふに、會津、仙道十一郡を以てす。葛西、大崎を以て、木村秀俊に賜ふ。政宗には故土に因りて、米澤、長井を賜ふ。氏郷に謂て曰く、「我が爲に東門を守れ」と。因りて方略を指授す。徳川、前田、上杉氏を戒めて、之が應援を爲さしむ。終に諸軍を整へ凱旋して岡崎に至る。吉川廣家、命を受けて之を守る。則之を迎へて饗す。明日、鞍馬三百餘疋を以て秀吉に送る。秀吉、黒馬を擇びて之に騎り、其徒御を屏く。獨、吉川氏の卒栗榎武格といふ者、之が圍と爲り、行きて尾張に入る。秀吉、路傍の聚落を指し、武格に謂て曰く、「此を中邑と名づく。吾が生長せし所なり。吾れ一たび往きて觀んと欲す。汝、能く我に従ふか」と。武格曰く、「謹諾」と。是に於て、秀吉、騎して中邑に入り、武格を圍首に留めて入り、街巷を周馳して出づ。遂に邑中の父老を召し。笑ひて曰く、「吾は藤吉なり」と。父老みな惶恐俯伏す。秀吉曰く、「吾が少かりし時に比すれば、邑閭甚整ひ、戸口も亦滋息するに似たり」と。因りて之に酒及び物を賜ひ、與に舊故を語りて去る。

秀吉中邑に入る

東國定まる

九月、京師に復命す。是に於て、東國悉く定る。而れども伊達政宗心に缺望を懷き、陰に土兵を誘ひ、亂を作す。少將豫陸奥の亂るゝを度り、十餘砦を造り兵

出兵起る

を留めて之を守らしめて西す。大谷吉隆、猶留り、田を検すること甚急なり。十月、土兵四より起る。葛西、大崎も亦、秀俊の政に苦しみ、叛きて其城を攻む。秀俊、走りて佐沼を保ち、急を氏郷に告ぐ。氏郷、即、發す。雪に逢ひ、檢行して井繩に至り、政宗の異心あるを察し、人を遣して促して師に會せしむ。政宗、色むことを得ずして、出で、吉岡に次す。氏郷、身其陣に往きて、事を面議す。政宗、大に驚く。氏郷、賊の二壘を破り、勝に乗じて進む。政宗、疾と稱して從はず。氏郷、行陣を布きて之に備へ、進みて名生の壘を破る。政宗、追躡し。其陣の堅きを視て、敢て擊たず。氏郷、乃秀俊を迎へ、之を名生に置く。政宗、數他無きを謝す。氏郷功を立て、自效さしむ。乃攻めて宮崎城を下す。賊黨悉く潰ゆ。少弼、時に駿河に至り、亂を聞きて即還る。十二月、氏郷歸らんと欲す。而して政宗の變あるを慮る。少弼、乃政宗をして、十九年正月、氏郷、其質を取りて會津に還る。秀吉、警報を得て、秀次を遣して赴き討たしめ、石田三成をして、徳川公を促して師に會せしむ。氏郷、已に亂を定むと聞き、則途より還る。

十九年

政宗を誅せん

閏月、氏郷、京師に來り、狀を上る。秀吉、木村氏の封を奪ひ、之を氏郷に予ふ。氏郷、又政宗が賊に通ずる手書を獻す。秀吉怒り、便を馳せて政宗を召す。政宗即發す。二月、至る。曰く、「吾れ自誅戮を分とするなり」と。貼金の礫柱を作り、人をしめて掲げて前行せしむ。詰問するに及びて、陳謝して甚辨す。乃其手書を示す。政宗伴り愕きて曰く、「其書甚肖たり。特華押徹く異なる者あり」と。之を驗するに果して然り。秀吉、即之を釋す。是より先、南部氏の族九戸政實叛く。氏郷、少弼を攻めて之を下す。是の歳五月、復叛きて、福岡の城に據る。葛西、莊内之に應ず。秀吉、秀次に命じ、赴き討たしむ。曰く、「必これに勦せ。復萌すこと莫らしめま」と。徳川公に命じ、之を助けしめて曰く、「卿に東北三道の軍務を掌らしむ。其便宜、軍に従へ」と。乃奏して、政宗を以て四位侍從となし、氏郷と俱に先鋒たらしむ。少弼、及び堀尾吉晴をして、其軍を監せしむ。因りて密に氏郷を諭して曰く、「吾政宗の反計を知れども、願ふに彼の膽略愛すべし。故に釋して問はず。以て反側を安す。事平かば、則其地を奪ひ、之を汝に予へんのみ」と。八月、秀次、陸奥に入り、三迫に陣す。氏郷、政宗、攻めて五城を下す。上杉氏、

秀次三階に陣す

福岡を圍みて  
政實以下を殺す

命を奉じて師に會し、撃ちて莊内を平ぐ。諸將、遂に福岡を圍む。政實以下の魁首三十人を誘ひ降し、之を三迫に効す。秀次斬りて以て徇へ、其餘黨を焚殺す。秀吉の命を以て、政宗を葛西、大崎に徙し、其地を以て氏郷に加賜し、并せて百萬石を食ましむ。遂に國內を巡視し、士民を按據せしめ、東邊の諸侯に課して、城を大崎に築きて以て、政宗を置き、然る後歸る。是の歳四月、大納言秀長、卒す。秀次の弟秀俊を以て嗣と爲す。其封を襲がしむ。十一月、秀吉、大に三河に獵す。初め秀吉、關西を定め、松下之綱を召し、邑を丹後に賜ひ、關東を定むるに及びて、更に遠江、伊勢の一萬石を賜ふ。曰く「攘みし金を償ふなり」と。

秀長卒す

### 邦文日本外史卷之十五終

## 邦文日本外史卷之十六

### 德川氏前記

#### 豊臣氏中

秀吉の大志

秀吉の關東に在るや、鎌倉に遊びて、源賴朝の塑像を觀、進みて其背を撫でて曰く「若は我が友なり。徒手にて天下を取りしは、唯吾と若と有るのみ。然れども若は名族を承藉す。吾が人奴より起れるに如かざるなり。吾れ遂に地を略して明に至らんと欲す。若以て何如と爲す」と。

韓明と我國との關係

初め秀吉、織田氏の爲に山陽を徇へ、韓及び明を攻めんことを請ふ。後常に其志を成さんことを思ふ。明主、嘗て足利氏と好を修むり而して韓、其間に兩屬し、常に朝貢を我に奉ず。足利氏の衰ふるに及びて、我が西南の海盜、數明の境を侵す。明、韓、みな我と絶つ。而れども海賈の互市は絶えず。我が對馬島は韓を距ること甚遠し。島主宗氏、世吏を韓の釜山浦に置く。豊臣氏の時に至りて、明の民或は來り投ずる者あり。秀吉、明主朱翊鈞が政を失ひ、武備具らざるを聞き、益

秀吉韓明を征せんとして  
極東

之を窺はんと思ふ。其畿内を定むるに及びて、福康廣、嘗て韓事を諳するを以て擢て、使者と爲し、朝貢を韓に徴す。要領を得ずして返る。秀吉、其韓と私あるかを疑ひ、之を族誅す。

宗義智

西海を定むるに及び、宗義智、欸を送る。秀吉、命じて使事を遣らしむ。將に韓東を伐たんとして、遂に義智と僧玄蘇とを遣して韓に往かしむ。會琉球入貢す。

琉球王明に告

秀吉、其國に囑して、明に通せんことを求む。曰く、「明、我が言を聽かずば、我れ當に兵を發して之を伐つべし」と。琉球王尙寧、之を明に告ぐ。明聽かず。義智韓に至る。韓王李昫、乃其大臣黃允吉、金誠二を以て、隨ひて入貢せしむ。秀吉、

秀吉韓國に書を送る

書辭

既に韓東を討ちて後、韓の使者を見、乃史に命じて書を作り以て之に答へしめ曰く、「日本豐臣秀吉、謹みて朝鮮國王足下に答ふ。善が邦の諸道、久しく分離に屬し、綱紀を廢亂し、帝命を阻格す。秀吉、之が爲に憤激し、堅を蒙り銳を執り、西討東伐、數年の間を以て六十餘國を定む。秀吉は鄙人なり。然れども其胎に在るに當りて、母、日の懷に入るを夢みる。占者の曰く、「日光の臨む所、透徹せざる莫し。壯歲必武を八表に耀さん」と。是の故に、戰へば必勝ち、攻むれば必取る。今海内既に定り、民富み財足る。帝京の盛なる、前古に比なし。夫れ人の世

平調信等韓に使す

天正十九年

に居ること、古より百歳に滿たず。安を能く樂みとして久しく此に在らんや。吾れ道を貴國に假り、山海を超越し、直に明に入り、其四百州をして、盡く我が俗に化せしめ、以て王政を億萬斯年に施さんと欲す。是れ秀吉の宿志なり。凡海外諸藩の後れ至る者は、皆釋さるる所なり。貴國、先使幣を修む。帝甚之を嘉す。秀吉、明に入るの日、其士卒を率ゐ軍營に會し、以て我が爲に前導せよ」と。因りて平調信、僧玄蘇を遣し、典借にせしむ。韓王、書を得て疑懼す。誠一、以て虛喝と爲す。王、之をして私に二人を饜し、其情實を探らしむ。調信曰く、「我が主、明に通せんを欲するに、明、答禮せず。故に伐たんと欲するのみ。貴國、宥を間に居て之を和解せざる」と。誠一依違す。玄蘇聲を勵し、言て曰く、「今日の議、首鼠兩端するを得ず。和を講せんと欲せざるは、乃戰はんと欲するのみ」と。因りて辭し訣れて返る。韓、始めて規規、稍邊備を修む。明も亦之を聞きて、海防を申嚴にす。天正十九年夏、秀吉、復義智を遣して船を責む。釜山に在ること旬餘にして報を得ず。怒りて返る。秀吉の志益決す。秀吉、初め子なし。是より先、姬人淺井氏、男鶴松を生む。秀吉、絶之を愛す。是の歳、鶴松夭す。乃悲哀すること累日。心忽々として樂まず。因りて屢出遊し

秀吉征韓の意を決す

以て自遣る。一日清水寺の閣に登りて西望し、從者に謂て曰く、「大丈夫、當に武を萬里の外に用ゐるべし。何ぞ自相戀を爲さん」と。乃返り、大に諸將帥を會し、之に謂て曰く、「吾れ諸君の力を藉りて海内を平定す。亦以て休ふ可し。特諸醜夷の王化を阻む者あり。吾れ深く之を羞づ。吾が邦治を以て内府に委ねて、自、將として朝鮮に入り、其兵を以て先鋒と爲し、以て明に入らんと欲す。彼れ我が命を拒まば、則擊ちて之を滅し、遂に遼東より直に北京を襲ひ、其國を奄有して、多く土壤を割きて、諸君に予へ、諸功臣をして皆其望に厭かしめん。亦快ならずや。我れ之を籌ること已に熟す。事甚難きに非ず。諸君、其れ能く我が爲に力を出せよ」と。諸將帥、聘貽相視て、敢て對ふる者なし。浮田秀家進みて曰く、「殿下、此無前の事を擧ぐ。誰か努力せざらんや」と。衆敢て異議する者莫し。内府とは、秀次を謂ふなり。秀次、時に内大臣たり。正二位に叙せらる。是に於て、秀吉、奏請して、諸將を遣して國に之き、各々兵食を具へしむ。九鬼嘉隆に命じ大艦數千艘を造らしむ。大廳、秀吉の海外に赴かんとするを聞き、憂恐して寢食を廢するに至る。乃議して秀家をして代りて往かしむ。而して自出で、肥前に陣し、以て策應を爲す。乃大に那古耶に城き、建て、行營と爲す。

秀次 兵食を具ふ

征韓の部署を定む

十二月、朝鮮の地圖を諸將に分ち、其嚮ふ所を部署す。西南四道の兵を分ちて八軍と爲し、以て韓の八道に嚮はしむ。主計頭加藤清正、第一軍に將たり。攝津守小西行長、第二軍に將たり。鍋島直茂、相良頼定は、清正に屬し、宗義智、松浦鎮信、有馬義純は、行長に屬し、兩軍迭に先鋒たり。大友義統、黒田長政、第三軍に將たり。島津義弘、毛利高政、伊東祐兵、第四軍に將たり。福島正則、長曾我部元親、第五軍に將たり。峰須賀家政、生駒親正、第六軍に將たり。小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂、第七軍に將たり。毛利輝元、第八軍に將たり。別に水軍を置きて、九鬼嘉隆、脇坂宗治、加藤嘉朋、來島康親を以て之に將とし、秀俊の將藤堂高虎、大和の軍を率ゐてこれに屬す。水陸の九軍、總べて十五萬人なり。織田秀信、中川秀政、石田三成、増田長盛、大谷吉隆、糟谷武則、片桐且元は、淺野左京大夫と、遊軍六萬に將として、應援に備ふ。而して秀吉、自、秀俊、及び徳川公、前田利家、蒲生氏郷、上杉景勝、結城秀康、最上義光、佐竹義宣、伊達政宗、南部信直等、畿内、東北三道の將士十萬を以て自衛る。明年三月を以て盡く行營に會せしむ。秀吉、乃上書して骸骨を乞ひ、關白職を秀次に譲り、自太閤と稱す。是に於て、宗義智は釜山の吏卒を戒め、稍々引き返らしむ。韓人來り

水陸十五萬人

秀吉關白職を秀次に譲る



で其府を窺ふに、固然として人なし。乃驚き慙み、守備を修むること益急なり。

太閤記 (諸大將軍を率めて筑紫に赴く)

天正二十年、年號改りて文祿元年と成る。兼て太閤御下知の如く、正月月中旬、畿國の軍勢京都に集り、秀吉の命を受け、筑紫瀧まで出張せり。先陣の一隊は小西播磨守行長、宗對馬守義智、松浦法印鐵信、其勢部で一萬八千七百餘人、則ち之を二列とす。又一隊の先鋒は加藤主計頭清正、鍋島加賀守直茂、其勢部せて二萬八千八百餘人、是又一列とす。小西行長、加藤清正、圓を取つて日を隔て、先陣に進むべしとなり。黒田甲斐守長政、大友豊後守義統、島津兵庫頭義弘、二萬五千人、福島左衛門大夫正則、其外四國の軍兵を合せて一萬三千五百人、難須賀阿波守家正、七千二百人、長曾我部土佐守元親、生駒備前守元、九千二百人、小早川左衛門督隆景、立花左近將監宗茂、一萬五千七百餘人、毛利右馬頭輝元、三萬人、存陸地を行くの軍勢都合十三萬餘人なり。海路の兵は、九萬六千餘人、藤堂依波守直虎、藤坂中務少輔安治、加藤左馬助嘉明等、其勢部合九千餘人、惣軍十四萬餘人、皆朝鮮へ渡海すべき命令なり。名護屋在陣の人々には、大和中納言秀俊卿、前田宰相利家卿、織田内大臣信雄卿、上杉輝正少將景勝、備前飛騨守氏輝、佐竹右京大夫義宣、伊達陸奥守政宗、最上藤光、森有栖大夫忠政、惟住五郎左衛門長重、木下義秋守勝俊等を始めとして、其勢部十餘人、太閤、又別に軍兵六萬人を集め給ひ、遊軍として是も名護屋へ遣し給ふ。是は朝鮮渡海の軍兵十四萬人、賊に少きにあらずといへども、大明より多勢にて朝鮮を擧げ、味方難儀なるべしとて、其後に備へ給ふ、これ等の大軍悉く

都を立ち次第を守り、乘樂より戻橋を大宮へ押退り、名護屋をさして行く。鶴に家々の旗、扇に翻り、大筒小筒の鳥銃、弓、鎧、長柄、空にきらめき大將はいふに及ばず、物頭、旗頭、騎馬の武者、歩卒の銘銘、思々に絡羅を盡し、武器の色、群に照り輝き、けふを晴と出立ちけるは春秋の花紅葉を一時に咲せし如く、見映の老若街に満ち、あな夥しのみまのやと稱讃せぬ者もなし。(中略) 正月中旬、先陣都を進發し、同廿八九日の頃まで引もきらず出立せる軍勢凡四十三萬餘人、夥しといはん方こそなかりけれ。

文祿元年  
先右府信長  
加藤清正  
小西行長

交祿元年正月、秀吉、加藤清正を召して、之に記帳を賜ひて曰く、「吾れ毛利氏を伐つ時、先右府より賜はりし所なり」と。小西行長を召して、之に名馬を賜ひて曰く、「以て驍勇を驅突せよ」と。清正、素より行長を鄙みて相善からず。是に於て之に謂て曰く、「予は賜職を用ゐて號と爲す。子、號は何を用ゐるや」と。行長、對へて曰く、「我れ藥商より起る。當に藥囊を用ゐるべきのみ」と。是より益相隨す。

三月二十八日、秀吉、京師を發す。或人曰く、「盍ぞ漢文を善くする者を以て從へざる」と。秀吉、笑ひて曰く、「吾が此行は將に彼をして、我が文を用ゐしめんのみ」と。四月、安藝に至り、嚴島祠に謁し、百錢を投じて祈りて曰く、「吾れ明

秀吉進發

那古耶陣  
五十萬人

に勝たば、面する者多かれ」と。乃投す。皆面す。衆、大に喜ぶ。蓋し豫、兩鏡を糊合せしなり。遂に那古耶に至る。諸軍の會する者、凡五十萬人。糧食之に稱ふ。

我軍釜山に達

是に於て、先水陸の九軍を遣し、大砲を發し、関して帆を揚げ、海を蔽ひて渡る。風本に至り、風に阻てらるゝこと十日。風稍定る。行長と義智と、素より海路を諳す。潜に其軍を抜き、衆に告げずして先發し、豊崎に至る。平明、諸將乃之を覺る。清正、怒りて發す。風益甚しく、進むを得ず。行長、舵師を促して豊崎を發し、濤を冒して進み、十三日、釜山に達す。釜山の守將鄭撥、出で獵す。警を聞きて馳せ返る。行長、隨ひて其城を攻め、立所に之を抜き、鄭撥を生擒し、遂に兵を分ちて慶尙道を徇へ、西生、多大の二浦を陥る、多大の守將尹興信を斬る。其捕虜に問ふに要害の城寨を以てす。曰く、「東北に東萊あり。此を距ること三十里」と。行長、其衆に謂て曰く、「諸君、戦ひ疲る。當に休ふべし。然れども東萊をして、備へを爲さしめば、吾が力下す能はじ。而して諸將隨ひ至らば、則功を人に奪はれん。宜しく急に擊ちて、之を取るべし」と。衆、奮ひて之に従ふ。乃進みて東萊を攻む。半日にして之を抜く。斬首千餘級なり。守將宋象賢、屈せ

東萊を抜く

清正釜山に至

ずして死す。行長收めて之を葬り、進みて梁山を陥れ、鶴院に至る。韓兵、險に據りてこれを拒ぐ。我が兵、山を攀り廻りて其背に出づ。韓兵顧て潰ゆ。韓の巡察使金暉、東萊の急を聞き、晋州より來り援へども及ばず。乃諸郡縣に諭して、我が兵を避けしむ。

慶州

清正、行長に後ること、三日にして釜山に至る。行長已に前進すと聞き、切齒して曰く、「悔ゆるは、賢子に先だゝる。吾れ豈其跡を踐まんや」と。乃轉じて別路を取り、火を慶州に縱ち、其守將を走らす。斬首千五百級。轉闘して進む。向ふ所皆靡く。秀家、行長の深く入るを聞き、其將佐に謂て曰く、「彼れ我が家より身を起す。吾れ功を争ひて援けず。彼をして敵に死せしめば、獨大間寄任の意を負かさらんや」と乃。次を踰えて船を發す。八軍相繼ぎて陸に上る。韓の諸道競ひて警を國都に報ず。

全軍上陸

韓王、季鎰、申砦に命じて、大將と爲し、金誠一をして慶尙の右道を距ぎ、金功をして慶尙の左道を距がしむ。行長方に金海を圍む。黒田長政、援け至る。禾を刈り塹を填め、以て之を陥れ、兵を引ききて左右の間に出で、其應援を絶ち、進み、尙州を陥る。鎰、已に州城の北に至り、城中火起るを覩て、騎を遣し來り候

朝鮮征伐地圖



忠州に行長清正と會す  
清正、行長中惡し

はしむ。行長、之を望み視て曰く、「我れ且に其膽を奪はん」と。潜に銃卒をして橋下に伏せしめ、之を銃して馬より墮す。鎧の軍動く。行長、大衆を以て、出で二奇兵を張りて、之を劫す。鎧、駭き去り、申砦に忠州に歸す。砦、忠清道の兵八千を收め、鳥嶺を守らんと欲す。尙州陥ると聞きて、敢て進まず。行長、進みて鳥嶺に至り、其險扼を視、輕卒をして先行き、周く山谷を踐ましむるに敵なし。笑ひて曰く、「朝鮮の兵、我を此に要せず。吾れ其能く爲す莫きを知るなり」と。乃嶺を踰えて丹月驛に至り、兵を分ちて二と爲し、申砦を彈琴臺下に撃ちて之を斬り、遂に忠州を取りて、清正と會す。諸將皆至る。乃城外に相見て。進みて其京畿を取らんことを議す。清正曰く、「攝津守功多し。國都を攻むるに至りては、先鋒は當に僕に屬せらるべし」と。行長曰く、「吾れ子と並に約束を受く。子何ぞ擅に之を更ふるや」と。對へて曰く、「子の告げずして發するも亦、約束に出でんか」と。二人忿りて鬪はんと欲す。諸將之を解きて曰く、「大敵前に在り。何ぞ私に鬪を爲す」と。鍋島直茂曰く、「太閤、二公をして迭に先鋒を爲さしむ。今盍ぞ道を分ちて往かざる。聞く、『道二あり。南よりする者は遠く、東よりする者は近し』と。近き者は漢江の險あり。唯二公の擇ぶ所のまゝ」と。清正曰く、「吾れ寧險に

韓王都城を去る

して近き者を取らん」と。議乃定る。行長、間に人をして先馳せて漢江に之き、其南岸の船を奪はしむ。清正、遂に發す。韓使李應舜に途に遇ひて之を捕ふ。初め行長、蔚山の守將李彦誠を獲たり。書を韓王に送りて之を招き降さんとす。彦誠をして齎し去らしむ。彦誠敢て白さず。尙州を取るに及びて。乃應舜を獲たり。之に太閤の券書を予へ、返りて彦誠の報を責めしめ、且李德馨を召す。德馨は嘗て我が使人に接せし者なり。韓王乃德馨を遣し降を乞ふ。途に忠州陥ると聞き、應舜をして先往きて之を誦はしむ。乃清正に捕へられ、遂に誅せらる。德馨走り去る。韓已に李鎰の敗を聞き、大に怖る。而れども猶申砲を屬望す。晦日、騎あり。馳せて都門に入る。民迎へ問ふ。對へて曰く、「申の總兵死せり。關白の軍、將に來らんとす」と。都城大に擾る。王、世子と夜、駕して平壤に奔り、急を明に告げ、王子を遣して兵を諸道に徵す。都元帥金命元、副元帥申格を留め、船師を以て漢江を扼す。命元、清正至ると聞き、疑兵を措きて遁る。清正、江に抵る船の渡る可きなし。立ちて北岸を望み、之を久しくして、笑ひて曰く、「敵船に覺あり。是れ兵なきなり」と。善く酒者をして往きて其船を取らしめて渡る。五月四日、都城の南大門に至る。兵ありて門を守る。其の旗幟を視るに皆小西氏

行長清正都城に入る  
浮田秀家

我軍津を渡る

の號なり。蓋し行長は羅川を渡り、敵將の元豪を走らせ先だつこと一日、東大門より入る。王已に遁れたり。清正益怒る。居ること十餘日、諸將皆至る。秀家、自國都に居り、諸將をして各進取を圖らしむ。金命元、退きて臨津を守り申格を呼ぶ。格從はず。獨、楊州に屯す。命元、格の節度に違ふを怒り、王に之を誅せんと請ふ。會咸鏡南道の兵使李輝、來りて格を助く。浮田氏の兵と戦ひて大に之を破る。而れども命元遂に格を斬る。王、捷を聞きて、遽に之を赦せども及ばず。乃申砲及び韓應寅を遣し、命元を助けて津北を守らしむ。我が兩先鋒は、長政と兵を合して、津南に軍す。相持すること十餘日、精兵を伏せて伴り卻く。信、之を追はんと欲す。其裨將劉克良、之を止む。聽かずして渡る。應寅も亦濟る。伏に遇ひて驚き走る。三將返り擊ちて、大に之を破り、信及び克良を擒にす。其兵の死傷若しくは溺る者萬人なり。命元、應寅、走りて平壤に歸る。我が軍乃濟り、安城驛に至る。乃圖を探り、軍の向ふ所を定む。行長は平安道を得、清正は咸鏡道を得、而して長政は黃海道を得たり。皆兵を引きて北入す。而して韓將李洸、尹國馨、金陞は、全羅、忠清、慶尙三道の兵五萬騎を以て、入りて王城を援ひ、龍仁に至る。我が兵の山上に壘するを見て、戦を挑む。我が兵出

我兵大勝

で矣。已にして其懈るを暇ひ、出で撃ちて、大に之を破る。

是の時に當りて、國都より釜山に至るまで、數十城烽火相應じ、皆我が兵の守る所と爲る。以て行營と聲息とを通ず。秀吉、乃石田三成、増田長盛、大谷吉隆を遣し、游軍六萬を引きて赴き援けしむ。伊達正宗も亦、請ひて往く。三奉行、韓に入り、命を宣べ功を褒む。行長既に平安を徇へ、大同江に至りて、書を平壤に遣り復李德馨を召し、平調信、僧玄蘇をして、江中に相見して之を招降せしむ。議諸はず。二人曰く、「若が主、第我を導き明を伐て。不らずば則併せて之を夷滅せん」と。乃還る。

遊軍を發す

六月、韓王、左相尹斗壽、元帥金命元を留め、平壤を守らしめて、自寧邊に走り咸鏡に入らんと欲す。清正在りと聞き、乃義州に走る。右相柳成龍をして、兵を發して命元に益さしめ、固守して明の援兵を俟つ。命元、行長等と江を夾みて相持す。我が兵の稍怠るを伺ひ、夜、精兵を遣し、濟りて之を襲ふ。行長、衆を叱して起ち、義智をして其後を絶たしめ、撃ちて韓兵を破る。韓兵幾きを亂りて走る。行長曰く、「是れ亂る可きなり」と。軍を擧げて之に従ふ。斗壽、命元、守を棄てて走る。行長、城に入り韓の積粟十餘萬石を得たり。使をして還りて國都の諸將を

行長進軍せんとす

趣さしめ、與俱に西せんと欲す。曰く、「太閤の志、明を伐つを主とす。今已に平壤を取る。平壤以西復支ふる者なし。鴨綠江より明の北京に至るまで、百餘里に過ぎず。吾が全軍、甲を卷きて之に趨き、彼をして備ふるに及ばざらしめば、以て志を得べし」と。秀家、三奉行と答へて曰く、「全羅、江原の二道、未だ定らず我れ未だ深く入るべからず。我が水軍、將に全羅に循ひて北黃海に會せんとす。然る後水陸並に進まん。是れ萬全の策なり」と。乃諸將を分ち國都、平壤の間の諸城を守らしむ。大友義統は鳳山を守り、黒田長政は白川を守り、小早川隆景は開城を守り、以て應援に備ふ。

諸將城を守る

水軍

諸將の議

行長、日水軍の至るを望む。水軍の諸將既に釜山を發し、慶尙の右水使元均と戰ひて、之を破り、遂に全羅に出づ。藤堂高虎、韓の候船の唐島に在るを聞き、飛船を以て之に赴き、其百餘艘を奪ひ、島により虜營を焚く。全羅の水軍節度使李舜臣、艦艦副艦數千艘を以て巨濟洋に在り。諸將、毛利勝信の營に集飲し、進戰を議す。脇阪安治曰く、「先大船巨炮を以て戰を挑み、然る後其船を奪はん」と。加藤嘉明曰く、「是れ劫して之を去らしめ、挑みて之を奪ふに非ず。挑みて之を奪ふは、宜しく小船を以て弱を示し、敵の近づくに及びて決戦すべし。不らざれば

九鬼嘉隆

李舜臣

明の援軍

則太閤、水軍の將士は戦を欲せずと謂はん」と。安治曰く、「此事至重なり。一たび敗れば、則陸軍も亦振ふ能はず。子、胡ぞ猖狂乃爾」と。嘉明怒る。高虎間に居て和解す。勝信曰く、「諸公、命を千里の海外に受け、忠に告げて隠さず。務めて公事を利す。太閤、良臣多きこと此の如し。何ぞ戦に憂へん」と。因りて酒を侷む。酒數行、九鬼嘉隆曰く、「今夜三鼓に纜を解き、旦日、進み戦はん。船の大小は宜しきに随はんのみ」と。嘉明、潜に起ちて厠に如き、其軍吏を招き、期に先だちて進む。曉に比びて走舸三艘を以て、直に敵の列艦を衝き、其二十艘を奪ふ。諸將繼ぎて進む。舜臣卻く。我が軍、之を追ひて洋中に入る。舜臣、乃左右の翼を縦ち、巨煩を以て我が船を撃碎す。來島康親、之に死す。安治苦戦して其衆を亡ひて退く。舜臣、因りて閑山に屯して、我が水軍を拒ぐ。我が水軍、之を以て陸軍と合すること能はず。陸軍も亦、未だ遂に進む能はず。

明主翊鉞、秀吉の兵の韓に入りしを聞きて則ち恐る。會其國の西北邊に亂あり。大將李如松、諸軍を率ゐて寧夏に屯す。國都、兵寡し。明主、其大臣を召して、韓の當に援ふべきや否やを問ふ。大臣曰く、「和の明を窺ふこと久し。而して明の屏は韓に在り。韓先和兵を被りて、明援けずば。韓且に折れて和に入らん。和、

秀吉の母壽子  
明軍韓に入る

韓、一と爲り、利を明に分ち、兵を合せ力を觀せて、遼東に出でなば、則勢、鏡水を屋に建すが如し。願ふに韓の民は、和の兵を畏る。而れども心これに服せず。我れ一將を遣し、韓王を助けて之を招聚せば、其方に因りて東北を捍禦せん。是れ名は明を以て韓を援け、而して其實は韓を以て明を援けしむるなり。明何ぞ和を思へんや」と。明主、之に従ふ。其將祖承訓、史儒算を遣し、將に韓を援けんとして、書を琉球、暹羅に下し、和を侵すの勢を爲して、秀吉を靡ぎ、其れをして海に航して西北に嚮ふ勿らしむ。

而して大廳、疾あり。秀吉已に海に航すと謂ひ、憂疑して疾篤し。秀吉、之を聞き、馳せ歸りて之に觀ゆ。至れば則已に薨せり。是の時に當りて承訓、儒算、既に韓に入る。二將は皆遼東の勇將にして數、胡と戦ひて功あり。甚和人を輕す。和人の、前に明の疆を掠めし者、皆海盜にして、甲仗散惡なり。明人、之を見狂れて、豊臣氏の兵も亦、此の如しと爲す。是に於て、嘉山に至り、韓人に問ひて曰く、「平壤の和兵は乃走る無からんや」と。曰く、「否」と。承訓、酒を擧げ、祝して曰く、「天、我をして大功を爲さしむ」と。進みて順安に舍す。營未だ定らず。行長、偵ひ知り、夜、輕卒を遣して其營を劫す。營亂る。乃笑ひて曰く、「此虜も

行長明軍を破る

亦與し易きのみ」と。明日、自往きて明軍と安定に戦ふ。旗幟偉麗にして、人馬皆鬼頭獅面を被る。明の馬駭く。行長、兵を磨きて之を蹂躪す。儒算、馬を下りて闘ひ、丸に中りて斃る。時に霖雨なり。我が兵明人に渾に迫り、撃ちて之を壓す。承訓、身を挺で走る。行長、因りて書を韓王に投じて曰く、「王、盍ぞ我を導きて明を伐たざる。明の我が兵に當る、猶羊群に一虎を放つが如きは王の知る所なり。今、遼東既に明の隻騎なし。而して我が舟師十餘萬、又西海より來る。未だ大駕將に復、何に逃れんとするを知らざるなり」と。是の時に當りて、韓の猛將精兵、多く咸鏡道に在り。而して清正の爲に阻てられ、來りて韓王を援ふ能はず。

清正咸鏡道に進軍す

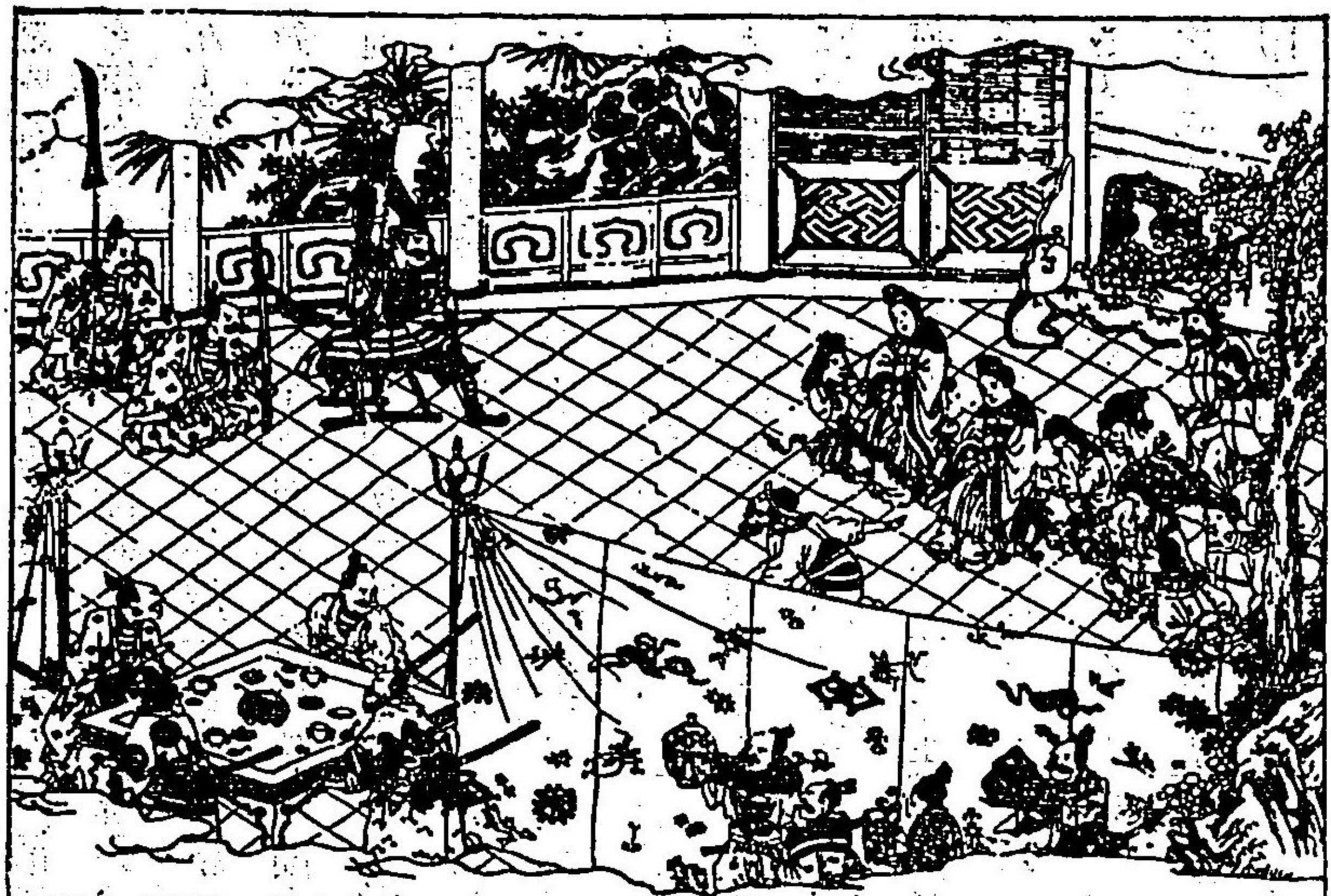
清正の咸鏡道に入るや、安城の民三人を虜にして、先導せしむ。二人辭す。清正立所に之を斬る。其一人、悞れて之に従ふ。永興に至り、二王子の咸鏡北道に遁れしと聞き、則大に喜び、直茂、頼定を留めて、永興を守らしめ、而して其輕兵を以て日に行くこと數百里。鐵嶺に至り、踰えて北す。北道の兵使韓古誠、六鎭の驍騎を以て、清正を海汀倉に逆ぶ。北兵善く射、平地に憑りて馳突す。我が軍歩兵多し。利めらずして卻く。日暮に會ひ、收めて倉内に入る。韓兵、沓至して

清正韓軍を破る

之を圍む。矢、下ること雨の如し。清正、倉粟を排して城と爲し、銃を發して之を拒ぐ。手に應じ千餘人を斃す。韓兵、退き鐵嶺に上りて陣し、且を待ちて戦はんと欲す。清正、夜、兵數千を分ち敵を環りて伏す。且、大霧なり。克誠、將に嶺を下らんとす。而して我が兵四面より齊しく起りて大に之を破り、北ぐるを追ひて鏡城に至り、又大に之を破り、遂に京誠を擒にし、火を縱ちて城を焚く。二王子の會寧府に在りと聞くや、馳せて之に赴く。府は韓の極北なり。行くこと十五日にして至る。府使鞠景仁、悞れて二王子を拘へ、人をして來りて降を乞はしむ。且曰く、「府内、食盡き、王子食はざることを三日なり。願くは之に食を賜へ」と。清正、之を許し、自城に入らんと欲す。將校皆諫めて曰く、「吾れ府内を窺ふに、虜人填咽す。我れ寡兵を以て入らば、恐らくは變あらん」と。清正曰く、「虜何ぞ能く爲さん。吾れ已に王を失ふ。又王子を失ふ可らず。即變あらば、吾れ王子と死を決せん。憾母きなり」と。乃十餘騎と城に入る。饋者數十人をして、人ごとに一器を執り、隨ひて入らしむ。韓人危疑し、弓を張りて清正を環る。清正之を叱し、其他無きを辨す。韓人、解する能はず。清正、自襟を開き箭に當て、印を懐に取り、紙に印して之を示す。韓人弓を捨て、拜す。是に於て、清正、王

清正韓の二王子を生擒す

(加藤清正兩王子生擒之圖)



子及び其大臣黃赫、金貴榮等を拘へ、人をして之を鏡城に護送せしむ。乃景仁に問ひて曰く、朝鮮の北境、此に盡くるかと。對へて曰く、「然り」と。曰く、「北は何の國に隣す」と。曰く、「元良哈」と。清正、乃八千人を以て進み、其境に入り一城を攻めて之を拔く。既に夜なり。命を下して曰く、「甲を釋ぐ勿れ」と。夜半胡騎大に至る。我が兵力戰して之を走らす。清正曰く、「虜、我が至るを意らず。我れ一捷以て太閤に報するに足れり」と。乃其貨寶を收め、兵を引きて南に還る。胡騎之を躡す。清正、自殿して退く。終に海濱に至り、西南に臨みて高山を得たり。韓の捕虜曰く、「富士岳なり」と。清

正馬を下り胃を免ぎて拜し、其騎に謂て曰く、「吾れ太閤を辭してより、日に西北に行く」と謂へり。今岳を西南に望む。吾が行の遼遠なるを覺ゆ」と。乃歸り、二十日にして鏡城に至る。

石星沈惟敬

明和を講せんとす

八月、韓王、義州より李養、李元翼を遣し、來りて平壤を攻めしむること再す。行長輒擊ちて之を卻く。王、亦清正已に咸鏡を略定すと聞き、其行長と力を并せて來り襲はんこと恐るゝや、益急を明に告ぐ。明既に承訓の敗聞を得て、舉朝震驚す。大司馬石星、明主に説きて曰く、「秀吉の兵、勝に乗じて遠く鬪ふ。未だ與に鋒を争ふ可からず。且寧夏未だ平ならず。復遼東に事あり。且に和を議し、以て禍を紓くに若かざるなり」と。因りて沈惟敬を薦む。惟敬は越人、慧黠にして辯口あり。燕に遊び、燕の倡家の僕鄭四と善し。鄭四嘗て對馬に在り。惟敬、故を以て略和事を知り、富貴を徵幸す。其友袁茂、嘗て女を星に納る。星、因りて惟敬を知る。召して與に語り大に悦び、遂に之を薦む。是に於て、明主、惟敬を以て游擊將軍と爲し、多く金帛を資し、往きて我が軍に説かしむ。書を平壤に投じ、辭を卑くして和を乞ふ。行長、宗義智と、惟敬とを城北に見て曰く、「明即し和せんと欲せば、宜しく使をして海を濟らしむべし」と。因りて數條を徵す。惟



敬盡く其意に順ひて、曰く、「歸りて報を取り、五十日にして復來らん」と。乃、平壤の西北十里を界とし、和、韓、俱に相諭えざるを請ふ。行長、許して遣歸し、狀を秀家に告ぐ。

筑紫廣門

是に於て、我の平壤に在る者、復西下せず。而して韓兵、竊に諸道を發し、沈岱といふ者、兵を朔寧に募り、都城を復せんことを計る。秀家、攻めて之を破る。鄭湛、邊應井も亦、兵を全州に聚む。筑紫廣門、慶尙より全羅に入り、港、應井と、熊嶺に戰ひて、之を斬る。而れども全州未だ下らず。

清正威鏡より還る

九月、應井の弟應星、石田三成を馬灘に敗り、元豪、蜂須賀家政を龜尾浦に敗り、遂に毛利高政を春川に攻む。高政、兵を伏せて豪を擒にし、遂に江原を定む。鍋島直茂、相良頼定、永興に在り。徳原、威興等の七城を取り、移りて威興を守る。清正、威鏡より諸俘虜を以て、還りて蓮下に至る。會韓兵二萬、梁養山を扼す。清正、擊ちて之を破り、其將梅天を走らす。直茂、頼定、之を迎へて、橋中に相見て、其恙無きを賀す。時已に十月なり。清正、軍を安邊に返し、乃全山、橘州の諸城を修め、相與に心を協せ、韓人を按據す。是の時に當りて、諸將、事を秀吉に稟す。

清正進撃せん

明の策略

使劑、海中に交ふ。是の日、秀吉、復奏請して、行營に赴く。天子詔して曰く、「征戎の事は一に將佐に任じ、輕しく海を濟ること勿れ」と。秀吉拜謝して行く。十一月、直茂、三千人を以て韓將李希得の兵三萬と威興北に戰ひて、之を走らす。斬首千餘級なり。清正、盡く威鏡二十二管を收め、遂に北道より長驅して遼東に入らんことを議す。未だ果さず。行長も亦、惟敬の期を過ぎて至らざるを以て。乃怒り、令を軍中に下して曰く、「皆行具を修めよ。吾れ將に馬に鴨綠江に飲はんとするなり」と。義州、之を聞きて荷擔して立つ。韓王、書を飛ばせて明に告ぐ。明の群臣、議して曰く、「惟敬の説、信す可らず。秀吉、殊に兵を退く意なし。曩者には暑濕を以て敗を取る。今、天寒く馬肥ゆ。宜しく兵を出すべきなり」と。翊鉤、猶豫して未だ決せず。令を懸くるやう、「能く奇計を獻せ、東瀋を復する者あらば、萬金に購ひ、伯爵に封じ、之を子孫に襲がしめん」と。敢て應ずる者なし。衆、少司馬宗應昌を推して曰く、「應昌は、去歲上書して秀吉必來ると言ふ。是れ兵を知るなり」と。翊鉤、遂に應昌を拜して都御史と爲し、東北を經略せしむ。劉黃裳、袁黃を賛畫と爲す。而して兵に將たる者を選ぶ。李如松の材武、天下無雙と稱す。其寧夏を平げて旋るに會ふ。則拜して大將と爲し、六將軍を率

李如松

ひて、東、秀吉を拒がしめ、期するに十一月を以て北京を發せしむ。獨大司馬、猶前議を持し、復惟敬を遣し、平壤に至りて秀吉の意を伺はしむ。惟敬、平壤の城中に留り、行長と密に議を定めて去る。而るに如松等の大兵、已に遼東に至る惟敬、之を路に要して曰く、「憐、將に成らんとす。和人平壤を棄て、大同江を界として、退くを約す」と。如松方に功を立つるに銳意にして、惟敬の言を悞はず。執へて之を斬らんと欲す。應昌等、説きて曰く、「宜しく此を舍し、因りて敵を意らしめて之を襲ふべし」と。如松之に従ひ、遂に鴨綠を渡る。會降虜の我が耳目を爲す者、韓相の爲に摘發せられ、皆拘縛に就く。故を以て明軍の至るを知らず。二年正月朔、如松、肅寧に至り、裨將查大受をして、先づ順安に往かしむ。大受、人をして來りて告げしめて曰く、「沈遊擊至り、和議成る」と。行長喜び、亦一將人をして二十人を以て順安に會せしむ。大受誘ひて與に酒を飲む。伏起る。二十人搏戦し、其三人を亡び、走りて平壤に還る。行長大に驚く。丹波の人内藤如安、行長の侍史たり。小西氏を冒し、飛驒守と稱す。是に於て、行長、如安に命じて往きて如松を詰らしむ。如松慰解して遣還す。而して六日、諸軍を以て平壤に薄る。行長、宗義智等と、急に守備を修め、使を馳せて急を鳳山に告ぐ。使者未だ

二年  
【沈遊擊】沈惟敬  
大受の暴動

小西如安

(平壤合戦之圖)



歸らず。如松、已に先鋒を以て合徳門を攻む。我が兵、撃ちて之を卻く。其夜、出で、李如柏の營を襲ふ。利あらず。其明、明軍大に至る。如松は小西門を攻め。如柏は大西門を攻め、吳惟忠駱尙志は北門を攻め、祖承訓は南門を攻む。承訓、奇功を立て、前敗を償はんと欲し、我が韓人を易るを知るや、其兵に皆韓装を尙へ、故に踏阻して進まざらしむ。行長以て韓人と爲す。專西北を距ぎ、銃手を率ひ、撃ちて如松を卻く。如松、益大礮、火箭を用ひ、毒煙、城を蔽ふ。我が兵、殊死して戦ふ。承訓乃韓装を脱し、明の甲を露し鼓噪して登る。行長、驚き急に兵を分

行長平壤より退く

ちて之を拒ぐ。而れども西北即陷る。行長退きて牡丹臺を保つ。明軍四面より堞を攀づ。我が兵力めて拒ぎ、刀鎗擡り垂れ、堞、蝟毛の如し。明兵、死傷數千人。援く能はず。退きて城外に營す。行長の將木戸某、説きて曰く、「鳳山の兵來り援けず。吾れ孤城を以て大敵に抗す。終に支ふ可らず。蓋退きて諸將に合して、以て再舉を圖らざる」と。行長之を然りとす。即夜、潜に衆を率ゐて、城を出で、江に至る。江水方に合ふ。踏みて渡り、鳳山に至る。大友義統、已に遁れて國都に之く。黒田長政、白川に在りて敗を聞き兵を引ききて、行長を迎へ、代りて殿して退く。明軍、敢て追躡せず。終に國都に至る。韓人、之を聞き所在並び起ちて、明軍に應ず。

宋應昌等、謀りて曰く、「秀吉の將帥、皆王城に萃る。而れども加藤清正は、孤軍を懸けて咸鏡に在り。聲聞通せじ。虚喝して取る可きなり」と。辯士馮仲纓をして、譯を以て清正に説かしめて曰く、「和、故なくして韓を攻む。韓急を明に告ぐ。明の皇帝、大に怒り、大兵を遣して韓を救ふ。平壤を復し。開城を復し、遂に國都を復し、浮田、小西を擒にし、盡く其兵を逐ひ、琉球、暹羅の諸國をして和の境を壓せしむ。而るに足下、猶韓を守る。誰が爲にせんと欲するか。皇帝、足下

清正明使に答

【大駕】明王

の高義を聞き、使臣をして爲に之を報告せしむ。足下の計を爲すに、速に韓の子を返し、軍を收めて、和に歸るに若くは莫し。否らずば則明軍四十萬、韓兵を驅りて東し、直に安邊に萃らん。足下、明に服せんと欲すと雖、得んや」と。清正、侍史をして之に答へしめて曰く、「清正、國命を奉じて戦ふを知る。明の令を聽きて和するを知らざるなり。歸りて明王に語れ。我に敵甲冑兵あり。近ごろ事無きに苦しむ。貴國の來り伐つとは、已に命を聞けり。而れども咸鏡の途は險阨にして、騎は比行すべからず。卒は列を成すを得ず。兵の來ること日に一二萬のみ。吾れ迎へて之を撃ち、日に一萬を殺さば、四十日にして之を殲さん。日に二萬を殺さば、二十日にして之を殲さん。既に殲して西を指し、遼を度り燕を破り大駕を海東に奉じ、清王、以て復命すべし」と。仲纓、走り歸る。

是の時に當りて、明軍、勝に乗じて鼓行して東す。國都の將吏、大同以東の諸城をして、守を撤して來り會せしむ。諸城、皆命を聽く。獨小早川隆景、毛初秀包、立花宗茂と、肯せずして曰く、「吾が輩、力を竭して國に報ずること、固に今日に在り。且明軍勝ちて驕る。與し易きのみ」と。三奉行、之を促すこと甚急なり。乃退く。未だ王城に至らざること三十里にして軍す。明軍進みて開城に入り、遂

小早川隆景  
跡館の戦

明軍を破る

に臨津を渡る。查大受、其先鋒たり。宗茂に礮石嶺に値ふ。宗茂、撃ちて之を破り、百餘人を斬る。如松乃盡く其軍を引きて至る。隆景、三萬人を以て碧蹄館に邀撃し、大戦良久し。宗茂、秀包と、之を横撃す。如松、初め火器を以て平壤を襲ひ、一戦して志を得、和兵復畏るゝに足らずと謂ひ、乃輕しく進みて銃礮を具へず。短兵を以て接戦す。我が軍兵銃にして刃利し。縦横に揮ひ撃つ。人馬皆倒る。敢て其鋒に當る莫し。我が兵、呼聲天を動かす。遂に大に明軍を破り、斬首一萬許、殆ど如松を獲へんとす。北ぐるを追ひて臨津に至り、明兵を江に擠す。江水之が爲に流れず。如松、痛哭して夜を徹し、敗軍を聚め、退きて坡州に入る。韓の將相、其再進を請へども肯せず。時に天雨ふり氷釋く。如松託言すらく、「坡州は泥多く、營を爲す可からず」と。遂に退きて東坡に入る。二月、猶雨ふる。明の馬多く病みて斃る。我が兵、火を縱ちて進む。如松、退きて開城に入り、人を遣して明に還し、病と稱して代を請ふ。

太閤記 (小早川隆景明兵を破る)

(上略) 然るに明の將軍李如松は大軍を引率し、日本勢の跡を慕ひ、開城府に着し、爰にて暫くは人馬の足を休み、正月廿五日、坡州といふ所まで軍兵をおし出しぬ、日本の諸大將是を聞いて、軍の靜定まぢくなりしが、浮田秀家、石

田三成を始め其餘の諸將も、大軍を引受け野合の合戦危ふかるべし、惣軍王城に楯籠り、矢石を備へて戦ふべしと議せられけるを、立花左近將監宗茂、目をいかりし刀の柄に手を掛け、敵こわければとて逃籠るやうやある、唯馳せ合せ、散散して捨てん物をと、氣色ばうて立上れば、人々是に勵され、さらば誰をか先陣に進むべしといふ時に、小早川隆景、聲を勵し、此度の合戦においては、某先陣に進むべしと兼てより申つる事よ、誰にもあれ先陣は思ひもよらずとて頓て我が陣中に走り入り、軍勢の手配、陣備等に及びける、先手は小早川隆景が勇臣栗屋四郎兵衛尉、村上彈正、野島掃部の三千餘人、立花宗茂、久留米秀兼、毛利元康八千餘人の勢にて、右の方三町計に陣を取り奇兵をなす、本陣は隆景一萬三千餘人、旌旗の色衆然と人馬猛にいさみ立ちけるは、げに關西の一入男武の大將かなと見る人舉つて感じけり、翌れば廿六日、まだ東雲の朝霞を拂ひ、明の大軍黒みか、つて其間一里計に押寄せたり、此時隆景、味方の軍兵を後向に立たせ、敵の勢を見るべからずと下知しければ、惣軍皆敵の方を後にす、是は明兵目に餘る大軍なれば、味方の兵士戦はざる先に心懸し、見崩れをやすへきかとの將略なり、時に侍大將野田主膳といふ者、焼飯十斗木の葉に盛り、隆景の前に來り、早敵合近く相成候、聞し召され候はんやとさし出せば、隆景取つて五つ食ひ、彼の侍大將野田主膳、我も相伴仕らんとて二つ取つて食ひ、其餘を近習の武士に與へけれども、一つも得食はで止みにけり、賊に大軍前に有りて手詰の合戦に及ぶ時は、抜群の英雄ならでは食事などは叶ふまじと是を見る人感じける、時に黒田甲斐長政は、歩卒六七人引具し、隆景の旗本に來り、天晴御陣押、見事に候もの哉、あまりのうらやましさに唯一人參つて候、

何方にて手傳ひ申へしと申けるに、隆景歎び、よくこそ参られて候へ、さらば先手にすゝみ、栗屋に力を添へ給へと聞えければ、長政満面に喜色を顯し、承り候として先陣へぞ向はれける、時に李如松が先手の大將查大受、朝鮮の大將高彦伯等、數萬の軍兵ちかぢかと進み寄れば、隆景後向たる味方を下知し、正面に向うて鯨波を作り、數百の鐵砲一同に放ち、炮煙につれて切つてかゝる、黒田長政は寒風を防ぐ爲とて、大綿帽子を深く被り槍を構へて見合せけるが、既に合戦始りしかば、彼の綿帽子脱ぎて、世に聞えたる水牛の胃の緒をしめ、槍を上げて真先に踊り出でらる、隆景が軍兵是を見て、長政を助けらるゝぞ今日の軍は勝ちたりと罵りて、無二無三に突立つれば、查大受、高彦伯等、爰を先途と死力を盡し、士卒を下知し勇を勵し、追ひつかへしつ戦ひけるは夥しといはん方なし、日本の兵卒は、或は三尺又は四尺に餘りたる大太刀に長き柄をはめ、真向より斬り割る程に、大明、朝鮮の薄鐵にて造りたる甲冑を斬る事、只熟菜を切るが如く、或は兜の天邊よりずばと二つに別るゝもあり、肩より胸をかけて斜に切つて倒すもあり、鮮血流れて紅の湖をなし、屍は積んで岸に等し、明の軍兵慄ひ恐れて右往左往に敗北す、李如松、是を見て後陣より大軍を驅つて大に進めば、兼て備へし日本の奇兵、久留米、毛利が勢八千餘人横ざまに突立つれば、大將隆景一萬人正面より一文字に切てかゝり、命は塵芥の如く、只々名こそ惜しけれと、明兵の打つ劔を鐵の袖にて支へ、彼の大刀を振つて彌立つれば、大明の兵士大軍なりと雖、面を向くべきやうもなく、七裂八裁に切り崩され、西をさして敗走すれば、日本の後陣に備へたる浮田中納言秀家、岐阜中納言秀信、丹波中納言秀勝、木村常陸介、糟谷内膳正、長谷川藤五

援軍

耶、中川右衛門大夫、淺野右京大夫等、惣軍八萬餘人、一度に陣を作り備を亂して切立つれば、大明、朝鮮の軍勢、討るゝ者その數を知らず、大將李如松も散々に切立てられ、餘りに馬を馳せける程に、後ざまにどうと落ちたり、隆景が家臣井上五郎兵衛、李如松とは見知らねども敵の大將とぞ思ふなれと、鎧を揚げて飛び來るを、從卒二百餘人駆け隔て、是を救ひ他の馬に乗せて逃げのびしたり、大將かくの如くなれば從卒なじかはこらふべき、彌倒され切殺され、討るゝ者三千餘人、辛うじて坡州まで退きける、云々

而れども韓人の我に寇する者衰へず。我兵の幸州に在る者、亦韓將權慄の爲に敗らる。秀家等、乃使をして清正を召さしむ。清正、樞中の寇を平ぐ。斬首虜二千餘級。直茂、頼定と、皆都城に之く。明兵相驚きて曰く、「清正、北道より繞りて平壤を襲ひ、我が歸路を扼す」と。如松、大に愧れ、諸將を留めて臨津を守らしめ、自退きて平壤に入る。秀吉、毛利秀元、加藤光泰、細川忠興等の七將をして赴き援けしむ。

三月、晉州を攻む。晉州城、險なり。韓王の奔るや、其重器を置き、精兵二萬を以て之を守らしむ。七將、皆大に敗れ、退きて都城に入る。都城の傍に龍山倉あり。我が兵、食を仰ぐ。查大受、李如梅、兵を潜めて倉を火く。而して金命元等臨津の南に軍して、我が糧道を絶つ。已にして我と明軍と、皆大に疫す。三奉行

光泰

清正糧を奪ふ  
沈惟敬和を計る

糧竭くるを以て、退きて釜山を守らんと欲す。光泰曰く、糧竭きば、寧ろ砂を食はん。國都は棄つ可らず」と。清正も亦、之を争ひて曰く、「吾れ孤軍を以て強胡數萬を破る。明、韓の兵、何ぞ意と爲すに足らん。何ぞ其糧を奪はざる」と。三成曰く、「公、宜しく往きて奪ふべし。助けを人に取るを得ざれ」と。清正曰く、「諾」と。即夜、半兵を以て明軍を襲ひ、糧を奪ひて還る。時に如松、沈惟敬をして和を計らしむ。惟敬、北京に赴き、報じて曰く、「秀吉を日本國王に封じ。足利氏の故事の如くせんことを欲するのみ」と。因りて石星と議を定め、韓の都城に來り、厚く行長に賂ひて曰く、「太閤、韓俘を歸さば、則慶尙、全羅、忠清の三道を割きて、封じて王と爲さん」と。行長等、素より不學、封王の故事を諳せず。以て明に王たるの謂なりとし、之を許さんと欲す。己にして其非を知る。惟敬、巧に之を彌縫す。清正其議を可かず。行長、三奉行と、皆歸らんことを懷ひ、乃秀吉に報じて曰く、「明人、殿下を尊びて皇帝と爲さんと欲す」と。秀吉、乃和を許す。惟敬、都城の兵を解かんことを請ふ。諸將、乃城を焚き、更殿して東す如松、乃肯て進まず。韓相柳成龍、之を尾撃せんと請ふ。乃李如柏等の萬餘人を遣す。我が陣の整へるを覩て、敢て逼らず。諸將、慶尙に至り、蔚山、東萊、金

秀吉和を許す

海、巨濟等の十八屯を起して、秀吉の令を俟つ。明主、孫鏞を以て宋應昌に代へ劉綎、吳惟忠等を遣し、分ちて星州、居昌の諸城を守らしめ、而して謝用梓、沈一貫、沈惟敬をして、來りて秀吉に行營に謁せしむ。秀吉、明の使者を襲して之を還し、小西如安を遣し、與借に清正の俘へし所の二王子、大臣以下を放還せしむ。大友義統、行長を救はざりしを以て、罰して其封を奪はる。遂に在韓の諸將をして、晋州を屠りて前敗を償はしむ。

六月、諸將、兵を合せて晋州を圍む。城兵、益熾なり。我が軍壕を填め、竹橋を蒙りて仰ぎ攻む。城上の矢石注ぐか如し。清正、龜甲車を造り、牛革もて之を包み、載するに死士を以てし、城足を穿つ。樓櫓崩折す。清正、黒田長政と先登す諸將、之に繼ぐ。城將、徐禮元、金千鎰等を斬り、六萬餘人を虜にし、城池を夷げて返る。禮元の首を醜し、之を行營に獻じ、仍故地に屯す。韓王、大に驚き、之を明に訴ふ。李如松、沈惟敬をして、來りて行長に見えしめて曰く、「公等和を許し、未だ十日ならざるに、晋州の事あるは何ぞや」と。行長怒りて曰く、「汝、和を請ひて、明兵の韓に入る者益衆きは何ぞや」と。惟敬、語塞がる。去りて北京に至り、石星に請ひて、如松以下を召し還さしむ。獨、劉綎、吳惟忠等萬人を留

黒田孝高の評

ひ。明主、如安を疑ひて、敢て納れず。之を遼東に舎せしむ。秀吉も亦、如安の久しく還らざるを以て、惟敬己を欺くと意ひ、日夜軍事謀議す。黒田孝高、私に同僚に語りて曰く、「吾れ聞く、『外征の諸將、威ありて恩なし。過ぐる所殘滅せざる無く、夷民逃れ匿れて、野に青草なし』と。是れ其地を得るも、果して何ぞ益せんや。且聞く、『兩先鋒、功を争ひて相闘ぎ、法令抵牾し、衆、従ふ所を知る莫し而して浮田宰相、之を制する能はず』と。夫れ浮田は、統御の才に非ざるなり。能く此任に堪ふる者は、徳川に非ざれば則前田、若しくは孝高のみ」と。秀吉、側に聽きて之を首肯す。已にして大に諸將を召し、行臺に會議して曰く、「朝鮮の事今日の狀の如くば、則何れの時にか定まらん、乃公自往かすばある可からず。吾れ家康を留めて、吾が邦を守らしめば、復顧慮する所なし。今國內の兵を擧ぐれば、少しと雖、猶三十萬を得べし」と。因りて諸將を顧みて曰く、「利家、汝は五萬に將たれ」曰く、「氏郷汝も亦五萬に將たれ。吾れ親十五萬に將として、中軍と爲り、汝二人を左右にして、朝鮮を掃蕩し、直に明に入らん。疾く兵艦を具へよ吾が意決せり」と。徳川公懼ばず。利家、氏郷に謂て曰く、「二公、群中に擢でらる。榮就かこれより大ならん。僕、少小より弓馬を事とす。今老いたりと雖、猶

秀吉自ら地に進まんとして

淺野長政秀吉を諷む

以て一面に當るに足る。何ぞ居守を爲さんや。二公、幸に之を推就せよ」と。彈正少弼進みて曰く、「徳川公、復言ふ勿れ。臣、殿下の近狀を視るに、彼れ野狐に憑らるか」と。秀吉、惘然として刀を控へて跪きて曰く、「吾を狐憑と爲す説あるか。説なくば則死せよ」と。少弼對へて曰く、「説有り。饒説無くとも、臣固より死を辭せず。且臣等の頭の如きは、千百を剉ぬと雖、何ぞ惜しむに足らんや。願ふに天下纒に定り、瘡痍未だ癒えず。人々、休息無爲を希ふ。而るに殿下乃故なき軍を興し、以て異域を殘暴し、我が父子兄弟をして骸骨を海外に暴らしむ。哭泣の聲、四に聞ゆ。之に加ふるに、漕轉賦役の相因る、所在盡く荒野と爲る。是の時に當りて、殿下一たび趾を擧げば、則六十州の寇賊、雷動風起せん。徳川公ありと雖、安ぞ之を鎮定するを得んや。是れ其外征を願ふ所以のみ。臣恐る、殿下の舟師、未だ釜山に達せざるに、而も根本の地、已に他人の據る所と爲らん。是れ勢の最も親易き者、殿下をして平昔の心有らしめば、豈此を察せざること有らんや。此を察せざる故に之を狐憑と謂ふのみ。鄙語に曰く、『鼈は人を啖はんと欲して、反りて人に啖はる』と。殿下の謂なり」と。秀吉、益怒りて曰く、「狐か鼈か、吾れ且くこれを舎てん。臣を以て君を罵る、舎つ可からず」と。

藩翰譜 (淺野)

(上略) ことし冬、太閤朝鮮の軍、はかなくしからぬを怒つて徳川殿を初め、宗徒の大名を、名護屋の陣に集め、朝鮮の軍、今のやうならんには、いつ事定るべしと思へず、今は秀吉みづから向はんと思ふ、三十萬の勢を三手に押し分け、利家氏郷に大將させ、三道より向ひ、「朝鮮を打ち破り、まつすくに大明に攻め入らん、」本朝の事、家康さへましませば、心に懸る所なし、かたぐ、如何にや思ふと仰せある、徳川殿御氣色損じて、利家氏郷等に向ひ、日本の大名、多き中に、かたぐ、二人選り出されて、一方の大將を賜はらんこと、弓矢取ての面目、何事かこれに過ぎん、抑も家康荷も弓馬の家に生れ、戦の中に年老いぬ、今この大事に及びて、いかで人々の跡に留つて、徒らに本朝を守り候ひなん、小勢には待るとも、家康も軍勢をひきあて、必一方の先陣を承るべし、かたぐ、の御推舉を仰ぐ所に候と宜ひしに、彈正少弼長政進出で、暫く候ふ徳川殿、殿下この年月の御振舞ひ、昔の御心とや思召す、年経る狐の入り替つて候を、何事か宜ふべきと、申して果てぬに、太閤御佩刀に手を掛けられ、やあ、秀吉が心に、狐の入かはつたるいはれ、きつと申せ、申し損じなば、しや首打落しんてくれんぞと、責め懸けく、仰せけるに、彈正ちつとも騒がず、長政等が如きは、何百人が首刎られんにも、なん條の事か候べき、抑も此とし頃、よしなき軍起し、異國のみにあらず、本朝にも父を討たせ、子を打たせ、兄弟を失ひ、夫に別れ、妻に離れ、歎き苦むもの、天下に滿つ、又それより兵糧の轉漕軍勢の賦役、七十餘州が内、悉くあれ野となる、けふ御發向あらんには、五畿七道の間、竊盜強盜等、路の如くに起りて、やすき所も候まじ、徳川殿いか

に思ひ給ふとも、如何でこれを防ぎて、動きなく御跡を守り給ふ事かふべき、此等の事を思ひてこそ、先陣と宜ふらめ、されば昔の御心ならんには、かほどの事、など御心づきなかるべき、かゝる御心の附かせ給ふ事、これただ事にあらず、一定ふる狐の入かはつたるには候はずや、賤しき者の謫に、人とらんとする、誰は、必ず人に取らるゝとは、此御事にて候ぞと、憚る所なく申ければ、大閤、誰にもせよ、狐にもせよ、おのが主と頼みたらん者に、雑言をはく條、奇怪なりと、飛かゝらんとし給ふを、利家氏郷押隔て、人々御前に同公せり、長政が首刎られんに、御手を下さるゝまでも候はず、そこ罷り申せ彈正と、云れて長政は、さうぬ體にもてなし、人人に色代して、己が陣に歸り、御使を待て腹切らんとす。(下略)

秀吉怒りて長政を斬んとす

肥後の賊起る

將に刀を抜きて之を斬らんとす。利家、氏郷、進みて之を擁して曰く、「臣等此に在り。苟も誅戮を行はんと欲せば、必しも親手を勞せじ」と。因りて少弼を斜視して曰く、「去る可し」と。少弼乃徐に起ちて舍に還り、罪を待つこと數日。變事を上る者あり。肥後の賊梅北、兵を擧げて佐敷城を取ると。秀吉、方に驚き、急に少弼を召し、謝して曰く、「吾れ甚汝に慚づ。汝の兒幸長に命じて大將と爲し、往きて肥後を定めしめん」と。因りて徳川公に命じ、其將本多忠勝を以て、之を助けしむ。未だ發せざるに、肥後の人、梅北を斬り來りて獻す。乃止む。少弼に命



家頼生る

じて、其國を按定せしめ、韓の成卒を滅す。八月、淺井氏、復男を生じ。秀吉、大に喜び、前田利家をして軍事を攝せしめ、自大阪に歸る。生める所の男、幼字を棄丸と命ず。長じて秀頼と曰ふ。

韓王都城に歸る

韓王、乃敢て都城に歸る。清正、其俘を喪ひ、心甚懼はず。又和議の必成らざるを知る。

虎獵

十一月、進みて安康を攻め、大に之を破る。虜尤清正を畏れ、呼びて鬼上官と曰ふ。時に韓の野に尸多く、虎豹群り至る。我が將士留り成る者、困りて大に之を獵し殺獲無數なり。其尤大なる者を檻して之を獻す。

三年  
伏見城

三年正月、伏見に城き、卒二十五萬人を興す。將帥の萬石以上は皆役を助く。三月、秀吉、秀次及び徳川、前田の諸將と吉野に遊ぶ。四月、有馬の温泉に浴す。

加藤光泰卒す

是の年、加藤光泰、卒す。初め石田三成、韓都の議合はざるを以て、光泰と隙すること甚深く、遂に之を毒せしなり。嗣子貞泰、猶幼なり。邑を美濃に徙し、甲斐を以て淺野氏に賜ふ。

和議

是の時に當りて、韓の成未だ徹せず。韓王、數明を促して和を定めんとす。十月、明主、如安を召す。石星、沿道に命じて供帳せしむ。十二月、燕に至る。星、就

如安明主を見る

きて其館に拜し、待するに王公の禮を以てし、厚く之に賂ひ、曲げて其構を成さしむ。如安、之を諾す。居ること數日にして、明主、之を延見す。如安、騎して入り、闕に至る。衛士、呵して之を下す。如安、昂然として下らず。入りて明主に見ゆ。明主、諸の將相大臣をして左闕に會せしめ、秀吉の意を悉問す。如安答ふる所、勉めて星の意に副ふ。明乃封王の議を定め、正使李宗誠、副使楊方亨を遣し、沉惟敬を以て導と爲す。惟敬、欵望す。且星を難じて曰く、「前に七事を約す。今止封冊のみ。事必成らじ」と。星、聽かず。如安、三使と皆發す。

四年  
蒲生氏郷卒す

四年二月、蒲生氏郷、卒す。幼子秀行嗣ぐ。尋きて之を下野に徙し、會津を以て上杉景勝に封す。

明使  
淀君

三月、伏見城成る。秀吉徙り居て、明の使者を疎つ。淺井氏を淀に置く。世、淀君と呼ぶ。淀君、既に秀頼を生じ。而して秀次、位を避くるの意なし。故に以て秀吉、伏見に城きて、秀次に譲り、秀頼に予ふるに、大阪を以てせんと欲するなり。秀次、人と爲り頑放、其聚樂を留守するや、淫虐、日に甚し。色を漁するに貴賤を論せず。右大臣晴季の女、新に寡となりて孤女あり。秀次、母子を併せ取りて、之を嬖す。上皇崩じて數日なるに出で、獵し、手づから近臣を刃す。夜出

秀次

殺生關白

黒田孝高秀次  
を陳む

で、行人を戕ひ、櫓上より人を銃して戯と爲し、孕婦を剖かんと欲するに至る。世、呼びて殺生關白と曰ふ。殺生と攝政と音相近きを以てなり。田中吉政、其傳たり。數之を諫む。乃事に託して吉政を遠ざく。秀吉の再行營に赴くや、外議以て秀次當に代り行くべしと爲す。而れども殊に行く意なし。黒田孝高、之に説きて曰く、「殿下の威靈甚しと謂ふべし。文武の較、門に相撃ち、天下の士民其喜怒を視て、慶弔を爲す。殿下其故を知るか」と。秀次曰く、「吾れ關白たるの故のみ」と。曰く、「否。殿下、太閤を以て叔父と爲さずば、則能く關白と爲るを得んや。太閤、年已に六十、猶甲を枕して眠る。而るに殿下は恬然として獨嗜慾を縱にす何ぞ自省ざるや。夫れ位大臣を極め、而して望み天下に厭かず。怨の萃る所、姦の乗する所なり。臣、竊に殿下の爲に之を危む。殿下の計を爲すには、宜しく那古耶に赴き、代りて軍事を統ぶべし。太閤已に兵事に倦めり。心喜びて之を許さん。功を立て、自固くせば、誰か之を動すことを得ん。願くは殿下、之を熟思せよ」と。蒲生氏郷も亦、其海を濟るを勸め、自其先鋒爲らんと請ふ。秀次皆納れず。流言あり、「關白反を謀る」と。秀吉問はず。秀頼生るゝに及びて、秀次自廢せられんかを疑ひ、益聊頼せず。石田三成、増田長盛、之と卻あり。秀吉

秀次誓書を秀吉に呈す

秀次高野山に入る

秀次自殺

の旨を希ひ。數之を惡す。初め常陸介木村重茲、秀吉に寵めり。而して三成、其寵を奪はんと爲し、乃秀次、結ぶ。秀次、自、怨を取ることも多きを知るや。出遊する毎に輒鎧仗を具へ、又厚く諸侯伯に賄りて之と誓ふ。三成、長盛、因りて其を反形ありと證す。

七月、秀吉、三成、長盛、及び前田玄以をして、就きて之を詰問せしむ。秀次大に駭き、誓書七通を獻す。秀吉、意稍解く。翌夜、重茲、婦人の車に乗りて聚樂に入り、漏を盡して出づ。三成、偵知して告ぐ。曉に比びて、秀次、徳川氏の嗣子を促し、朝參せしめ、因りて劫して質と爲さんと欲す。嗣子、走りて伏見に歸る。毛利氏も亦、秀次の擬する所の誓書を獻す。秀吉、大に怒り、使をして、秀次を召さしむ。秀次の愛將吉田修理、萬人を假りて、夜、伏見を襲はんと請ふ。聽さず。遂に赴き謁す。見ゆるを許さず。命じて之を高野山に放ち、僧興山に附して監守せしむ。興山は、南征の時、首として款を納れし者なり。是に於て、奏請して、秀次在身の官辭を削り、廢して庶人と爲す。三成、遂に之を殺さんことを勸め、潜に興山に諷して、其自裁を促さしむ。秀吉、遂に福島正則を遣し、就きて死を賜ふ。然れども興山、其命を乞ふを冀ふ。聽さず。正則、還りて秀次の首

聚樂を毀つ

を獻す。秀吉愕然として曰く、「山僧無情なり」と。三成請ひて之を京師に梟し、其妻兒姫妾三千餘人を併せて、皆之を斬り、之を一坎に座め、名づけて畜生塚と曰ふ。聚樂を毀ち、諸邸第を伏見に徙し、召して吉政を賞し、秀次の地を分ちて、福島正則に予ふるに清洲を以てす。木村重茲以下を誅夷す。重茲、遺腹の子あり。重成と曰ふ。其母、嘗て秀頼を乳養す。故を以て、秀吉召して重成に祿し、長門守に任じ、以て秀頼に隸す。三成、既に重茲を誅し、遂に伊達、最上氏も秀次に驚りせと誣ふ。匿名書あり。曰く、「伊達、最上は、豊臣を分ちて覇たらんと欲す」と。秀吉笑ひて曰く、「是れ怨家の爲す所のみ」と。乃皆之を釋す。淺野左京大夫の書記芹川藤助といふ者、亡命して三成に歸す。三成偽りて舊主、聚樂に通ずる書を作らしめて、之を上る。因りて兵を發して淺野氏を圍む。前田利家、爲に其寃を白す。秀吉、藤助を捕鞠して實を得、乃淺野氏に還して之を磔す。是より先、大納言秀俊卒す。秀俊も亦昏暴なり。嘗て崎野を觀、左右に命じて自湫に投ず。左右之と俱に没す。嗣なくして國除かれ、郡山を以て増田長盛に予へ、藤堂高虎を以て今治の城主と爲す。是の時に當りて、明の三使已に韓の境に入り、疑懼して敢て進まず。我に兵を撤せ

秀俊卒す

明の三使

慶長三年  
【朝服】大蛇の  
章ある服

明使

慶長

んことを請ふ。諸將、已むを得ず、成を釜山に約し、未だ海を濟りて歸るを肯せず。李宗誠は、貴族の子なり。日夜歸らんことを思ふ。惟敬、因りて遂ひて之に代らんと欲す。慶長元年正月、小西行長、歸りて和の成るを告ぐ。惟敬、私に之に従ひ、地圖、兵書、蟒服、及び燕、代の良馬三百匹を以て。秀吉に獻じて去る。宗誠を怖れしめて曰く、「和敗れたり。秀吉の兵、將に來りて我輩を執へんとす」と。四月、宗誠遁れ去る。楊方亨計を惟敬に問ふ。惟敬曰く、「兩語あり。汝慎みて之を記せよ。我が大明を擧げて日本に奉承するのみ」と。明主、遂に方亨を以て正使と爲し、惟敬を之が副とし多く金帛を出して惟敬に資し、封冊を齎して促し往かしめ、因りて韓をして使を發せしむ。韓、和議未だ固からざるを以て、依違として従はず。獨黃慎、朴弘長をして之に従はしめ、日を刻して發す。五月、秀吉、秀頼を以て朝見す。詔して、秀頼を從三位に叙し、右近衛中將に任せらる。六月、明、韓の使者、海を濟る。我が諸將乃兵を釜山に留めて凱旋す。行長、清正を嫉む。清正、三成を惡む。而して行長と善し。與に俱に之を譖る。清正、伏



見に至る。秀吉、見ゆるを許さず。乃増田長盛に就きて申救を請ふ。長盛曰く、「子、宜しく治部に謝すべし」と。清正曰く、「吾れ死すとも能はず」と。乃第に歸りて命を諒つ。七月、京畿大に風靡し、地大に震ふ。伏見城壊れ、歴死せし者、數百人。清正曰く、「吾れ寧罪を犯すとも、坐ながら視る可からず」と。乃卒二百を従へ入りて、秀吉を省す。秀吉、夫人と地に席して坐す。清正を目し、其幼字を呼びて曰く、「阿虎、若来る何ぞ速き」と。清正由りて前みて冤を訴へ、地に盡きて語り、其軍勞を陳ぶ。秀吉、顧て夫人に謂て曰く、「彼の肥誓の丈夫、今、朝鮮より

至る。何ぞ驚く且悴るゝか」と。乃命じて其門を守らしむ。三成以下踵ぎ至る。入るを得ず。命を傳ふる者あり、「特に三成を納れよ」と。清正、大聲、其卒に命じて曰く、「短小の倭豎をして入れしめよ」と。且日、秀吉、清正を召見して、海外の戦狀を推問し、泣を下して曰く、「阿虎襟裾より我に育はる。乃我に類する也」と。遂に愛遇すること故の如し。

清正記

主計頭清正は、太閤の御勅氣を蒙り、日本へ召さるゝを憚なく、仕懸りし。城普請等、夜を日につき成就之上、鍋島へ相渡し歸朝、伏見に參着し、日比田右衛門尉所へ直に參らる、折節長老を召し咄なればなり、奏者谷市助罷出づ。清正對面して、高麗より歸朝、其通申入られ候へとの事なれば、其段市助申せしかば、御通り候へとの事なれば、清正着座して申されけるは、我等只今高麗より直に貴殿へ參る事餘の義にあらざ、御存候様に治那少輔と中惡敷に依て、色々様々我等をさへ申に付、太閤實に思召、切腹仕候へとの急使有るに依て歸朝仕、治部めと我等中惡敷段、上にも内々御存之上、數年高麗陣中忠を盡し勳功にこそ預るべきに、讒言を實と思召、如斯之儀是非に及ばずと申、右衛門尉返答は、天下に隠なし、去りながら上への御断之儀は、治那少輔と中を御なほりなくば事濟まじ、誰か今の世に於て治部めなど、申者、日本中にあるべしや、治部と中を御直り有べきとの義ならば、明日にも我等治部へ申相濟べし、さなくば、御理の談合は成まじと申さる、清正返事に、八幡も御照覽あれ、治部